

(6) 昆虫類

【掲載種の解説（昆虫類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名等を各頁左上に記述した。目・科の範囲、名称、配列はレッドリストに従った。

【評価区分】

対象種の愛知県における評価区分を各頁右上に記述した。参考として「環境省レッドリスト 2019」の全国での評価区分も各頁右上に記述した。また、各評価区分に対応する英文略号も同じ場所に記述した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。

【選定理由】

対象種を愛知県版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。また、一部の種については写真を掲載した。

【分布の概要】

対象種の分布状況の概要を記述した。また、県内分布図については以下のとおりとした。

・トンボ目

愛知県内の各市町村（平成の大合併前の旧市町村）を単位とし、対象種の現状の生息状況を本調査結果及び過去のデータに基づき推定し、それぞれ「現存の可能性が非常に高い産地」、「現存の可能性のある産地」、「絶滅の可能性が高い産地」に分類・表示した。

・トンボ目以外

本調査及び過去のレッドデータブックあいち（2002年版ブック・2009年版ブック・2015年版リスト）作成時の調査において、対象種の生息が現地調査、文献調査及び標本調査によって確認された地域のメッシュ（標準地域メッシュ・システムにおける5倍メッシュ）を県内分布図として掲載し、現地調査による確認地域、文献調査または標本調査による確認地域を●印で表示した。なお、同一メッシュ内に含まれる生息地が複数であっても1点として表示した。

また、一部の詳細な分布情報を公表すべきではないと判断された種については、2次メッシュを用いて表示した。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息地の環境条件及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の愛知県における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用または記録として使用した文献を、著者、発行年、表題、雑誌名、掲載頁または総頁数、あるいは発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種に関連する文献のうち、代表的なものを、著者、発行年、表題、雑誌名、掲載頁または総頁数、あるいは発行機関とその所在地の順に掲載した。

【 昆虫類 執筆責任者 】

- ・トンボ目
吉田雅澄 安藤 尚 高崎保郎
- ・ナナフシ目、バッタ目、カマキリ目、ゴキブリ目
岡田正哉（故人） 水野利彦
- ・カメムシ目
矢崎充彦 浅岡孝知 澤田宗一郎
- ・コウチュウ目
長谷川道明 大平仁夫 蟹江 昇 戸田尚希 伊澤和義 山崎隆弘
- ・ハエ目
間野隆裕 廣永輝彦
- ・トビケラ目
西本浩之
- ・チョウ目チョウ類
江田信豊 高橋匡司 高橋 昭 魚住泰弘
- ・チョウ目ガ類
間野隆裕
- ・ハチ目
間野隆裕 大草伸治

【 昆虫類 調査協力者 】

次の方々に現地調査、標本・写真提供、資料参照等で協力していただいた。

名古屋昆虫同好会 三河昆虫研究会 三河生物同好会 日本昆虫学会東海支部
日本鱗翅学会東海支部

- ・トンボ目
鵜殿清文 大野 徹 小早川勝教 清水典之 成田茂生
- ・コウチュウ目
佐藤正孝（故人）
- ・トビケラ目
西本ふたば
- ・チョウ目チョウ類
浅野 隆 石木栄治 伊奈 紘 大鐘裕道 北岡明彦 白井和伸 高井則幸
水谷孝夫 山田昌幸 田中 蕃（故人）
- ・ハチ目
浅野邦史 石川進一朗 大熊千晶 中島和典

（敬称略）

トゲナベブタムシ *Aphelocheirus nawae* Nawa

【選定理由】

全国的にも近年の確実な産地はごくわずかで、本県では 1940 年代前後の古い記録があるだけで、その後正式には記録されていない。

【形態】

体長は 9～10mm。頭部、前胸背側縁は黄褐色を呈し、腹部背面は暗褐色の地色に側縁の黄褐色斑が目立つ。前胸背と腹節の側縁は後方に顕著に突出する。通常は短翅型であるが、稀に長翅型が出現する。

【分布の概要】

【県内の分布】

西尾市八ツ面、春日井市勝川橋付近（庄内川）、名古屋市昭和区石川橋付近（山崎川）の記録があり、山崎川で採集された標本だけが豊橋市自然史博物館に現存する。

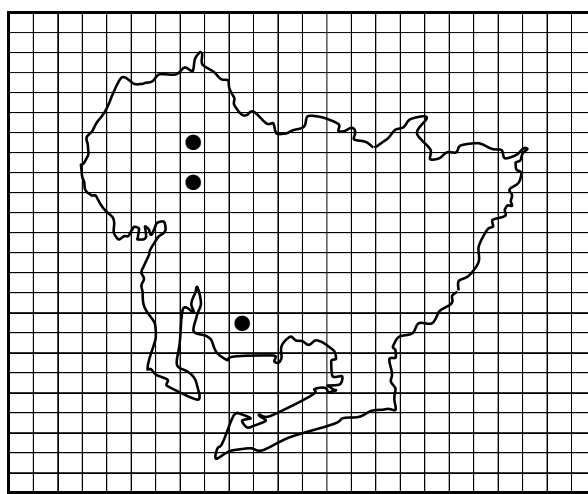
【国内の分布】

本州（東海以西）、九州。

【世界の分布】

ロシア（極東、東シベリア）、カザフスタン、北朝鮮、韓国、中国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平野部から丘陵地の河川で、底質が砂や細かい礫の早瀬に生息する。他県の生息地は、カワニナが多産し、淡水二枚貝やタナゴ類も豊富な環境であるが、兵庫県では改修された水路から多数の生息が確認されている（市川, 2018）。カワゲラやトビケラの幼虫など他の水生昆虫を捕食吸汁し、プラスチック呼吸により、終生水中で生活する。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては名古屋市内の山崎川でも多数生息していたとされるが、50 年以上確実な記録がない（長谷川, 2006）。護岸工事や生活排水の流入による河床環境及び水質の悪化が主因と考えられる。

【保全上の留意点】

現在ある自然状況に近い平野部の河川をそのまま保全することにあると考えられる。

【特記事項】

岐阜県の長良川近傍がタイプ産地である（名和, 1905）。隣接する本県は学術的にも重要な位置にあり、生息環境の詳細な調査や環境 DNA 調査といった最新の手法による再発見が望まれる。

【引用文献】

長谷川道明, 2006. 穂積俊文博士から寄贈された名古屋市産トゲナベブタムシの標本について. 豊橋市博研報, (16): 55-57.
市川憲平, 2018. II. 水中に住む水生半翅類の生活史と環境適応 1 コンクリート水路の絶滅危惧種・トゲナベブタムシ. 水生半翅類の生物学: 58-71. 北隆館, 東京.
名和 靖, 1905. 珍奇なる鍋蓋蟲に就て. 昆虫世界, 89: 4-7.

【関連文献】

林 正美・宮本正一, 2018. 半翅目 Hemiptera. 日本産水生昆虫 科・属・種への検索（第二版）: 329-427. 東海大学出版会, 神奈川.

（澤田宗一郎）

フタモンマルクビゴミムシ *Nebria pulcherrima pulcherrima* Bates

【選定理由】

本種は河川の礫と砂が混じる環境に生息する代表的な種だが、近年は全国的に生息の確認が困難になっている。県内においては、前回の調査からもまったく生息情報が得られず、かつて生息地があった庄内川においては本種の生息可能な環境が残されていないこと、隣接する岐阜県、三重県内にも生息地がないことから、県内では絶滅と判定した。

【形態】

体長 11~12.5mm の中型のゴミムシで身体は短太で平たく、前胸は心臓形で側縁が基方で強く湾曲する。全身赤褐色で上翅中央に一对の特徴的な大きな黒紋を有することからこの名があるが、斑紋には変異が多く、側縁と翅端を残して全体黒色となる個体もある。よく似たカワチマルクビゴミムシは、頭部の後縁と前胸背の中央部が黒色となることで区別できる。



名古屋市庄内川, 1941年5月4日, 穂積俊文 採集,
豊橋市自然史博物館蔵

【分布の概要】

【県内の分布】

1941年に名古屋市守山区竜泉寺下で採集された記録があり、この標本は、豊橋市自然史博物館に保管されている。この庄内川河川敷が唯一の記録地として知られている。これ以外では、1975年に名古屋市西区小田井町の庄内川遊水地で本種が採集されたという情報があり、庄内川には確実に生息していた。

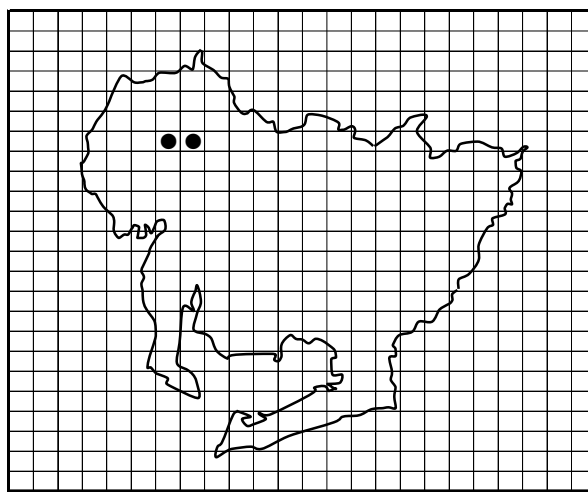
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、台湾。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河川敷の砂地から小砂利、礫の混じる環境に生息する。詳しい生態的特性は不明。

【現在の生息状況／減少の要因】

40年以上生息情報は途絶えている。砂礫地に生息する種であるので、砂防堤の建設によって生息環境が失われたことが原因と考えられる。

【保全上の留意点】

河川整備にあたっては、十分な環境影響評価を行うことが望まれる。

【関連文献】

岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.
穂積俊文, 1960. 東海甲虫誌(9). 佳香蝶, 12 (41): 17-23.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

カワラハンミョウ *Chaetodera laetescrpta laetescrpta* (Motschulsky)

【選定理由】

全国的にも生息地が急速に減少している。愛知県においては既知産地では生息情報は途絶えており、すでに絶滅したものと判定した。

【形態】

体長 14~17mm の大型のハンミョウで上翅の白紋と外縁の白帯は融合する。一般に太平洋側の個体群は日本海側の個体群より黒化する傾向が認められるが、木曾川流域産の個体群は白化する傾向があり、特徴的である。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県からは渥美半島伊良湖岬（佐藤, 1980）、南知多町内海（穂積, 1974；佐藤, 1980）、名古屋市守山区竜泉寺（佐藤, 1980）、名古屋市守山区庄内川（穂積ほか, 1975）、愛西市（旧八開村）（安藤, 1982）、稲沢市（旧祖父江町）（安藤, 1982）、一宮市（旧尾西市）（安藤, 1982）にかけての木曾川河川敷から記録されているが、最近の生息情報が全くない。

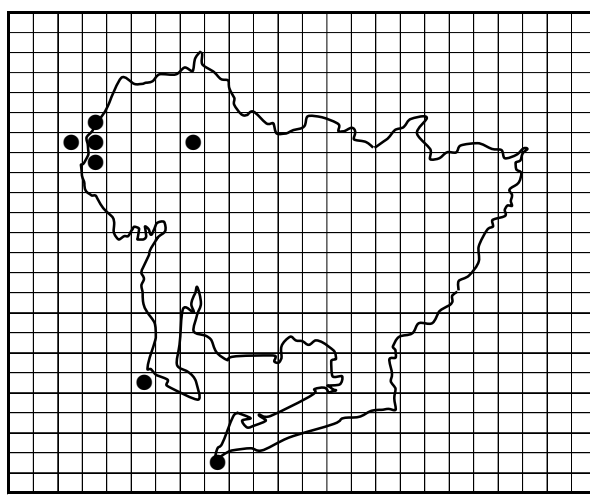
【国内の分布】

北海道、本州、九州、四国の河川敷や海岸の砂浜に分布している。

【世界の分布】

朝鮮半島、濟州島、中国、サハリン、モンゴル、シベリア東部。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

海岸や河川敷の砂地に局所的に生息し、成虫・幼虫ともに小動物を捕食する。成虫は 8 月中旬に現れる。

【現在の生息状況／減少の要因】

木曾川流域では 1990 年代前半から急速に個体数が減少し、1995 年以降は度重なる調査においても発見できないことからすでに絶滅している可能性が高い。渥美半島の海岸線に未知の生息地が見つかる可能性を期待するが、状況はかなり厳しいと言わざるを得ない。

減少要因として挙げられるのは、海浜や河川敷の汚染や護岸改修による生息地の破壊、また上流でのダム建設によって流下する砂が減少し、砂浜の面積そのものが減少したり、草地化したりしたこと等が考えられる。さらに、近年のアウトドアブームにより河川敷への人の侵入が増えたこと、特に四輪駆動車やサンドバギーなどの砂浜への乗り入れによる生息地の破壊は大きな原因と考えられる。

【保全上の留意点】

木曾川流域の生息地については、生息地への立ち入りや車の乗り入れは慎むべきである。ダム建設による下流・海岸での砂浜の減少は、本種だけでなく河川や海浜の生態系に非常に大きな弊害を与えており、長期的には、河川敷の生態系の保全が必要である。

【引用文献】

- 安藤 尚, 1982. 木曾川河原のカワラハンミョウ. 尾張の自然を考える会々報, (6): 1-3.
- 穂積俊文, 1974. 東海甲虫誌(20). 佳香蝶, 26 (100): 105-116.
- 穂積俊文・松井一郎・佐藤正孝, 1975. 庄内川の昆虫. 建設省庄内川工事事務所.
- 佐藤正孝, 1980. 環境庁編, 日本の重要な昆虫類, 東海版: 84-92.

【関連文献】

- 岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.
- 戸田尚希・長谷川道明・蟹江 昇, 2019. 愛知県の甲虫目録 3. 佳香蝶, 71 (277): 1-11.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

マルガタゲンゴロウ *Graphoderus adamsii* (Clark)

【選定理由】

かつては、平野部～丘陵地の止水域に分布したと推測されるが、全国的に減少が著しい。県内においては、3例の記録があるが、いずれも1960年以前のものであり、近年はまったく確認されていないことから絶滅と判定した。

【形態】

体長12～14mm。体型は卵形でよく盛り上がり光沢がある。背面は黄褐色。頭部に黒色のV字紋がある。前胸背は前・後縁に黒横帯紋がある。上翅は基部と会合部が細く黒色で、網目紋様も黒色。体下面は暗赤褐で、前胸と側片は暗黄褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市と豊田市からの記録、標本が残されているが(穂積・佐藤, 1957; 長谷川, 2002)、60年以上生息確認がされていない。

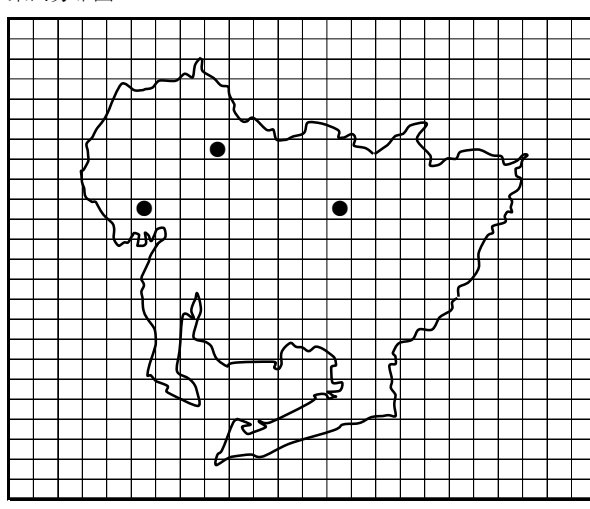
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【国内の分布】

中国、朝鮮半島。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平野から丘陵にかけての水田、池沼など各種止水域に生息していた。水草などが生育する水域に多いが、生態についてはよく判っていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

上記3例以外の生息情報はない。水田の圃場整備、水質の汚染などによる生息地の減少、環境悪化が主要な減少の原因と推測される。

【保全上の留意点】

遺伝的な多様性については詳しい研究がなされていないので、安易な移入による人為的な回復を図るのは禁物である。現在ある自然度の高い池をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【引用文献】

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.
穂積俊文・佐藤正孝, 1957. 東海甲虫誌(第3報). 佳香蝶, 9 (31): 1-10.

【関連文献】

佐藤正孝, 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース (65): 1-4.

(長谷川道明・蟹江昇・戸田尚希)

コガタノゲンゴロウ *Cybister tripunctatus lateralis* Fabricius

【選定理由】

1950年代までは各水域に見られたが、1960年中頃以降まったく生息情報がないことから絶滅と判定した。全国的にも非常に少なくなり、現在本州での生息地は数えるほどしか残されていない。また、残された生息地でもオオクチバスなどの外来魚の捕食圧が大きな脅威となっている。



名古屋市守山区吉根, 1959年, 森部一雄 採集,
豊橋市自然史博物館蔵

【形態】

体長 24~29mm。体系は長卵形でやや扁平。背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で強い光沢がある。頭楯、上唇、前胸背および上翅の側縁は黄色。体下面は暗赤褐色で、腹部 3~5 節の側方に黄褐小紋を有する。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市港区土古 (1942年採集)、名古屋市守山区 (1959年採集)、蒲郡市 (1949年) の記録が残されており、かつては平野部を中心に広く分布していたことが推測される。1960年中頃以降記録がない。

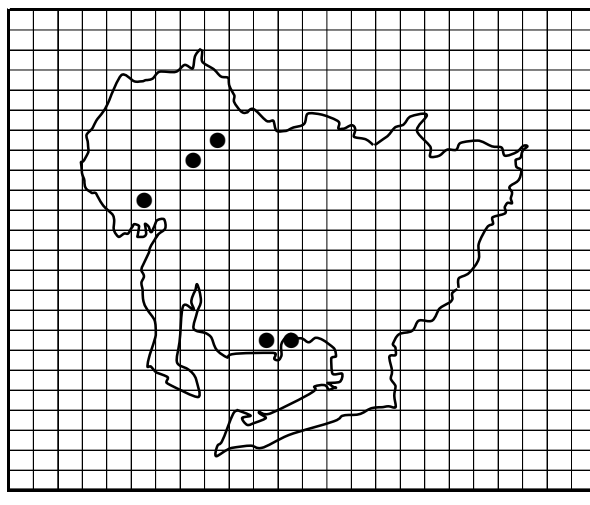
【国内の分布】

本州、四国、九州、南西諸島、小笠原諸島。

【世界の分布】

台湾、中国、朝鮮半島。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平野部の水田をはじめとする水域に普通であった。南方系の種として、夏期に南からの供給によって増殖していた可能性があり、はたして愛知県内で越冬できていたのかも不明のままである。

【現在の生息状況／減少の要因】

1950年代までは各水域に見られたが、1960年中頃以降まったく生息情報がない。1960年代からの農薬の大量使用、圃場整備等による生息地の消失と併せて、温暖な海岸線近くの水域が失われたことが、南方系の本種の個体群の維持や分布の拡散に支障をきたし、急激な減少の大きな要因になったのではないかと推定されるが、実状は解明されていない。現在でも南西諸島ではよく見られ適応環境も広い。

【保全上の留意点】

侵略的外来種を根絶し、各種水域の自然環境を回復することによって、どこかに残存している個体による復元を待つ以外ない。他の水生昆虫類も最近では回復の兆しが見え始めているので期待したい。遺伝的な多様性については詳しい研究がなされていないので、安易な移入による人為的な回復を図るのは禁物である。

【関連文献】

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.

長谷川道明, 2017. 豊橋市自然史博物館に新たに収集された東海地方産絶滅危惧甲虫の標本について. 豊橋市自然史博物館研究報告, (27): 31-35.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

シャープゲンゴロウモドキ *Dytiscus sharpi* Wehncke

【選定理由】

本州ならびに佐渡に分布し、12 都府県から記録されているが、大多数の地域ですでに絶滅しており、現在残る生息地は数箇所しかないうえ、ペット業者やマニアなどによる不法な採集行為、外来魚による捕食圧、圃場整備による生息地の消失など大きな絶滅の脅威にさらされている。愛知県ではこれまで本種と思われる古い採集記録が 1 例存在したが、標本が現存せず、検証できなかったために保留扱いとされていた。その後、2007 年に豊橋市で江戸時代中期の遺跡より本種が発見され、かつて県内にも分布していたことが確実となったため、県内から絶滅したと判定した。

【形態】

体長 28～33mm。オスは長卵形、メスでは卵形。背面はわずかに緑色を帯びた黒褐色で、前胸背は両側が黄色に縁取られる。腹面は暗赤褐色。後基節突起の先端は丸まる。メスの上翅には通常各 10 条の縦溝がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市の江戸時代遺構から産出している（長谷川, 2007）他、江上（1943）が「コゲンゴロウモドキ *Dytiscus validus*」として瀬戸市定光寺から記録した種も本種である可能性が高い。

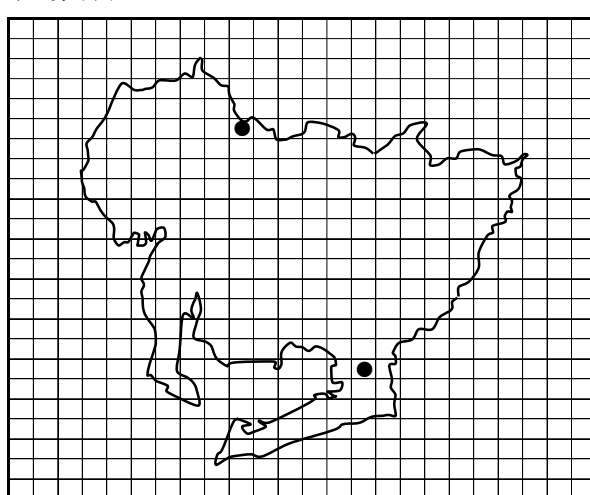
【国内の分布】

本州（千葉、東京、神奈川、新潟、富山、石川、福井、愛知、滋賀、京都、大阪、島根）、佐渡。

【世界の分布】

本州の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地の水田、休耕田、放棄水田などに生息する。新成虫は 8 月～9 月に出現し、成虫越冬する。冬期でも水域で活動することが観察されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

上記 2 例以外の生息情報はない。戦後の農薬の大量使用、生活污水などによる水域の汚染、圃場整備等による生息地の消失が要因として考えられる。

【保全上の留意点】

現在ある自然度の高い池をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残す唯一の方法であるばかりでなく、多くの水生生物にとっても有効な保全手段となる。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。遺伝的な多様性については詳しい研究がなされていないので、他地域からの安易な移入による人為的な回復を図るのは禁物である。

【特記事項】

種の保存法で国内希少野生動植物種に指定されている。

【引用文献】

長谷川道明, 2007. 愛知県豊橋市の江戸時代の遺構から発見されたシャープゲンゴロウモドキ. 豊橋市自然史博物館研究報告, (17): 25-28.
江上信雄, 1943. 名古屋市外‘定光寺’付近の水棲昆虫. 採集と飼育, 5 (3): 78-79.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

スジゲンゴロウ *Hydaticus satoi* Wewalka

【選定理由】

愛知県では 1950 年代には採集されていたが、1960 年代以降どうしたこともまったく姿を消してしまった。国内においても近年の生息記録はなく、絶滅と判定されている。

【形態】

体長 12~14mm。体は長めの卵形で背面に光沢がある。背面はほぼ黒色で、頭部前半、前胸背面側、上翅両側の 2 縦条は黄褐色。体下面と肢は赤褐色。上翅の縦条は、外縁に沿っているがその内側にある 1 条は中央やや後方で癒合する。



名古屋市守山区吉根, 1959 年, 森部一雄 採集,
豊橋市自然史博物館蔵

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市港区土古、名古屋市守山区、瀬戸市定光寺、安城市、蒲郡市などでの記録が残されており、かつては平野部を中心に広く分布していたことが推測される。

【国内の分布】

本州（関東以西）、四国、九州、トカラ列島の中之島。

【世界の分布】

台湾、中国、フィリピン、東南アジア。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部から丘陵地の池や水田に生息していた。

【現在の生息状況／減少の要因】

本県での生息情報は、すべて 1960 年以前のものである。本県を含め、本州からの近年の生息情報はまったくない。減少・絶滅の要因としては、平野部に偏って分布する種であったことから、宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失、改変、農薬散布による影響を強く受けたことが考えられるが、詳細は不明の部分が多い。

【保全上の留意点】

現在同種とされる種が東南アジアに広く分布しているが、遺伝的な多様性については詳しい研究がなされていないので、安易な移入による人為的な回復を図るのは禁物である。現在ある自然度の高い池をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【特記事項】

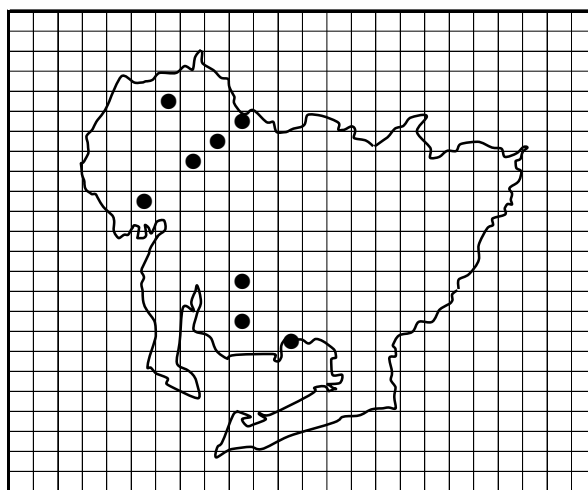
古い記録では、本種の学名は *Hydaticus vittatus* (Fabricius) となっているが、表記種名に変更された。現在ではオキナワスジゲンゴロウに *H. vittatus* の学名が当てられている。

【関連文献】

- Satô, M., 1961. *Hydaticus vittatus* (Fabricius) and its allied species (Coleoptera, Dytiscidae). Trans. Shikoku ent. Soc., 7(1/2): 54-64.
- 長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.
- 長谷川道明, 2017. 豊橋市自然史博物館に新たに収集された東海地方産絶滅危惧甲虫の標本について. 豊橋市自然史博物館研究報告, (27): 31-35.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

県内分布図



マダラシマゲンゴロウ *Hydaticus thermonectoides* Sharp

【選定理由】

生息地である貧栄養的な止水域という条件のある池が極端に少なくなり、生息域が限定されている。愛知県では2例の採集記録が知られるが、いずれも1960年代以前のもので、既知産地では生息環境が失われ、その後他地域からも含めて生息情報がないことから絶滅と判定した。隣接する三重県内では比較的生息地が多かったが、1990年代以降減少が著しく、安定した生息地は失われている。

【形態】

体長9～10mm。体は卵形。頭部は淡黄褐色で微細点刻を有する。前胸背は後縁が暗色であるが、全体淡黄褐色。上翅は淡黄褐色で小黑点を散布するが、両側、基部、翅端付近に黒点は少なく紋様状となる。体下面は赤褐色。肢は黄褐色で後肢はやや暗色。

【分布の概要】

【県内の分布】

美浜町のため池（1962～1964採集）、名古屋市守山区志段味（1959年採集）の記録が残っているのみ。

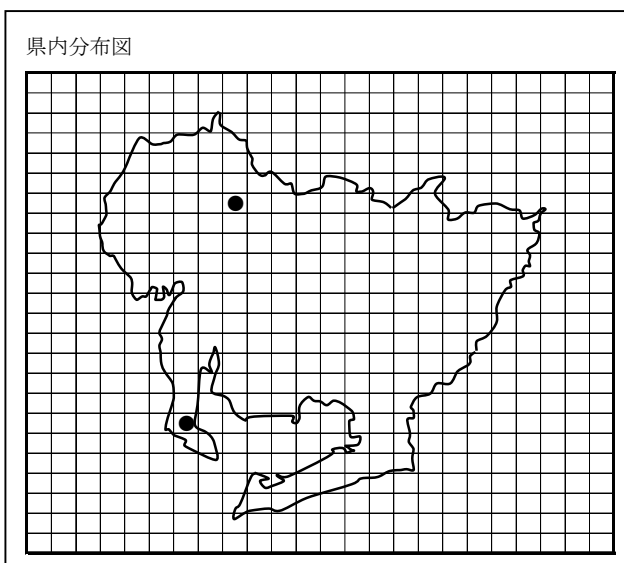
【国内の分布】

本州（長野県を基準産地として記載された種であるが、その後は愛知県と近畿地方に限られる）。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

水がきれいで冷たい貧栄養的な止水域で、ジュンサイの生育するような小さい池に生息している。生態については何も判っていない。かつて多産した三重県伊賀市では、丘陵地にある小規模で浅い池や棚田の最上部にある水域に生息地があった。

【現在の生息状況／減少の要因】

これまでの記録のある美浜町のため池は、農業用水のために使用されていて存在はしているが、周辺開発の影響が大きく現在の生息は確認できていない。また、名古屋市守山区についてもほぼ同様。宅地開発、水田の圃場整備等による環境改変により生息地が消失したことに加え、農薬散布、外来種アメリカザリガニによる影響が考えられる。

【保全上の留意点】

貧栄養的な止水域を保全し、三重県などに残存している個体群の回復・拡大による自然復元を待つ以外ない。そのためにも、アメリカザリガニ、ブルーギル、オオクチバスといった侵略的外来種の根絶が必要である。

【特記事項】

種の保存法で国内希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

佐藤正孝, 1971. 知多半島の水生甲虫類. 日本昆虫学会東海支部報, (24): 2-3.

長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

マルエンマコガネ *Onthophagus viduus* Harold

【選定理由】

従来、愛知県から見つかっていなかったが、過去の古い標本を確認する機会を得た際、本種を確認することができた。採集地は現在、宅地になっており、生息環境が残されていないことから絶滅と判定した。

【形態】

体長 5.0~1.0mm。やや光沢のある黒から黒褐色。雄の前胸背板には中央に二つのコブ状突起を持つ。近縁のコブマルエンマコガネは普通に分布しており、同定には注意が必要である。

本種は、上翅の基部・翅端部に顕著な黄色紋を持つ個体群も知られるが、確認した標本は全て紋を持たなかった。

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市、西尾市。

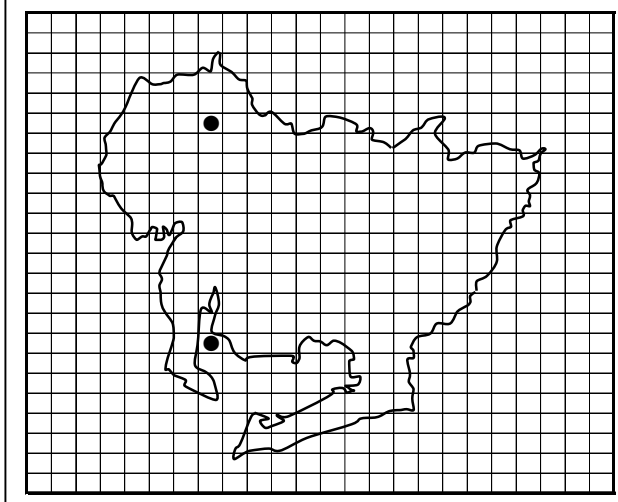
【国内の分布】

日本全国。

【世界の分布】

シベリア東部、中国、韓国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河川敷や放牧地などのオープンランドから見つかることが多く、新鮮な牛糞を好み、犬・人・水牛などの糞にも集まり、腐敗動物質でも得られている（川井ほか, 2005）。

【現在の生息状況／減少の要因】

春日井市の生息地は、かつて大学所有の農場であったが、規模が縮小され、現在は宅地になっている。西尾市の生息地は、完全に宅地の真ん中になっている。

【保全上の留意点】

県内では、古くからある放牧地が激減、あるいは山間部へと移転し、生息環境が失われたものと考えられる。本州からは激減している。

【引用文献】

川井信矢・堀 繁久・河原正和・稲垣政志, 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第1巻 食糞群. 六本脚.

【関連文献】

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編, 1985. 原色日本甲虫図鑑(II), 514pp. 保育社.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヒメビロウドカミキリ *Acalolepta degener* (Bates)

【選定理由】

県内においては、1952年に豊根村で採集された標本と1955年に「段戸」から採集されたという記録が残されているのみである。最後の生息情報から50年以上経過しているため、絶滅と判定した。

【形態】

体長8.5～12mm。ビロウドカミキリ類の中にあつては際だって小型の種である。褐色で、灰白色の微毛による不規則な白色部がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村と設楽町で古い記録がある。

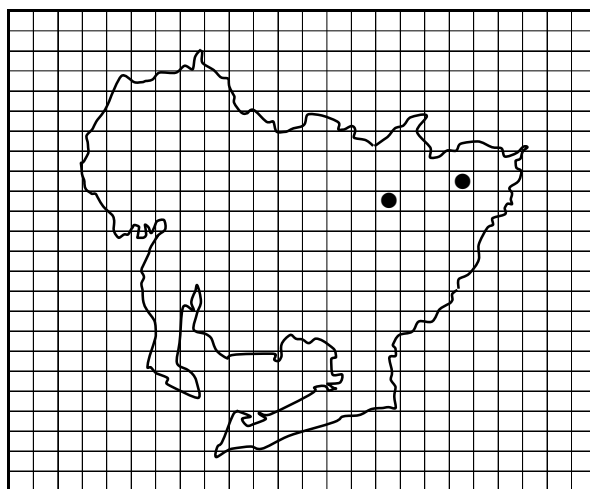
【国内の分布】

本州、四国、九州、対馬に分布する。

【世界の分布】

台湾、朝鮮半島、ロシア沿海州から記録がある。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

低山地から山地の草原に生息する。成虫は6～8月に出現し、オトコヨモギやヨモギの葉や茎を後食する。幼虫はオトコヨモギの生茎内、あるいは生根内に穿孔する。

【現在の生息状況／減少の要因】

50年以上にわたって生息情報が途絶えており、県内には生息環境が残されていない。本種を含む草原性の種には絶滅が危惧される種が多く含まれる。これは、元々我が国に草原的な環境が少なく、生息基盤が脆弱であったことに加え、戦後、自然草原、半自然的な草原面積が急激に減少したことで、半ば人為的に営まれてきた草原への農薬使用等の影響などが考えられる。

【保全上の留意点】

現在残る自然草原あるいは半自然的な草原環境を保全することが必要であろう。東京都の多摩川や静岡県の天竜川の河川敷で、近年生息地が発見されていることから、今後河川敷を中心に調査が行われ、生息地が再発見されることに期待したい。

【関連文献】

湯沢宣久・蟹江 昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 389-433. 愛知県.
竹内克豊・原田猪津夫・松野更一, 1980. 愛知県北設楽郡のカミキリムシ. 愛知県豊根村の動物: 231-285.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

アサカミキリ *Thyestilla gebleri* (Faldermann)

【選定理由】

県内では 1951 年に東栄町御菌から記録されたものが唯一の生息情報となっている。戦後全国的に急速に減少した種であり、県内ではすでに 50 年以上生息情報が途絶えているため、絶滅と判定した。

【形態】

体長 10～15mm。ややずんぐりとした体型をしたやや厚みのあるカミキリムシ。黒色で、前胸背正中中部と両側および上翅会合部に白条がある。日本産は、韓国産と比較的似ており、上翅が灰白色の微毛に覆われ、白っぽく見える個体が多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

東栄町御菌で採集された古い記録があるのみ。

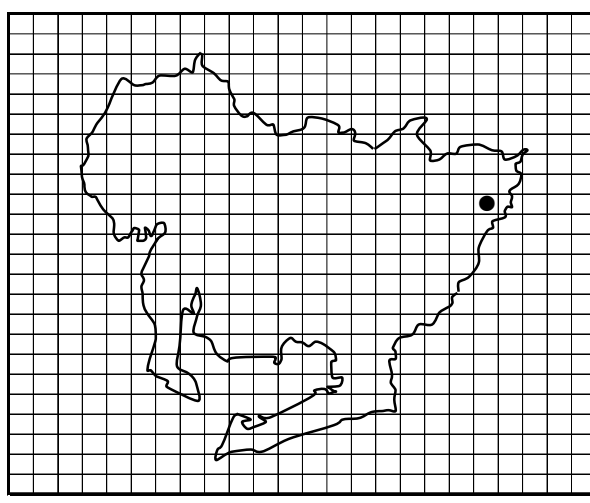
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布。

【世界の分布】

朝鮮半島、沿海州、中国東北部にかけて広く分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

山地の草原に生息する。成虫は 5～8 月に出現し、アサ、アザミ類の新芽を食べる。海外では、オオマツヨイグサも寄主植物として知られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

戦前アサの害虫として知られた種であるが、戦後、麻薬取締法によりアサの栽培が制限されるのにもない全国的に急速に減少したといわれる。現在確実に生息している場所は全国でも数えるほどしかない。県内では 50 年にわたって生息情報が途絶えている。

【保全上の留意点】

日本では、アサの害虫として分布拡大し、アサの栽培の禁止とともに激減したと伝えられている。こうした背景から本種の保全は単純ではない。他県では、農薬などを使用しない自然草原、あるいは半自然的な草原が生息地となっており、開発行為に非常に弱いことが指摘されている。

【関連文献】

湯沢宣久・蟹江 昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 389-433. 愛知県.
竹内克豊・原田猪津夫・松野更一, 1980. 愛知県北設楽郡のカミキリムシ. 愛知県豊根村の動物: 231-285.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

シルビアシジミ *Zizina emelina* (de l'Orza)

【選定理由】

愛知県から本種が初めて記録されたのは 1950 年、稲沢市（旧中島郡祖父江町）の木曾川堤防からであった。その後、庄内川や矢作川などの堤防からも 1950 年代に生息が確認されたが、1961 年瀬戸市の記録を最後に報告がないこと、また、近隣諸県でのかつての産地でも近年の採集例がまったくないことなどから、愛知県からは絶滅したものと考えられる。なお、本県から「三河川合、大島川、1972 年 10 月 8 日」という 1 匹の標本が偶然発見されている（高橋, 2003）。

【形態】

都市部の人家周辺などにも普通に見られるヤマトシジミに一見類似した小型のシジミチョウで、♂の翅表は青藍色、♀の翅表は黒褐色、春型はやや大きい。両者の区別は、後翅裏面の中央やや外側の黒点列が、ヤマトシジミでは円弧状に配列しているが、本種では前縁から二つ目の黒点が内側に大きくずれている。近似種のヒメシルビアシジミ *Z. otis* は、2006 年にシルビアシジミから分離された種で、シルビアシジミに比し、裏面は淡褐色、黒点が不明瞭などの差異がある。ヒメシルビアシジミは南西諸島に産し、九州以北には分布しない。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では、木曾川、庄内川、矢作川の堤防が主な産地であった。このほか知多半島や瀬戸市などからも記録があるが、その生息地の詳細は報告されていない。

愛知県の近隣県では、静岡県県の天竜川、長野県木曾郡奈良井川、岐阜県長良川、杭瀬川、牧田川、三重県桑名市町屋川、「湯の山」などから記録されたことがある。

【国内の分布】

関東地方以南の本州、四国、九州に分布する。種子島が南限となり屋久島からは知られない。

【世界の分布】

国外では、朝鮮半島に日本産と同じ亜種が、雲南省など中国に別亜種が知られる。

【生息地の環境／生態的特性】

本種の典型的な生息地は河川の堤防草地である。幼虫の主食草はマメ科のミヤコグサであり、丈の高い草本が茂る草地には食草が自生できず、放置されてススキなどが優勢になると食草とともにシルビアシジミも生息できなくなる。食草として、このほかウマゴヤシ、コマツナギなどが知られている。最近、大阪府や兵庫県では、シロツメクサに発生することも報告された。

愛知県以外では、河川の堤防のほかに、鉄道線路脇や海岸の小さな草地、空港の滑走路周辺の草地、なども生息地として知られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

食草のミヤコグサは木曾川、矢作川の堤防で著しく減少しており、最近数年間はその自生を確認できない。矢作川の堤防では、ススキ、クズなどが繁茂し、また運動場や駐車場に整地された所もある。堤防上の道路はすべて舗装されたことも食草の自生や本種の生息に不利な環境を作り出した。しかし、日本全国的な減少の原因については、食草の自生地の減少が考えられるが、なお明らかでない点が多い。

【保全上の留意点】

本種の減少の主原因は食草の自生が減ったことであり、その保全がまず望まれる。日本で最初に本種が発見された栃木県鬼怒川流域では、堤防の草刈の時期と方法について検討されており、また食草の生育を阻害しているとされるシナダレスズメガヤの除草を行い、ミヤコグサの減少阻止、シルビアシジミの保全に成果を挙げている。

【特記事項】

本種の和名の「シルビア」は、かつて *Zizera sylvia* と命名した中原和郎が長女の名に因んだものである。ただし、現在この学名は使用されていない。

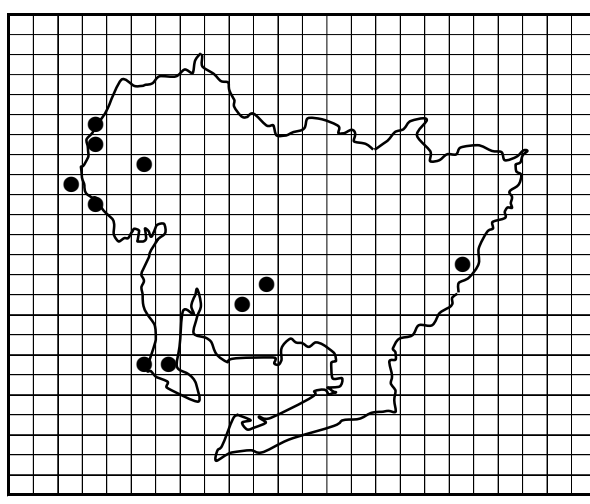
【引用文献】

高橋 昭, 2003. 「三河川合、大島川, 8.X.1972」のシルビアシジミ. 佳香蝶, 55 (215): 59.

【関連文献】

特集「シルビアシジミ最近の研究成果」, 2007. 昆虫と自然, 42 (6): 1-33.

県内分布図



ヒョウモンモドキ *Melitea scotosia* Butler

【選定理由】

本種は、北関東から山口県までの本州から記録されているが、局所的であり、1960～1970年にかけてこれらの多くの産地で急速に姿を消した。

愛知県では1960～1963年に成虫や幼虫が確認されているが、以来その生息は知られていない。

【形態】

前翅長約30mmの中型のタテハチョウ。♂は名の示すように翅表は明るい橙色地に黒紋をもつ。♀は褐色調が強、黒い斑紋も大きく、容易の区別ができる。ヒョウモンチョウ類に一見似ているが、形態も生態も異なる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では豊田市（旧小原村・藤岡町）が唯一の産地であった。

【国内の分布】

日本では本州のみから知られる。中部地方では長野県と山梨県に産地が比較的多かった。岐阜県では飛騨山地と東濃とからのみ知られ、近畿地方からは未知、中国地方の山地帯にはいくつかの孤立した産地がある。

【世界の分布】

国外では、朝鮮半島、中国の東北部と北部に分布する。かつてはヨーロッパに産する *M. phoebe* の亜種とされたが、現在では東アジアの特産の独立種とされる。

【生息地の環境／生態的特性】

本種の産地の多くは標高400～1,000mの山間のマアザミなどが自生している明るい湿地や湿性草原であり、極めて局所的である。幼虫の食草は、長野県ではタムラソウ、ノアザミ、ノハラアザミなどのキク科、愛知県での食草はキセルアザミ（マアザミ、サワアザミ）であった。キセルアザミの分布は、必ずしも局地的でなく、ノアザミやタムラソウは山地での分布は広い。愛知県の産地は、丘陵の窪地に生じた湿地で、周辺はマツの幼木の生えた疎林であった。本種とともにヒメヒカゲやウラナミジャノメを産し、晩夏になると湿地周辺のワレモコウにゴマシジミが見られた。

成虫は、年1回6月頃から羽化し、高標高の産地では7月に最盛期を迎え、1～2週間後から産卵が始まる。成虫の見られる期間は1か月以内と短い。幼虫は年内に5齢に成長し、巣を作り、集団をなして越冬し、翌春9齢まで達し、蛹化、羽化する。成熟幼虫は単独で行動する。

【現在の生息状況／減少の要因】

日本産の蝶の中でオオウラギンヒョウモンと本種が絶滅の危惧がもっとも高い。愛知県では、1960年6月9日に豊田市（旧西加茂郡藤岡町）三箇の標高460mの湿地で1♂が採集されたのが最初の発見である。同月19日には4頭採集、20頭目撃、翌1961年4月には21頭の幼虫が採集、6月11～18日に16頭の成虫が採集された。1963年6月23日に1♀が採集されたのが最後で、以来愛知県からは確認されていない。このほか、同市（旧小原村）大平と北においても目撃記録がある。長野県の最南の産地であった下伊那郡売木村では1968年の記録が最後である。かつて多産地が少なくなった長野県全体でもほぼ同じころから激減し、近年の記録がない。兵庫県は1976年の記録が最後であるという。このように日本全国の産地から、ほぼ同じ頃に本種が姿を消したことから、産地の局所的な理由というよりは、種そのものの内在する原因、または日本全体に共通する環境的原因が考えられるが、明らかにはされていない（高橋、1976）。

【保全上の留意点】

本種は少なくとも現時点では愛知県から絶滅したものと考えられる。もし、県下で再発見されるようなことがあれば、環境全体の保全など緊急の対策を講ずる必要がある。

【特記事項】

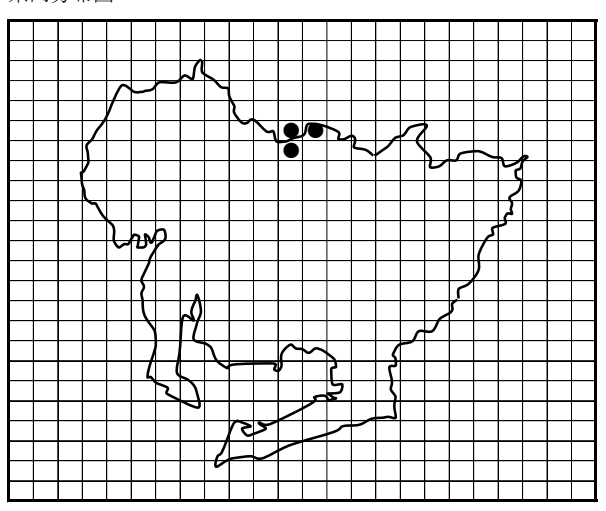
英国では、近似種が一時的に著減したが、のち回復したという事例がある。種の保存法で国内希少野生動物種に指定されている。

【引用文献】

高橋 昭, 1976. 名古屋地方のヒョウモンモドキ. とくに extinction 消滅について. 佳香蝶, 28(107): 33-37.

(2009年版を一部修正)

県内分布図



オオウラギンヒョウモン *Fabriciana nerippe* (C. et R. Felder)

【選定理由】

過去に生息していた記録はあるが、現存を確認できない。国内で最も減少したチョウの一つであり近隣の三重県、岐阜県、静岡県などでは、既に絶滅と評価され現在にいたっている(間野ほか, 2009)。

【形態】

本種はウラギンヒョウモンと混同、あるいは誤って同定されることが多い。和名オオウラギンヒョウモンは“大型のウラギンヒョウモン”である。他のヒョウモン類と比べて一般に大型、特に♀は著しく大型になる。♀の前翅端近くに白斑を現すが、この白斑は♂には出現しない。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市近郊(1937)、南知多市(1956)の二か所の報告があるものの採集年月日、具体的な採集地などのデータが明記されていないし写真も標本も現存していない(阿江ほか, 2002)。また、レッドリストあいち 2015 策定時の調査で新たに見つかった文献によると、本種は名古屋市北区の矢田川 JR 中央線鉄橋の左岸堤防で確認されている(加藤, 1942)。

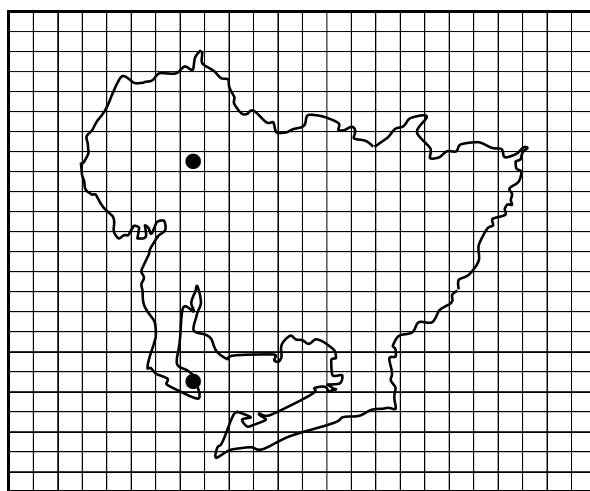
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布していた。現在では、九州と山口県の一部を除いたほとんどの記録地で絶滅している。

【世界の分布】

日本、ロシアのウスリーやアムール地区、朝鮮半島、中国東北部、中国など。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

草刈り頻度の高い草丈の低い草原に生息、アザミ類やオカトラノオなど各種の花を訪れる。

【過去の生息状況／絶滅の要因】

他県での現在の生息地は、規模の大きい草丈の低い草原、例えば自衛隊の演習地などである。

本県では、1939年に名古屋市の矢田川 JR 鉄橋の左岸で一日に十数頭が確認されたが、翌年にはまったく確認されていない(加藤, 1942)。

減少の原因も本種の好む草原環境が開発や管理放棄で減少、孤立したことも一因と考えられているが、詳細は不明である。

【保全上の留意点】

本種の減少はスミレ類全般の減少とは考えにくい。

現時点では調査する機会もなく本種が激減しているの、生息地の特徴などを特定することは困難であり、また本種の生態に不明な点も多く、具体的な保全の提案は難しい。しかし、本種を含め草原性のチョウ類が全国的に減少していることから草原の保全は有効である。

【特記事項】

2009年検討の折、本種の標本や確実な文献などがなかったことから評価対象外としていたが、本種の生息が確認できる文献(加藤, 1942)が、今回新たに発見された。

【引用文献】

- 加藤一三, 1942. 學林, No.117. 愛知県第一中学校.
阿江 茂ほか, 2002. オオウラギンヒョウモン. レッドデータブックあいち動物編 2002: 195. 愛知県自然環境課, 愛知県.
間野隆裕ほか, 2009. 日本産蝶類の衰亡と保護第 6 集: 170-187. 日本鱗翅学会, 東京.

【関連文献】

- 白水 隆, 2006. オオウラギンヒョウモン. 日本産蝶類標準図鑑, p.219. 学習研究社, 東京.
日本チョウ類保全協会編, 2012. オオウラギンヒョウモン. フィールドガイド日本のチョウ, p.199. 誠文堂新光社, 東京.

(2015年リスト付属資料を一部修正)

コバネアオイトトンボ *Lestes japonicus* Selys

【選定理由】

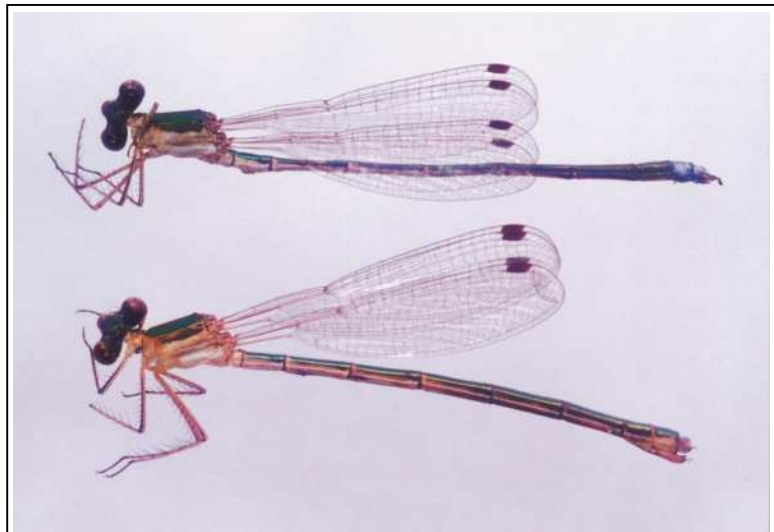
旧市町村単位の絶滅率は100%、現存数は0であり、絶滅危惧 I A 類に相当する（絶滅率・現存数については、資料編：評価方法の詳細を参照）。

愛知県産トンボで、記録が絶えて最も久しい種である。

【形態】

金属光沢のある緑の体色をもつ可憐なイトトンボである。邦産のアオイトトンボ属 4 種中、最も小さい。

和名は同属他種に比べて翅幅がやや広く、翅が短く（=小さく）見えることに由来する。



上♂, 下♀.
名古屋市千種区田代町, 1951年10月6日, 高崎保郎 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平野部から丘陵地にかけての15市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、おもに平地から丘陵地にかけての抽水植物の多い、古い池沼に生息する。未熟成虫は、同属のアオイトトンボ等のように林縁へ移動せず、羽化した付近の抽水植物内で過ごすようである。幼虫は、抽水植物などにつかまっている。秋に産卵された卵はそのまま越冬して翌春孵化し、夏季に羽化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在、県内に確実な産地はない。1980年代の刈谷市での記録が最後と思われる。

本種は植生環境の破壊等、微妙な環境変化

に弱く、他種に先駆けて絶滅することが各地で確認されている。さらに、新天地を求めて移動・分散する力が小さいことも減少に拍車をかけたと考えられる。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域となる岸辺のヨシ原等の確保
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の草地の確保
- 3) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

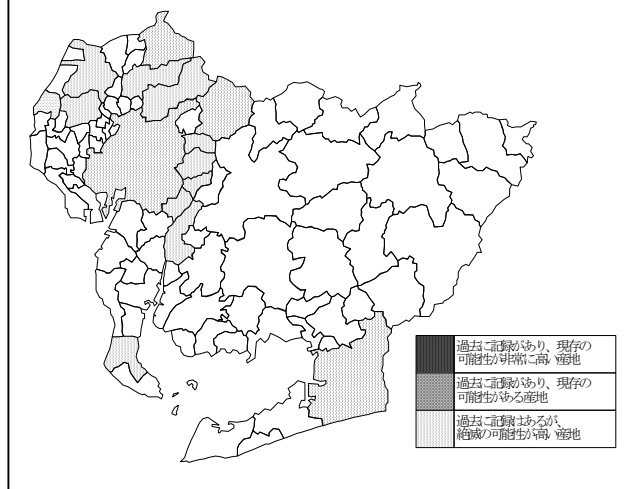
本種は全国的にも産地が限定され、その原因として、♀の産卵管の未発達による被産卵植物の狭選択性を理由とする見方があるが、比較的組織の堅いヨシやガマへの産卵も見られることから、必ずしもそれだけが分布を決定づけている訳ではなさそうである。

隣県の状況は、三重県は伊賀地方に1箇所、静岡県は西部地方に1箇所現存し、岐阜県は絶滅している。東海地方としてみても危機的な状況にある。

関東地方でほぼ絶滅している本種が、1996年に横浜市の新しく造成したトンボ池で突然発見された。同池には本種が現存する兵庫県から水草が移植されており、本種の卵も水草と同時に移植されたようである。数年後に同池ではアメリカザリガニが大発生し、それと同時に本種は絶滅したという。安易な植物の移植が生態系を乱す例として紹介しておく。

(吉田雅澄)

県内分布図



マダラナニワトンボ *Sympetrum maculatum* Oguma

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は96%、現存数は0.5であり、絶滅危惧 I A 類に相当する。

県内の産地はほぼ壊滅したので絶滅危惧 I A 類に変更する。

【形態】

成熟しても体色が赤くならず、黒化する小型のアカトンボである。

和名は成熟しても腹部の斑紋が消失しないことと、大阪で発見されたことに由来する。



♂. 長久手町阿畑, 1989年9月29日, 高崎保郎 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～西三河の丘陵地を主たる分布域とし、やや飛び離れた東三河の新城市(旧作手村)も含めると12市町村で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から西部にかけて記録されている。

【世界の分布】

日本特産種である。

【生息地の環境／生態的特性】

成虫は、おもに丘陵地の周辺をマツ林などに囲まれて日当たりが良く、遠浅でかつ岸周辺に背丈の低い水生植物の豊富な池沼で見られる。幼虫は、水域の浅い岸辺で得られる。

7月頃から羽化し、一旦水辺を離れるが、9月頃から成熟♂は水域に戻ってくる。1年1化である。

【現在の生息状況／減少の要因】

主に尾張の東部丘陵から西三河にかけて分布したが、ほぼ壊滅した。

幼虫は電気伝導度の低い「きれいな水」を好むことに加え、成虫はホシクサ類等背丈の低い植生のある遠浅部でしか産卵できないことから、護岸工事等による環境悪化が即座に絶滅につながる。また、かつて本種が見られた池沼で、オオクチバス(ブラックバス)などが放流された池のみ本種が見られなくなった例もある。なお、本種の分散力は他のアカトンボ類より小さく、1994年の渇水で失われたいくつかの産地において本種は復活しなかった。

近年、植生や水質が良く外来魚もいない本種に適した環境でも、突然絶滅する例が見受けられる。他県にて複数の池を調査した結果、ネオニコチノイド系の農薬の濃度が高く、水田に使用された農薬が池に流入し、幼虫を絶滅させている可能性が示唆されている(荻部ほか, 2019)。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域の水質汚染防止と底質環境の保全
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の林地の確保
- 3) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【引用文献】

荻部治紀・寺山隼人・坂部 貢, 2019. 岐阜県東濃地方のマダラナニワトンボの減少要因はネオニコチノイド系農薬か? . Tombo, (61): 1-7.

(吉田雅澄)

オオキトンボ *Sympetrum uniforme* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は100%、現存数は0であり、絶滅危惧 I A 類に相当する。

県内に確実な生息地は存在しない。

【形態】

体色および翅全体が淡い橙黄色をした邦産アカネ属の最大種であり、和名も大きな黄色のトンボという意味である。



♂. 日進市赤池, 1985年10月13日, 清水典之 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平野部から丘陵地にある15市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州北部にかけて分布し、対馬でも記録されている。

【世界の分布】

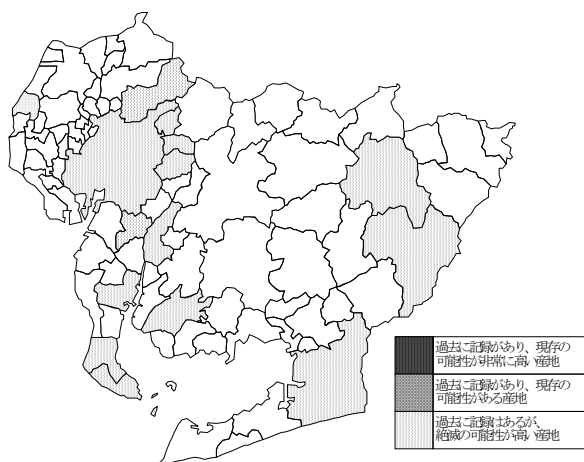
朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、平地から丘陵地にかけての抽水植物や汀線付近の草本が豊富で、かつ開放的な大きめの池沼で見られる。未熟成虫は、かなり移動することもあり、発生地から離れた山間部での採集例も報告されている。幼虫は、水域の浅い泥底で得られている。

7月頃から羽化し、10月頃に水域へ戻ってきて生殖行動を行なう。11月でもかなりの個体が見られることが多い。1年1化である。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

尾張では日進市の機織池で1988年まで恒常的に発生していたが、その後姿を見なくなった。西三河では1970年代まで刈谷市などで発生していたが、1980年代には絶滅した。東三河では1993年の設楽町での記録が県内における直近の記録でもある。ただし同地には本種の発生するような池沼はなく、飛来個体と推測される。

成虫は遠浅でヨシなどの抽水植物と浮葉植物のある池沼を好む傾向にあるが、わずかな環境変化にも敏感で、護岸工事等がなされると、すぐに姿を消すことが多い。

【保全上の留意点】

- 1) 成虫の産卵域となる浮葉植物等の植生のある環境の確保
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の草地の確保
- 3) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

東海地方全体でも2000年以降は確認されていないようで、壊滅状態にある。

本種は日本海に近い地域で希に成虫が発見されることがあり、大陸からの季節風に乗った飛来ではないかと推測されている。

(吉田雅澄)

ベッコウトンボ *Libellula angelina* Selys

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は100%、現存数は0であり、絶滅危惧 I A 類に相当する。
県内に確実な生息地は存在しない。



♂. 常滑市西阿野, 2004年4月24日, 安藤 尚 撮影

【形態】

翅の基部と結節に顕著な黒褐色斑があり、ずんぐりした毛深い中型のトンボである。
和名は未熟成虫の体色が鼈甲色をしていることに由来する。

【分布の概要】

- 【県内の分布】
尾張～三河の平野部を中心とした16市町村（旧市町村単位）で記録されている。
- 【国内の分布】
本州東北部から九州南部にかけて記録されている。
- 【世界の分布】
朝鮮半島、中国に分布する。

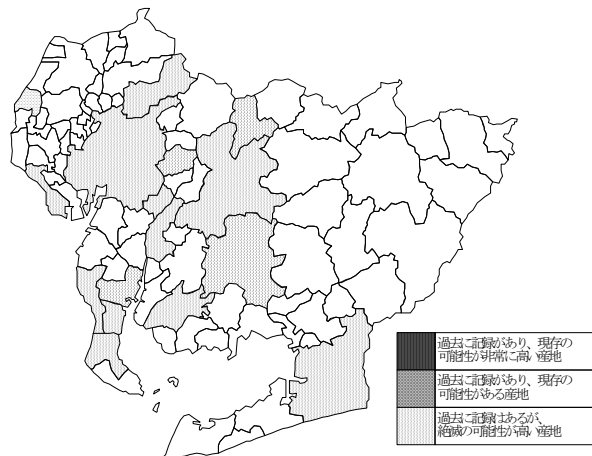
【生息地の環境／生態的特性】

成虫は、抽水植物が繁茂して泥深く、開放的な池沼に生息する。幼虫は、水中の枯れたヨシ等の堆積物につかまっていることが多い。羽化は4月に始まり、成虫は5月の短期間に集中的に見られる。1年1化である。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では1998年以降、本種の記録は途絶えていたが、2004年に常滑市で産地が発見された。造成後10年ほどの調整池で、他の水域とほぼ隔離されており、天敵が少なかったことが生き残りの要因と推測された。しかし、同産地では2005年以降、1頭も確認できなくなった。池の植生消失などの環境悪化はなかったが、本種と入れ替わるようにアメリカザリガニが大発生したことから、ザリガニによる幼虫捕食が絶滅の原因と推定された。

県内分布図



【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域となる抽水植物の堆積物の確保
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の草地と灌木の茂みの確保
- 3) 幼虫／成虫を捕食するアメリカザリガニや外来魚の移入禁止

【特記事項】

1994年に種の保存法に指定された最初の昆虫であるが、生息環境の悪化には歯止めがかからず、指定後も日本中で産地を減らし続けている。
現在、中部地方以東の確実な生息地は静岡県磐田市だけである。同地は地元関係者による保護活動で何とか生きながらえている状況である。浜松市の養鰻場跡地にも現存していたが、常滑市と同様、アメリカザリガニの大発生と入れ替わるように姿を消した。
本種は植生の消失などの環境破壊、そして外来生物の捕食圧に弱い、それらが無い環境ならば、人工的な池でも生存可能である。静岡県の保護活動などで本種を生かすためのノウハウが蓄えられたものの、愛知県にはそれを活かすための種となるベッコウトンボは存在しない。

(吉田雅澄)

コバンムシ *Ilyocoris cimicoides exclamationis* (Scott)

【選定理由】

全国的に産地は局所的である。浮葉植物が豊富な湖沼に生息しているが、徐々に良好な池が少なくなっており、その生息が危惧されている。

【形態】

体長は 11~13mm。体型は扁平で小判型をしている。生時の体色は美しい淡緑色であるが、死後は黄変する。前脚は鎌状で、腿節は特に太い。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市定光寺、名古屋市港区、名古屋城の堀などの記録がある。

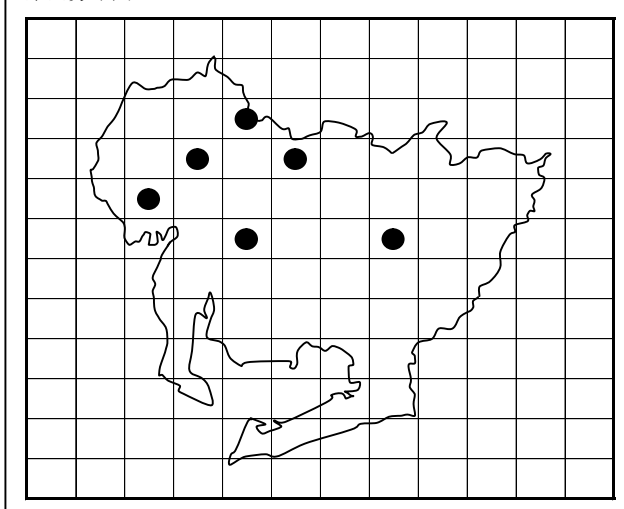
【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

韓国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地のヒシ、ヒルムシロなどが繁茂する溜め池などに生息している。ヒシの浮囊などに産卵することが知られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年、県内で複数の生息地が確認されているが、いずれも個体数は少なく、非常に危機的な状況にある (矢崎, 2016)。国内でも残された産地は極めて少数である。ヒシ等の浮葉植物が繁茂しているにもかかわらずオオクチバスなどの外来魚が入り込んでおり、確認できていない。水質悪化や外来魚による捕食圧などによって減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

溜め池の水質管理や水草の保護に留意し、周辺環境も含めた水源確保にも気をつける必要がある。また、外来魚の駆除も積極的に行う必要がある。

水草に産卵するため、コイや水草など水生生物の移植により、それまで確認されなかった場所に突如として発生する事例が示唆されている (川野, 2006)。安易な移植行為は慎むべきで、記録の取り扱いにも考慮する必要があると考えられる。

【引用文献】

川野敬介, 2006. コバンムシの山口県からの初記録. *Rostria*, (52): 59-60.
矢崎充彦, 2016. 10 カメムシ目. 豊田市生物調査報告書<分冊その2>: 66-85. 豊田市, 愛知.

【関連文献】

浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.
林 正美・宮本正一, 2018. 半翅目 Hemiptera. 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 (第二版): 329-427. 東海大学出版会, 神奈川.
矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

(澤田宗一郎)

キベリマルクビゴミムシ *Nebria livida angulata* Bänninger

【選定理由】

かつては平野部に普通の種とされていたが、近年生息地は急激に減少しており、県下では最近の生息情報がない。

【形態】

近似種のフタモンマルクビゴミムシ、カワチマルクビゴミムシとは、頭部は全体が黒色で複眼の間の頭頂部に一對の赤斑があること、上翅は周縁部を除いて黒色となり、第 3 間室に剛毛孔点があることなどで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

庄内川河川敷（竜泉寺下、下之一色町、高蔵寺町）や名古屋市内各地などで採集記録があり、標本も現存するが、いずれも 1950～1960 年代の採集品である（岩崎・蟹江，1990；穂積，1960；長谷川，2002；長谷川，2017）。

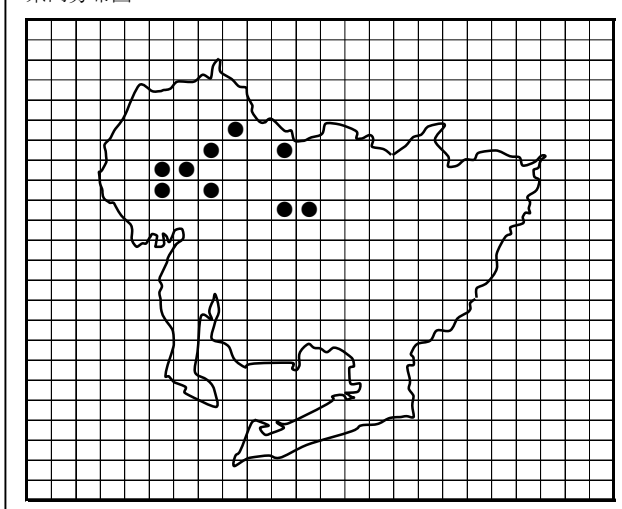
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、シベリア東部。基準亜種はヨーロッパからアルタイに及ぶ広範に分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平地の大きな河川敷の水辺から離れた、やや乾燥した草地で見つかる。

【現在の生息状況／減少の要因】

この 50 年ほどの間、生息情報がもたらされておらず、すでに絶滅している可能性が高い。具体的な減少の要因は不明であるが、河川改修や草地、低湿地の開発、農薬の影響などが考えられる。

【保全上の留意点】

生息状況、生態の詳しい調査が先決と思われる。また、河川の改修、管理にあたっては、その河川が本来もつ自然環境を損なわないような配慮が必要であり、可能であれば、本来の姿に復元する努力も必要である。

【特記事項】

三重県では、絶滅種とされている。

【引用文献】

- 岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.
穂積俊文, 1960. 東海甲虫誌(9). 佳香蝶, 12 (41): 17-23.
長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.
長谷川道明, 2017. 豊橋市自然史博物館に新たに収集された東海地方産絶滅危惧甲虫の標本について. 豊橋市自然史博物館研究報告, (27): 31-35.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

オオクワガタ *Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse

【選定理由】

日本最大のクワガタムシ。各地で減少傾向が甚だしく、また大きな採集圧にさらされている。さらに、近年の飼育ブームにより同種の外国産を含む多くの飼育個体がペットショップ等にあふれており、放虫あるいは逸出個体によるいわゆる「遺伝子汚染」の恐れが高まっている。県内でも、各地で外国産と思われる個体や飼育交配したものと思われる個体が野外で見つかっている。

【形態】

体長 25～65mm。オスでは大あごを含めると 70mm を越える日本最大のクワガタムシ。黒色で、オスの大あごは強大で、よく発達したオスでは中央より前方に斜め上方に向く大きな内歯がある。メスおよび小型のオスでは上翅に点刻列のある縦条がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市定光寺（河路, 1986）、春日井市坂下町（河路, 1986）、小牧市小牧山（穂積, 1974）、稲沢市（穂積, 1965）、津島市（松永, 1979）、名古屋市守山区（長谷川, 2017）など尾張地方平野部を中心に分布する。蒲郡市など三河地方平野部からも未公表ながら生息情報があり、かつては県内平野部に広く分布していたと思われる。

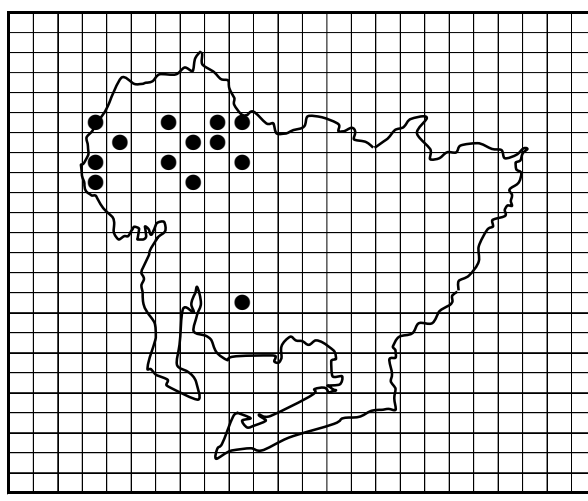
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、タイ、インド。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

主に平野部の河畔林、寺社林、低山帯の雑木林などに生息する。成虫は夜行性で 6 月から 9 月に出現し、コナラ、アベマキ、ヤナギ類などの樹液に集まる。幼虫は、アベマキ、ポプラ、コナラ、エノキなど各種広葉樹の白色腐朽した朽ち木中を食べて育つ。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川敷内の林を中心に、県内平野部に現在も僅かながら生息すると思われるが、個体密度は極めて低いと考えられる。減少の原因としては、平野部を中心に生息する種であるため、都市化の影響を強く受けたこと、また、戦後のエネルギー転換によって、燃料炭の生産が行われなくなったため、生息地である里山の雑木林が消失したことが考えられる。さらに、主にペット業者や愛好家の手による産卵木である朽ち木の破壊を含む過度な採集圧や、逸出した飼育個体と野生個体群との交雑による遺伝子汚染の危険性も高い。

【保全上の留意点】

河畔林を保全維持するとともに、ペット業者などによる過度の採集は慎むべきである。また在来個体群を守るため、飼育個体の放虫や逸出の防止に十分配慮する必要がある。

【引用文献】

- 穂積俊文, 1965. 船越俊平氏の標本箱より. ナビニュース, 55: 530.
穂積俊文, 1974. 東海甲虫誌(20). 佳香蝶, 26 (100): 105-116.
河路掛吾, 1986. オオクワガタの採集記録. 佳香蝶, 38 (148): 60.
松永晴彦, 1979. 愛知県津島市でオオクワガタを採集. 佳香蝶, 31 (119): 44.
長谷川道明, 2017. 豊橋市自然史博物館に新たに収集された東海地方産絶滅危惧甲虫の標本について. 豊橋市自然史博物館研究報告, (27): 31-35.

【関連文献】

- 佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

タケウチホソハナカミキリ *Strongalia takeuchii* Matsushita et Tamanuki

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では設楽町の原生林のみから知られている。最近の生息情報は極めて少ない。

【形態】

体長 11~15mm。細長い中型のハナカミキリ。前胸背は黄色で、2 本黒色の縦筋がある。上翅は黒色で、3 本の黄色の帯がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では設楽町（蟹江ほか、1977；竹内ほか、1980）のみから知られる。

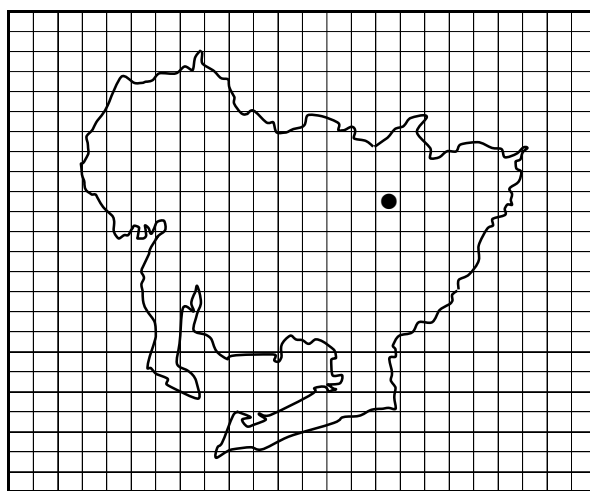
【国内の分布】

北海道、本州、四国に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

自然度の高い森林に生息し、生息地の大半は太平洋型のブナ林である。成虫は 7~8 月に出現し、ノリウツギやリョウブ、ツルアジサイなどの花に飛来する。幼虫の寄主植物はモミ、ミズバイが知られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

1980 年代までは、少ないながらも生息情報がもたらされていたが、1990 年代以降の生息情報は断片的なものしかない。ブナ原生林の減少と林内の乾燥化の影響が考えられる。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、林縁の過度な伐採や枯れ木の伐採は、林内への乾燥化をもたらす生息環境を奪う危険性が高く、慎重な配慮が必要である。

【特記事項】

設楽町には本県には珍しいモミ・ツガの群落が知られている。本種はその原生林内ではモミを寄主植物として利用していると考えられ、この原生林を代表する昆虫の一つと位置づけられる。

【引用文献】

蟹江 昇・竹内克豊・今瀬雅行, 1977. 名古屋昆虫同好会奥三河採集会一カミキリの記録一. 佳香蝶, 29 (111): 34-35.
竹内克豊・原田猪津夫・松野更一, 1980. 愛知県北設楽郡のカミキリムシ. 愛知県豊根村の動物: 231-285.

【関連文献】

湯沢宣久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 389-433. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

チャイロヒメコブハナカミキリ *Macropidonia japonica japonica* (Ohbayashi)

【選定理由】

カツラの巨木に生活の大部分を依存する種で、全国的にも生息地に限られる。県内では面ノ木峠が唯一の生息地であり、確認されている発生木も一本があるにすぎず、生息基盤は極めて脆弱である。なおかつ、心ないマニアによる過度の採集、採集目的による発生木周辺環境の悪化（踏み荒らし等）が懸念される。

【形態】

体長 11~16mm。ヒメハナカミキリ属のカミキリムシを一回り大型にしたような体型をしたハナカミキリ。体色は一様に黄褐色。各脚は長く、前胸背には瘤状の隆起をもつ。



豊田市, 1994年6月, 長谷川道明 採集,
長谷川道明蔵

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では、豊田市（旧稲武町）以外確認されていない。この産地は、本種の最も南の生息地にあたる。

【国内の分布】

山形県～岐阜県（飛騨山脈）までの本州に分布する。西日本に分布する近縁のシコクヒメコブハナカミキリとは、飛騨川付近を境に住み分けている。

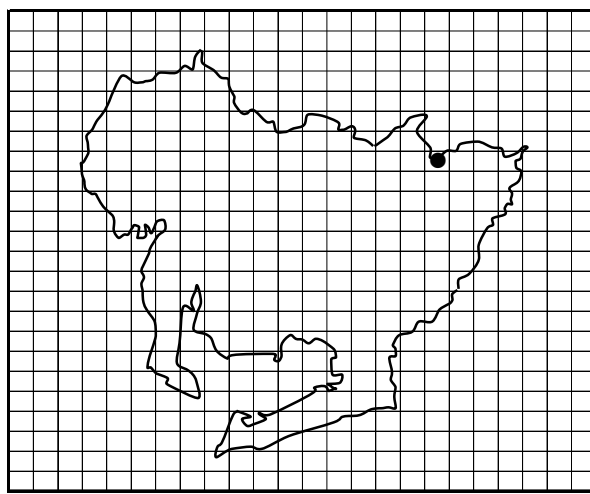
【世界の分布】

日本の特産種である。

【生息地の環境／生態的特性】

カツラの巨木に生活の大部分を依存している。成虫は、6~7月に出現。オスはカツラの巨木周辺の下草上に見つかる。恐らく、後から発生するメスを待っているものと考えられる。メスは苔むしたカツラの樹皮下に産卵すると思われる。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

現在県内で本種の発生木はただ 1 本しか確認されておらず、周辺に本種が将来にわたって発生可能な状態にあるカツラは見あたらない。したがって状況は極めて深刻である。減少の原因としては、ブナ原生林の減少があげられる。1994 年以降の確実な生息情報を確認できていない。

【保全上の留意点】

発生木であるカツラの巨木とその周りの環境を保護する必要がある。巨視的には、カツラが生育するブナ林内の保全対策が必要である。ハイカーによる発生木周辺の踏み荒らしや、マニアによる過度の採集も慎むべきである。

【特記事項】

本種には地理的変異があり、本県に分布する個体群は、黒化傾向が強い。

【関連文献】

長谷川道明, 1992. 愛知県で採集されたチャイロヒメコブハナカミキリについて. 豊橋市自然史博物館研究報告, (2): 37-39.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

スジボソヤマキチョウ *Gonepteryx aspasia nipponica* Bollow

【選定理由】

かつて本種は、愛知県の山間部から平地にかけて広く分布していたが、個体数は多くはなかった。1976年以降、成虫の記録がないまま現在に至っている。

【形態】

前翅長 35mm 程度。♂の翅表は鮮黄色、♀は黄白色をしている。ヤマキチョウ（本県では迷蝶としての記録がある）と紛らわしいが、♂♀ともヤマキチョウに比べて翅は薄い感じで、後翅裏面第7脈がヤマキチョウのように他の脈に比べて膨らんでいないことで区別される。また、前翅前縁から外縁および後翅外縁はヤマキチョウのように濃い桃色を帯びていない。本州中部の山地産の成虫は、翅のとがりが強い。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村（旧豊根村、旧富山村）、設楽町（旧設楽町、旧津具村）、新城市（旧新城市）、豊田市（旧小原村、旧足助町、旧旭町、旧稲武町）、瀬戸市、岡崎市や名古屋市内など丘陵・山間部から平地にかけての記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。中部以南の暖地では、主として山地に見られ平地で観察されることは稀である。

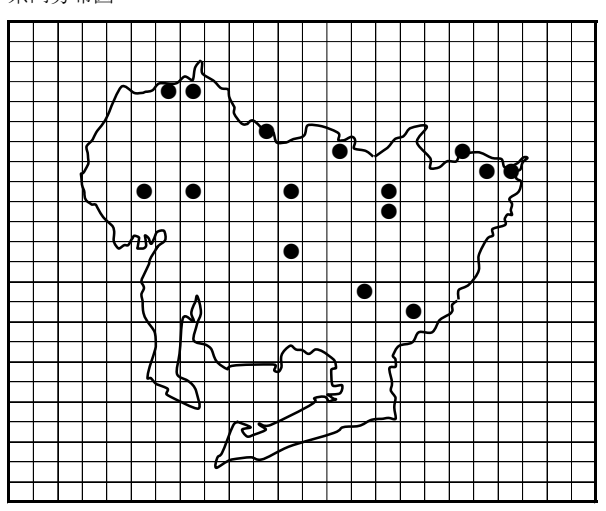
【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

生息範囲は、疎林や林縁から落葉広葉樹林の内部まで、地形も平坦地、緩斜面や急斜面など広範囲に及んでいる。年1回の発生で、6～7月に羽化し、短期間活動して仮眠にはいり、秋再び現れて活動する。成虫で越冬する。春に出現する個体は、翅の裏面の汚れが目立つ。卵は、食樹の細枝や茎に1～数个並べて産み付けることが多い。北設楽郡でクロウメモドキ科のクロウメモドキに産卵することが確認されている（高橋, 1984）。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

ここ 43 年間は成虫が確認されないまま現在にいたっている。1980 年代からいずれの産地でも姿を消している。その理由は不明であるが、食樹のクロウメモドキの減少によるものと考えられる。食樹の減少をみると、混交林の繁茂・管理放棄が本種の激減と無関係でないことが窺い知れる。

三重県では、食樹が生育していても本種が確認できない（後藤・中西, 2015）という。また、かつて多産した鈴鹿山脈北部の藤原岳でも激減して久しいという。

【保全上の留意点】

本種の食樹は、クロウメモドキ科に絞られるので、三河山間部での生育のよいクロウメモドキ生育地を定点観察拠点として、長期のモニタリングを実施して、保全のためのデータを積み上げるのが望ましい。かつて多数の記録があるのに、新知見がでてこないことを考慮すると、絶滅している可能性もあると思われる。

【引用文献】

後藤 勇・中西元男, 2015. スジボソヤマキチョウ. 三重県レッドデータブック 2015~三重県の絶滅のおそれのある野生生物~: 155. 三重県農林水産部みどり共生推進課, 津.
高橋 昭, 1984. チョウ類. 愛知の動物: 121. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

【関連文献】

巢瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第 5 集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.

(2009 年版を一部修正)

ハヤシミドリシジミ *Favonius ultramarinus* (Fixsen)

【選定理由】

愛知県では、1960年に豊田市（旧旭町）で始めて記録された（小林, 1961）。本種は、豊田市旭地区のカシワの生育する地域に生息に限られる。近年、混交林の繁茂や管理放棄に伴いカシワの生育が不全となり、カシワそのものが減少するに従い本種の個体数も減少している。1997年から3年間にわたって旧旭町全域でチョウ類の見直し調査が行われ、1999年に越冬卵が再確認された（高橋ほか, 2001）が、環境の変化がさらに進み生息は一層厳しくなっている。

【形態】

前翅長 21mm 程度。エゾミドリシジミに似るがやや大型である。♂の前翅外縁は丸みを帯びる。♀の前翅表の灰白色の斑は、オオミドリシジミ属の中ではもっとも強くあらわれる。近似種とは、♂の表面黒縁の太さなどで判別するが、熟練を要する。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧旭町）の太田・八幡・榎本・伊熊・明賀・伯母沢地区など、限られた地域に生育するカシワに依存して生息している。そのため、この地域が本県の唯一の分布地となっている。

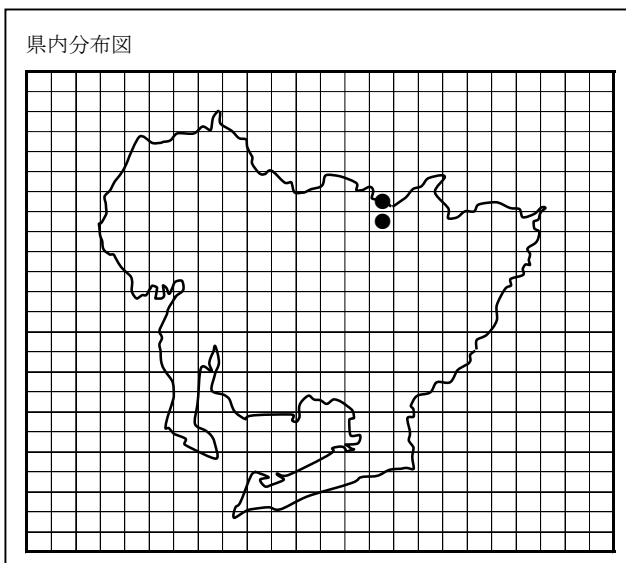
【国内の分布】

北海道、本州、九州に分布する。四国には産しない。食樹のカシワの分布に制約されるため、その産地はいずれの地方においても局地的である。三重県からは確実な記録がない。

【世界の分布】

ロシア南東部、朝鮮半島、中国東北部および中部～西部に分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

カシワは、豊田市旭町内の限られた地区に点在して生育している。しかし、大木は伐採され、周辺は繁茂が進んだため、カシワは成長不良となり生息環境は悪化している。

本種は、年1回、6月中～7月上旬に発生する。つねにカシワの樹林に生息し、群生する場合が多い。卵は食樹の1～2年枝上に1、2個ずつ産卵される。卵で越冬する。幼虫には多型があり、黒褐色・赤褐色・灰褐色のものが見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本県では、1960年に初めて確認されているものの、それ以降もカシワ林の伐採や混交林の繁茂のため、個体数は減り続けている。林縁に残ったカシワに依存して、細々と生息している。

近隣の矢作川を挟んだ北部に位置する岐阜県串原町、明智町、上矢作町にも本種は生息するが、当地と同じようにカシワの伐採や混交林の繁茂や管理放棄で個体数は減っている（巢瀬ほか, 2003）。

【保全上の留意点】

カシワに依存しているため、まずカシワの保全が必要不可欠である。限られた狭い地域であることも考慮して、周辺全体の多様性を意識した環境保全が望ましい。

【引用文献】

小林広成, 1961. ハヤシミドリシジミ, ヒョウモンモドキ三河に産する. 佳香蝶, 13 (46): 94.

巢瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.

高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 253. (財)旭高原自然活用村協会.

【関連文献】

白水 隆, 2006. ハヤシミドリシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 112. 学習研究社, 東京.

(2009年版を一部修正)

ミヤマカラスシジミ *Strymonidia mera* (Janson)

【選定理由】

愛知県では、1974年に豊田市（旧稲武町）で始めて記録された（北原, 1977）。本種は、クロウメモドキを食樹とするが本県内では少ないこともあり、産地は豊田市（旧稲武町）、東栄町の2地域に局限される。長野県などの分布の南西限となっている。北半球北部に広く分布するカラスシジミ属の県内唯一の種でもある。

近年、本種は、産地の混交林の繁茂により食餌植物の生育不全・枯死などにより、その個体数が激減している。

【形態】

前翅長は18mm程度。色彩は全体に黒褐色で斑紋はない。♂♀の色彩は大差ないが、♀はやや大型、地色は淡色、尾状突起は長い。♂は前翅前縁に楕円形の顕著な性標を持つが、♀はこれがない。近似種のカラスシジミ（本県未記録）とは、後翅裏面の白帯が点線状で外縁に平行であること、また、ベニモンカラスシジミ（本県未記録）とは、前翅表面に赤紋がないことで容易に区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧稲武町）、東栄町のごく限られた地域に分布する。県内には、食樹のクロウメモドキが少ないので、新産地の発見の可能性は低いと思われる。この2地域以外は未記録となっている。

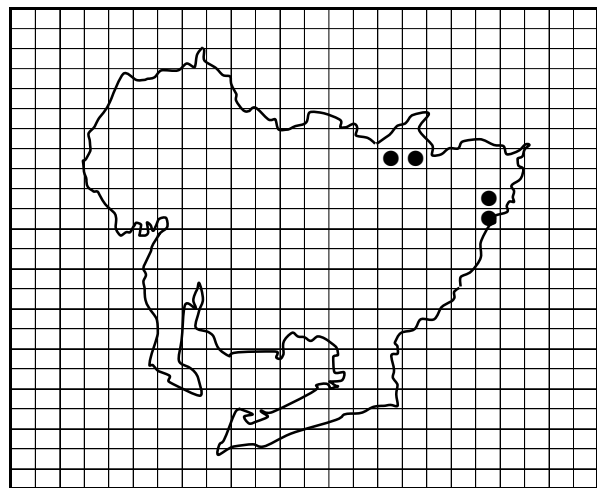
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布する。北海道は渡島半島南部にのみ産地が知られている。東北地方より中部地方にかけては各地に産地が多い。近畿地方では伊吹山・藤原岳周辺に分布するが、それより岡山県まで大きな分布空白域がある。四国、九州では高地に分布するが稀である。

【世界の分布】

本種は日本固有種とされている。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

成虫は年1回7～8月に発生する。低山地～山地の林内の明るい環境を好み、花にもよく集まる。成虫は食餌植物の小枝の分岐部や短枝の基部に1～数個の卵を産み付ける。幼虫の食樹であるクロウメモドキの植物が県内では少ないこともあり、産地は局限される。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年、生息地の混交林の繁茂が進み、間伐などの定期的な管理が放棄され食樹の生育環境が悪化傾向にある。場所によっては、陽が当たらなくなり枯死する食樹もあり、個体数は激減している。

近隣の産地である三重県藤原岳は、かつて幼虫がたくさん生息していたが、現在では激減している。静岡県西部からは未記録（諏訪, 2003）になっている。

【保全上の留意点】

食樹であるクロウメモドキ周辺の適度な間伐による日照の確保が早急に必要である。なお、産地がごく限られた地域であるため、採卵・採集の自粛が望まれる。

【引用文献】

北原幹郎, 1977. 愛知県北設楽郡稲武町でミヤマカラスシジミを採集. 佳香蝶, 29 (109): 11.
諏訪哲夫, 2003. 静岡県の蝶類分布目録: 1345. 静岡昆虫同好会, 静岡.

【関連文献】

白水 隆, 2006. ミヤマカラスシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 130-131. 学習研究社, 東京.
巢瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.

(2009年版を一部修正)

クロシジミ *Niphanda fusca* (Bremer et Grey)

【選定理由】

愛知県の生息地は、東三河の 4 地域に限られる。旧鳳来町や旧作手村では、1995 年ごろまでは確実に発生していた。

ここ 20 数年来現在に至るまで公式記録はない。全国的にも減少が報じられている。

【形態】

全翅長は 20mm 程度。♂♀の翅形の差異は著しく、♂の翅型は尖るが、♀では幅広く丸みが強い。♂の翅表は暗紫色に光る。♀は一様に暗褐色を呈するが、前翅表に白斑を現す個体も稀ではない。

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市（旧作手村、旧新城市、旧鳳来町）、設楽町（旧津具村）の 4 地域から記録されているにすぎない。近年まで、旧鳳来町では継続して生息が確認されていたが、環境の変化により生息が確認できなくなった。最近の公式記録はない。

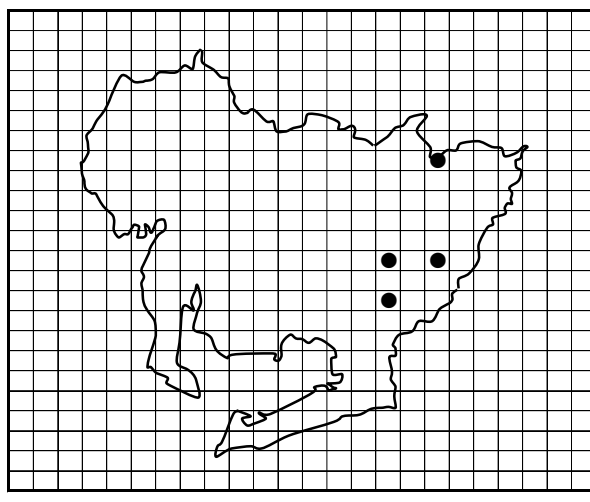
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布するが、一般に局地的である。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、中国、シベリアに分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

愛知県では、丈の低いコナラなどが生えている裸地が生息地として確認されている。本種と密接な関係を有するクロオオアリが、このような環境に好んで巣を設けている。

1950 年に永山文昭氏により、初めて特異な生態が解明されている。年 1 回、6～8 月に発生する。♂は、樹上を活発に飛び回ることが多い。♀は、コナラなどの樹木や草に数卵産み付ける。その場所は、アブラムシの寄生した付近が選ばれる。孵化した幼虫は、アブラムシを訪ねるクロオオアリによって巣の中に運び込まれる。これは、クロオオアリが本種の幼虫の腹節の蜜腺からでる蜜を特に好むからである。幼虫はアリの巣のなかで冬を越し、翌年の晩春に蛹になり巣の中で羽化する。遅れて羽化した個体は、クロオオアリに食べられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地の草原やそれに連なる疎林の植生遷移や管理放棄もあり、背丈の低い樹木混じりの明るい草地が減少するとともにクロオオアリの巣作りもなくなり、それに連動して本種も発生しなくなって久しい。ここ 10 数年来、現在に至るまで公式記録はない。この現象は全国的といわれている。なお、三重県の鈴鹿山地では、荒れ地的な環境に本種が生息（河本, 2004）し、近年は、むしろ記録数が増えている傾向にあるという。一方、丘陵部の生息地は、生息に適した雑木林の消失で減少が著しいという（中西, 2015）。山地での生息地が知られていない本県については、更なる継続調査が必要である。

【保全上の留意点】

クロオオアリは、伐採されて数年経つような草原と疎林が連なる明るい裸地を好むので、このような環境の確保が必要不可欠である。併せて継続した間伐の実施などによる環境保全管理・復元が望まれる。

【引用文献】

河本 実, 2004. 鈴鹿山系(三重県)のクロシジミ近況報告. ひゃくとりむし, (251): 3004-3006.

中西元男, 2015. クロシジミ. 三重県レッドデータブック 2015~三重県の絶滅のおそれのある野生生物~: 213. 三重県農林水産部みどり共生推進課, 津.

【関連文献】

白水 隆, 2006. クロシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 135. 学習研究社, 東京.

(2009 年版を一部修正)

ヒメシジミ *Plebejus argus micrargus* (Butler)

【選定理由】

愛知県からの最初の記録は 1951 年、南設楽郡旧作手村（現新城市作手）である。同村にはかつて広大な湿原が広がっており、黒瀬（善夫）、田原（長ノ山）、岩波、高里、鴨ヶ谷、清岳などに多産した。また、北設楽郡豊根村黒川（1969）、稲武町（現豊田市）黒田ダム（1968、1986）、御所貝津中根（1994）、月ヶ平（1968）、東加茂郡旭町（現豊田市）（1991）、西加茂郡小原村北（現豊田市小原北町）（1961、1964）、足助町香嵐溪（現豊田市岩神町）（1965）、などからも報告され、三河の山間部に限られた産地があった（高橋ほか、1991）。しかし、これらのほとんどの産地から最近の観察例がない。旧旭町では 1999 年が最後の記録である。旧作手村では、2006 年の報告があるが、2007 年には発見されなかった。旧小原村、旧足助町では産地そのものが大きな環境の変化を受けた。

【形態】

前翅長約 1cm の小型のシジミチョウ。都市部に普通に見られるヤマトシジミ、ルリシジミ、ツバメシジミに似るが、前・後翅ともに裏面外縁に沿って橙色紋が並んでいることから容易に区別できる。近似種のミヤマシジミやアサマシジミ（ともに愛知県未記録）とは、後翅裏面の橙色の斑点の外側の黒点内に輝く藍色の鱗粉がないことなどから区別できる。翅表は、♂では青藍色、外縁は黒く、♀では暗褐色、外縁近くに橙色の斑紋をもつ。愛知県産は、他産地産の個体に比べ、一般に、♂の翅表の翅脈が黒く、♀の翅表の橙色紋の発達が弱い。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では、豊田市や新城市、北設楽郡豊根村など三河山間部のみ見出された。この産地は、近隣の岐阜県東濃地方や、長野県下伊那地方の産地とともに、中部山地帯の産地とは隔絶され、湿地草原に産する特異な生息地であった。

【国内の分布】

北海道では分布が広く、平地にも産する。東北から中部地方では山地性となり、山間の草地や路傍に生息する。近畿地方からは未知、中国地方では山間の湿地に産地が点在する。

【世界の分布】

国外では、ユーラシア大陸の北部に広く分布し、ヨーロッパに達する。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県の産地は、すべて明るい湿性草原で、北海道や多くの中部地方などのような乾性草原や路傍からは生息が知られない。成虫は生息地を離れることがなく、低く穏やかに飛び、各種の草花を訪れる。食草付近の草むらに潜り込み、地表に近い草の茎などに産卵する。卵で越冬し、翌春孵化。幼虫の食草はマアザミで、アリが群がっていることが多い。蛹は、食草やその周辺の水草などから発見され、同時に数頭集まっていることがある。年 1 回、6 月から 7 月にかけて発生し、8 月にはほとんど姿を消す。

【現在の生息状況／減少の要因】

昭和 47 年（1972）7 月 12～13 日に藤岡村、小原村、足助町に集中豪雨があり、これらの山間の湿地はほとんどが土砂で埋没した。一方、旧作手村では、ほとんどの湿原が水田化された。長ノ山湿原など 3 箇所のみが保存湿原とされているが、乾燥化が進み、かつての湿原の様相を留める範囲は著減した。さらに、湿地周辺の水田には空中からの農薬散布が 2007 年にも行われており、かつてこの湿原に生息していた多くのチョウは 2007 年の調査時にはほとんど見られなかった。長ノ山以外の湿原は小規模であり、樹林化が進んでいる。

近隣の瑞浪市や中津川市など東濃地方の産地はすべて湿原であったため、埋め立てなどにより産地そのものが変貌し、本種も消滅した。

【保全上の留意点】

まず生息地である湿原の保存が優先されなければならない。農薬の使用に際しては、十分な配慮が必要である。

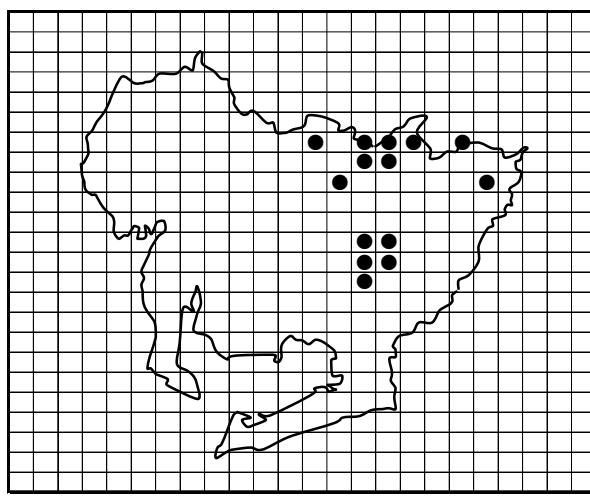
【特記事項】

岐阜県瑞浪市や長野県下伊那郡根羽村赤坂峠などの近隣の生息地も環境の変化を受けたことにより一変し、本種は絶滅した。

【引用文献】

高橋 昭ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下): 21-95. 愛知県.

県内分布図



ゴマシジミ *Maculinea teleius kazamoto* (H.Druce)

【選定理由】

最近、本種は激減してしまい、2001 年以来（高橋ほか、2001）記録がない。近い将来、愛知県では絶滅が危惧される 1 種と考えられている。全国的にも個体数が減ってきているため保護の必要性がある。

【形態】

本種は、地理的ならびに個体的な変異が著しく、日本産シジミチョウ科の中でも最も変化に富むチョウの 1 種である。前翅長は 21mm 程度で、シジミチョウとしては大型である。

翅表面は黒縁、黒斑を有する青藍色から全面暗褐色のものまで変異が大きいチョウである。翅形や翅斑などの外見のみによる♂♀の鑑別は、難しく熟練を要するが、腹端および前脚の構造を調べれば容易に区別される。

【分布の概要】

【県内の分布】

分布は、局地的である。かつては、豊田市（旧藤岡町、旧小原村、旧足助町、旧旭町、旧稲武町）、設楽町（旧設楽町）、新城市（旧作手村）などで記録されたが、近年は記録がないまま推移している。

【国内の分布】

北海道、本州、九州に分布する。青森県や山梨県には、分布も広く産地も多いが、本県の近隣地域では、山間地帯に発生地があるも、その多くは局所的である。最近、岐阜県東濃地区も個体数が激減し、保全のための基礎調査が実施されている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部よりヨーロッパにわたってユーラシア大陸の北部まで分布が広がっている。

【生息地の環境／生態的特性】

日当たりの良い湿地状草地や山間部の日照を確保するために造られた草地が生息地であり、そこには幼虫の初期の食餌植物のワレモコウが自生し、後期の食餌となるクシケアリの仲間が生息する。

年 1 回の発生で、8 月中～下旬頃が最盛期である。母チョウは、ワレモコウの花穂に産卵、幼虫はワレモコウの花に食い入り成長し、4 齢になると地上に降りてクシケアリの仲間に巣の中に運ばれる。幼虫はアリの卵や幼虫を食べて成長する。幼虫で越冬する。旧藤岡町・旧小原村・旧旭町産は、岐阜県東濃地方の産地圏と同一のもので翅表は青色、旧稲武町・設楽町産は長野県下伊那産に近く青藍色、旧作手村産は孤立性で青白色とそれぞれが異なった色調を示す（高橋、1984）。

【現在の生息状況／減少の要因】

1980 年代前半までは、湿性草原に相当数生息していたが、その後激減し、1999 年に旭町で数頭が確認されたのが記録（高橋ほか、2001）の最後である。湿性草原の遷移による草木の繁茂・管理放棄や機械による徹底した草刈りなど管理形態の変化による生息環境の悪化のために絶滅の危機に追いやられたものと思われる。一方、ワレモコウは復活し、農薬の過度な使用は減り、各種のチョウが生息しはじめるなど、外観的には生息できそうな環境に回復したように見えるが、本種の復活の兆しはない。

【保全上の留意点】

本種は、湿性草原や日当たりのよい草原環境に依存し、特異な生活様式を有している。近年は急激に個体数を減らしているため、まずは、食餌植物であるワレモコウの生育とクシケアリの仲間が生息できる環境の維持・回復が必要不可欠である。なお、過度の採集は避けたいものである。

【特記事項】

「ゴマシジミ関東・中部亜種」として種の保存法で国内希少野生動物種に指定されている。

【引用文献】

高橋 昭、1984. チョウ類. 愛知の動物: 126. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
高橋匡司ほか、2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 26-27, 257. (財)旭高原自然活用村協会.

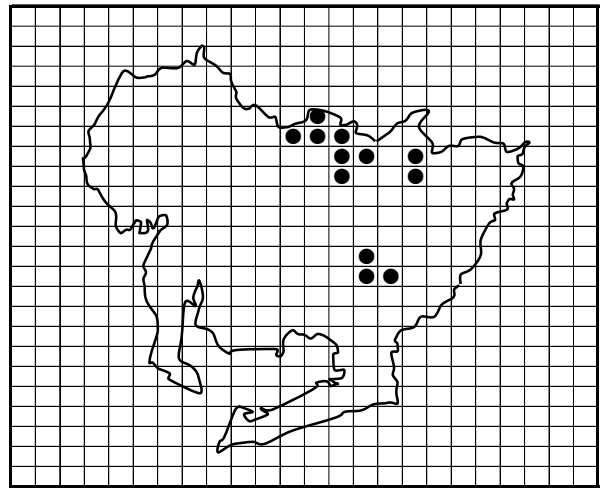
【関連文献】

白水 隆、2006. ゴマシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 171. 学習研究社, 東京.
巢瀬 司ほか、2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第 5 集. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト(2002 年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.



豊田市(旧旭町), 2000 年 9 月 9 日, 高橋匡司 撮影

県内分布図



(2009 年版を一部修正)

チャマダラセセリ *Pyrgus maculatus* (Bremer et Grey)

【選定理由】

愛知県の生息は関東から中部にわたる分布圏の西南端に当たる。いずれの産地も生息地はごく限定されている。かつては、道路脇や人家周辺の草地などにも生息しており、生息地の個体数はかならずしも少なくなく、成虫だけではなく、卵、幼虫なども同時に見出されることもまれではなかった。1980年代から、いずれの産地でも急速に姿を消した。愛知県では1990年代以降の記録がない。

【形態】

普通種のダイミョウセセリにやや類似するが、明らかに小型であり、翅表の白紋は顕著で、後翅表にも明瞭な白紋をもつことなどから、同定は容易である。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では、1951年に北設楽郡下川村と本郷町（現在の東栄町下田、川角、本郷）から初めて記録され、その後、北設楽郡の稲武町（現豊田市）、設楽町、豊根村、および東加茂郡足助町、旭町、西加茂郡小原村（いずれも現豊田市）から少数の産地が報告された。

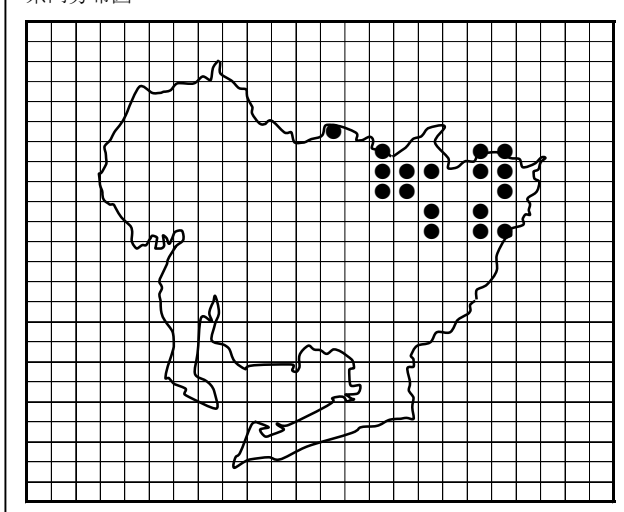
【国内の分布】

北海道東部、本州（東北・関東・中部）、四国に分布する。近畿・中国地方からは知られていない。本州中部では、長野県と山梨県を中心に生息し、その周辺に若干分布圏が拡大していたが、近年いずれの産地もほとんど絶滅ないし消滅に近い。

【世界の分布】

国外では、朝鮮半島、中国、モンゴルなど、東アジアに分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地の明るく広い草原に多くの産地があった。また、人家、道路、堤防、疎林などの周辺の小規模の草地にも生息していた。1950～60年ころの信州の春は、ミツバツチグリ、キジムシロ（バラ科）などの幼虫の食草が多く自生し、成虫もこれらの花で吸蜜するのがよく観察され、春の普通種とされていた。幼虫は、これらの食草の葉を折り曲げたり、重ねたりして巣を造り、蛹もこの巣から発見されるため、野外で幼虫や蛹を見出すことも困難ではなかった。

愛知県では、4月下旬から5月中旬、7月中旬から8月中旬に記録されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では、豊田市（旧旭町）の1960年7月の記録、北設楽郡設楽町の1982年4月の記録が最後で、以来愛知県下からの記録が見出せないが、1986年ころまでの報告がある。恐らくこの頃に県下から姿を消したものと推察される。長野県でも、1980年以降は木曾郡と伊那地方を除いてほとんど見られなくなった。

減少の理由は明らかにされていない。各地とも食草の自生が減少したことが知られているが、食草が豊富に自生している地域でも本種は見られなくなっている。チャマダラセセリの産地には、ゴマシジミもともに生息しているところがあったが、これらもともにほぼ同じ頃から減少が確認されており、その共通原因の解明が望まれる。

【保全上の留意点】

道路の舗装などは必要最低限にし、草原や草地の保全や農薬散布の際の十分な配慮などに努める必要がある。

【特記事項】

岐阜県中津川市（旧恵那郡阿木村）や恵那市（旧恵那郡上矢作町）からも記録があり、前者では多産していた。

【関連文献】

高橋 昭・葛谷 健. 1956, 中部東海地方産蝶類目録第3報. 佳香蝶, 8 (29/30): 1-123.

(2009年版を一部修正)

ホシチャバナセセリ *Aeromachus inachus* (Ménétrières)

【選定理由】

本種は、本州と対馬に産し、いずれの産地においても局所的である。愛知県では、1954年8月13日に豊田市（旧稲武町）黒田で3頭が初めて採集された。以来、三河の山間地に少数の産地が知られており、1977年8月10日に豊田市（旧旭町）伊熊でオオアブラススキから卵と幼虫が発見された（葛谷, 1978）。近年20年以上にわたり観察例がない。愛知県の近隣地方でも激減が報じられており、これは全国的な傾向である。

【形態】

日本産のセセリチョウ科でもっとも小型。翅表は暗褐色で、前翅に小白点が弧状に並ぶ。後翅の表面は無紋、裏面は特有な斑紋をもつことなどの特徴から、近似種とは一見して区別することができる。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県では、豊田市（旧稲武町、旧旭町）が知られるに過ぎない。なお、岐阜県美濃地方では、美濃加茂市、中津川市、恵那郡岩村町から、また愛知県北設楽郡に接する長野県下伊那郡では、売木村、根羽村から少数の記録がある。

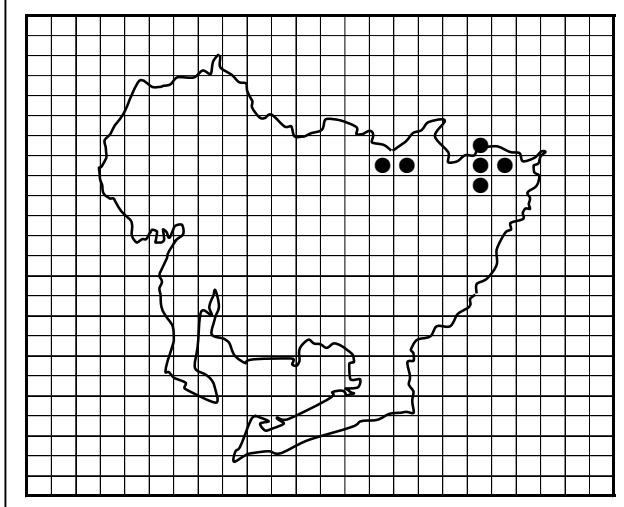
【国内の分布】

本州では、青森県から山口県にわたって産地が知られる。東北地方の中央部、近畿地方には大きな分布空白地がある。九州では対馬のみに産する。北海道、四国、佐渡島からは知られない。

【世界の分布】

国外では、朝鮮半島、中国、台湾など東アジアに分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

成虫は、なだらかな丘陵や山地の草原や林縁を敏捷に飛び、低木や草の葉上に止まり、後翅を水平に、前翅を半開きにして日光浴をする。ウツボグサやヒメジョオンの花を訪れることが多く、時に湿った地面で吸水することもある。曇天の日は活動がみられない。旧旭町ではカシワの疎林の下草上によく見られ、7月上旬と8月上旬に採集例があることから、年2回の発生と思われる。

幼虫はオオアブラススキ（イネ科）が主な食草である。その葉裏にとまり、葉表を表面にするように筒状の巣を作る習性があり、その巣の特徴から幼虫が発見できる。

【現在の生息状況／減少の要因】

旧旭町では1981年8月30日に1♂が採集されて以来、比較的良好に調査されているにもかかわらず記録がない。生息地のカシワ林の伐採、宅地や耕地化、林間の小道の舗装、林縁の草地の減少などが原因かと思われる。

【保全上の留意点】

本種は、特異な分布と生活様式をもつ。食草はオオアブラススキ以外に記録がほとんどないが、オオアブラススキの衰退や減少の報告はない。このため、減少の直接原因を確定することも、その保全対策を具体的に明確化することも困難である。少なくとも、疎林的環境を守り、下草刈りの方法や、農薬散布を慎重に行うことが望まれる。

【特記事項】

豊根村三沢として引用された1978年5月14日の記録は、チャマダラセセリの誤りである。

長野県木曾郡大桑村のぞきど高原には1980年代まで採集例が多かった。1990年頃から減少が目立つようになったが、2006年7月30日に1♂が採集された。

【引用文献】

葛谷 健, 1978. 愛知県東加茂郡旭町のツマグロヒョウモンとホシチャバナセセリ. 佳香蝶, 30 (114): 24.

【関連文献】

高橋 昭・葛谷 健. 1956. 中部東海地方産蝶類目録第3報. 佳香蝶, 8 (29/30): 1-123.

(2009年版を一部修正)

ゲンバイトンボ *Platycnemis foliacea sasakii* Asahina

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は50%、
現存数は4.5であり、絶滅危惧
I B 類に相当する。

【形態】

♂の中・後肢の脛節は顕著に
扁平化し、白い軍配状となっ
ているのが特徴的で、和名もその
軍配状の肢に由来する。



♂. 犬山市池野押出, 2007年6月21日, 安藤 尚 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～西三河の丘陵地から低山地にかけての9市町村で記録されている。東三河では新城市(旧作手村)の記録がある。

【国内の分布】

本州東北部から九州中部にかけて記録されている。

【世界の分布】

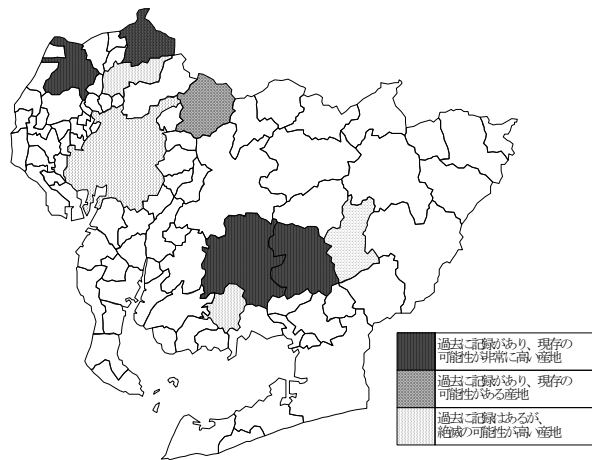
原名亜種が中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、おもに河川中流域の清流や、その周辺の伏流水などにより年中水が枯れることがなく、岸辺に藻など沈水植物が豊富な緩流や池に見出される。未熟成虫は、ほとんど生息地を離れない。幼虫は、岸辺の沈水草や沈水藻類につかまっている。

5月末頃から羽化が観察され、成熟成虫は8月末頃まで見られる。1年1化と思われる。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

矢作川水系と木曾川水系に現存する。近年、一宮市の木曾川南派川で新産地が発見されたが、木曾川の上流側には本種の良い産地が残されており、そこから流下した個体が定着した可能性が考えられる。庄内川水系に属する瀬戸市の産地は近年調査されておらず、生息状況はわからない。矢作川水系では、1990年代には支流の乙川水系の広範囲で確認でき、水田中の用水路でも見られるほどであったが、2000年代に入ると急激に個体数が減少した。東三河では新城市(旧作手村)で記録されているが、耕地整理と共に生息地は失われた。戦前には名古屋市内でも記録されていたようだが、市街地化とともに絶滅した。

本種幼虫は水質の悪化にかなり弱く、また産卵場所であり、幼虫の生息場所となる岸辺の植生が護岸工事等により失われると、絶滅してしまう脆さを有している。近年は荒れた山によると考えられる大水が出ることも多く、本種の生息環境に大きなダメージを与えているようである。

【保全上の留意点】

- 1) 成虫の産卵域や幼虫の生息域となる岸辺の植生の確保
- 2) 河川の水質汚濁の防止

(吉田雅澄)

オオイトトンボ *Cercion sieboldii* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は86%、
現存数は4.5であり、絶滅危惧
I B類に相当する。

【形態】

♂は水色と黒、♀は黄緑色と
黒を基調とする体色のイトトン
ボである。愛知県には同属が4
種生息しているが、本種は眼後
紋が洋なし型をしている点で区
別できる。

和名ではオオイトトンボとさ
れているが、同属他種と比べて
それほど大きいわけではない。



♂♀. 新城市作手, 2007年7月29日, 高崎保郎 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河にかけて平野部を中心に32市
町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録され
ている。

【世界の分布】

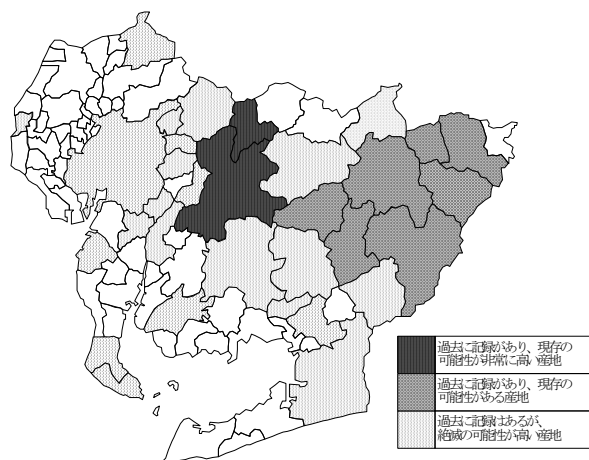
台湾に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、平地から山間部にかけての比
較的自然度の高い池沼や水田で見られること
が多い。未熟成虫は、発生地からあまり移動
せず、付近の草むらで見られることが多い。
幼虫は、水生植物につかまっている。

6～8月を中心に成虫が多く見られ、暖地で
は年2回発生することもあると思われる。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

尾張には確実な産地がない。西三河は豊田市(旧豊田市と旧藤岡町)に少数が現存する。東三河は山間部に現存すると思われるが、近年調査されていない。なお、新城市(旧作手村)の多産地は水草の消滅と共に本種も絶滅した。

水域の汚濁や植生の消失など環境変化にもろく、池沼のイトトンボの中では真っ先に姿を消すことが多い。近年は、オオクチバス(ブラックバス)やブルーギルといった外来魚による影響も大きいようであり、それら肉食魚と本種の共存は難しい。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止
- 2) 幼虫の生息域となる岸辺の浮葉・抽水植物の確保
- 3) 成虫の休息域となる水域周辺の草地の確保

【特記事項】

同属のクロイトトンボなどは、止水だけでなく河川の緩やかな流れにも生息できるのに対し、本種は止水にしか生息できないことも本種の減少に影響していると推測される。

(吉田雅澄)

ヒヌマイトトンボ *Mortonagrion hirosei* Asahina

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は75%、現存数1であり、絶滅危惧 I B 類に相当する。

ただし、本種のランク評価後に唯一の産地の現地調査を行った結果、本種を確認できず、その結果を元にとすると、絶滅率88%、現存数0.5になる。今後の調査を含めて次回ランクの見直しを検討する。

【形態】

小型のイトトンボで、♂の翅胸前面に黄緑色の4個の点があることが特徴的である。



♂. 飛島村, 1984年7月8日, 清水典之 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張平野の河口域に近い3市町村と、三河湾に近い1市で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州北部にかけて記録されている。

【世界の分布】

香港、台湾に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、河川下流域の、しみ出し水があり、常時水が数cm溜まったヨシ等の生える汽水湿地に生息する。未熟成虫は、同所的に見られる。幼虫は、浅い水域で水中の植物等につかまっている。

成虫は6月から7月にかけて多く見られ、8月には減少する。1年1化である。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛西市(旧立田村)では2010年代前半には多産していたが、2019年7月の調査では1頭も確認できなかった。周辺にも本種が生息できそうな環境は残されているので、時期や場所を変えて詳細調査を行い、生存確認する必要がある。

刈谷市では2008年に産地が発見されたが、2009年に生息地のヨシが枯れ始め、2010年にはヨシの消失と共に本種も姿を消した。ヨシ原は本種の重要な生息場所となっていた。

本種は小規模な湿地でも生息できるので、どこかに生き残っている可能性はあるが、本種の生息地は埋め立て等の環境破壊と隣り合わせにあり、それが本種絶滅の大きな要因となっている。愛西市の産地は、湿地自体は残されているので何が原因で姿が見られなくなったのかは不明である。

【保全上の留意点】

- 1) 生息地である湿地の確保
- 2) 周辺域の伏流も含めた水流の変更防止

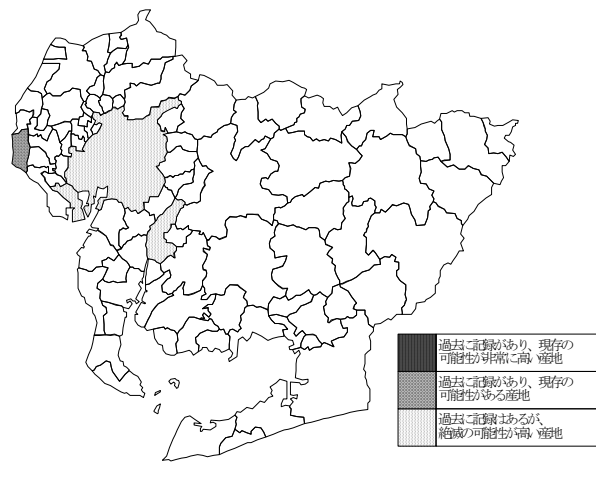
【特記事項】

本種の産地には、より大型のアオモンイトトンボが共存し、本種が同種に捕食されるのがしばしば観察されるが、本種幼虫は塩分への抵抗性を強めることでアオモンイトトンボが侵入できない水域での生息を可能にしている。

本種の和名は茨城県の潤沼(ひぬま)で採集されたことに由来する。

(吉田雅澄)

県内分布図



アオヤンマ *Aeschnophlebia longistigma* Selys

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は 96%、現存数は 1.5 であり、絶滅危惧 I B 類に相当する。
愛知県のヤンマ科の中で最も絶滅に近いのが本種である。



♂. 長久手町三ヶ峯, 2004 年 6 月 5 日, 高崎保郎 撮影

【形態】

全身が鮮やかな黄緑色で、ずん胴型の、やや大型のヤンマである。
和名は全身が黄緑 (= 青) 色であることに由来する。

【分布の概要】

- 【県内の分布】
尾張～三河の平野部を中心とした 34 市町村で記録されている。
- 【国内の分布】
北海道中部から九州中部にかけて分布し、対馬等の離島でも記録されている。
- 【世界の分布】
朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、おもに平地から丘陵地にかけてのヨシなどの抽水植物が多生する池沼で見られる。未熟成虫は、ほとんど移動しないようで、成熟成虫と同様、ヨシ原などで見られることが多い。幼虫は、ヨシなどの植物につかまっている。
成虫は 5～6 月に羽化し、成熟成虫は 7 月を中心に生殖行動を行ない、8 月頃まで見られる。幼虫で越冬し、翌年羽化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

2000 年以降、県内のヤンマで最も減少したのが本種である。尾張から三河の平野部を中心に広く分布していたが、現在県下で確実に姿を見られるのは、西尾市 (旧一色町) の佐久島だけである。また、佐久島のある三河湾に面する市町で、ごく希に本種が確認されることがある。しかし、継続的に確認できないので、佐久島からの飛来個体である可能性が考えられる。

本種は、ヨシやガマが密生した池沼を代表するトンボである。しかし、平地にあるそのような池沼は、埋め立てられるなど環境破壊を受けやすい。また、アメリカザリガニが増えると本種の幼虫が捕食されて絶滅することもあり、実際常滑市のベッコウトンボの生息地では、ザリガニの大発生に伴い、本種も絶滅した。佐久島に現存する本種の発生地にはアメリカザリガニが侵入しておらず、また周囲からの有毒な農薬の混入もない状況にある。

【保全上の留意点】

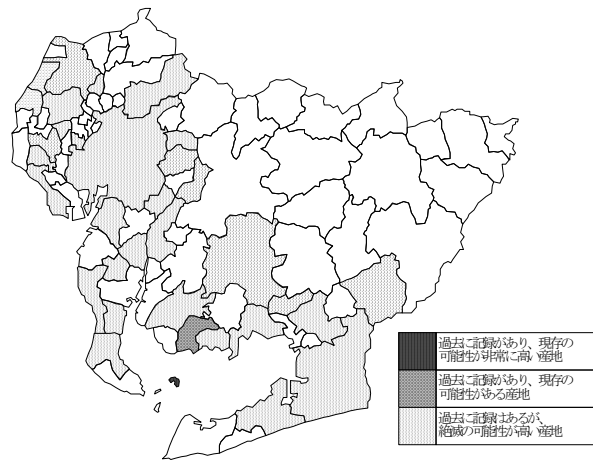
- 1) 幼虫の生息域、および成虫の産卵場所となる抽水植物の確保
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の草地の確保
- 3) 本種が生息する池沼の生態系を破壊する外来魚やアメリカザリガニの移入禁止

【特記事項】

同属のネアカヨシヤンマが黒っぽい体色をして、主に薄暗い朝夕を中心に活動するのに対し、本種は明るい黄緑色の体色をして、日中を中心に活動する点是对称的である。

(吉田雅澄)

県内分布図



コサナエ *Trigomphus melampus* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は50%、
現存数は1であり、絶滅危惧 I
B 類に相当する。



♂. 東栄町月坂甫, 2000年6月2日, 安藤 尚 撮影

【形態】

体色は黒地に黄色の条斑を持つ小型のサナエトンボである。同属他種とは翅胸前面に太いL字形斑のほか、その外側に細い前肩条と小さい黄色点があること、また♂では尾部付属器の背面に突起がないことで区別できる。

和名は小さなサナエという意味である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東三河の山間部にある2町でのみ記録されている。

【国内の分布】

北海道から本州西部にかけて分布し、離島では佐渡島で記録されている。ただし四国からは未記録である。

【世界の分布】

日本特産種である。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、比較的古い池沼で見られる。未熟成虫は、ほとんど水域を離れないようである。幼虫は、それらの滞水域や細流の泥底に浅く潜っている。

成虫は5月中旬頃より羽化し、5月下旬から6月にかけて生殖行動を行なう。飼育や野外での観察から、成虫になるまで2年を要すると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

2019年に東栄町で現存するのを確認している。同町では当初林縁の薄暗い小さな池から幼虫が採集されたが、その後少し離れた比較的開放的な池沼から多くの個体が確認された。その開放的な池は、かつては複数存在したが、現在は1つの池のみとなっている。同池は改修がなされたが、現在も比較的多くの個体が生息している。設楽町では1989年に記録されたが、水底を攪乱して生息環境を悪化させるコイが放たれており、現存の可能性は低い。

【保全上の留意点】

- 1) 発生地である池の保全
- 2) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚（コイも含む）の移入防止

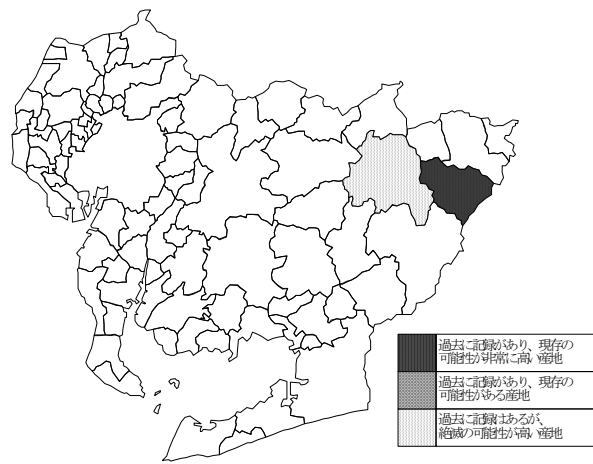
【特記事項】

本種は東日本には広く分布するが、西日本では日本海側を中心にやや限られた分布をする。愛知県はその分布の周縁部にあたるため、東三河山間部の限られた場所でのみ見られる。

同属のオグマサナエやフタスジサナエが地史的に新しい地域にある水域に生息しているのに対し、本種は主に地史的に古い地域に生息しており、両者はマクロ的にはっきりと棲み分けている。このことから、本種は日本列島における先住者と考えられる。

(吉田雅澄)

県内分布図



メガネサナエ *Stylurus oculatus* (Asahina)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は62%、現存数は5であり、絶滅危惧Ⅱ類に相当する。

本種は土着ではなく、移入の可能性があるととして準絶滅危惧としていたが、琵琶湖・淀川水系以外では愛知県と長野県にしか現存しないこと、さらに両県とも個体数の減少が著しいことを考慮し、絶滅危惧ⅠB類に変更する。



♂. 長久手町原邸, 1974年8月19日, 鶴殿清文 撮影

【形態】

腹部第7から9節が著しく広がった大型のサナエトンボである。

和名は顔面の黄色斑をメガネに見立てたことに由来する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張から西三河にかけて分布し、名古屋市周辺の複数の河川、愛知用水、矢作川など13市町村で記録されている。東三河には分布しない。

【国内の分布】

本州東北部から中部にかけて記録されている。

【世界の分布】

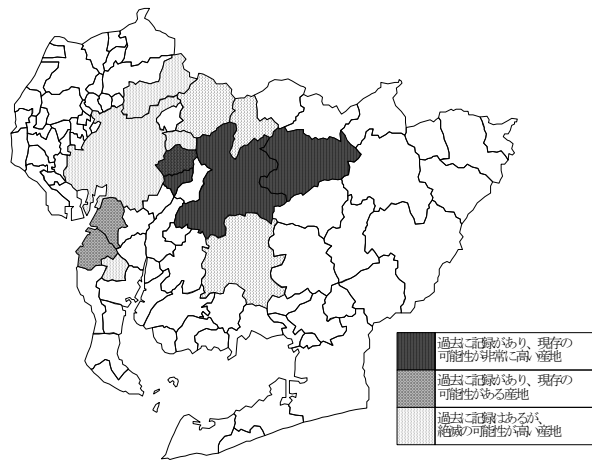
日本特産種である。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、羽化場所より上流の河川で見られる。また、琵琶湖のような湖では湖岸でも見られる。未熟成虫は、かなり移動することがある。幼虫は、湖、河川のワンドなど非常に緩やかな流れに生息し、深い部位を好む。

成虫は7～8月を中心に羽化し、成熟成虫は8～9月頃に見られる。幼虫期間は複数年と思われる。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

現存するのは矢作川と愛知用水のみ。矢作川のダム湖で得られた羽化殻の数は、2017年に数百個、2018年に数十個、2019年に数個と激減しており、2020年には確認できない可能性もある。愛知用水の途中にある愛知池では羽化殻が近年減少しており、また佐布里池では2018年の調査で全く確認できなかった。佐布里池に近い東海市で2018年に成虫が1頭確認されているので、佐布里池からわずかに羽化している可能性はあるものの、愛知用水での本種の存続も危うい状況にある。

本種の幼虫は川底の土質の選択性が非常に狭いので、河川環境が変化すると生息困難になる。また流れの緩やかな場所を好むので、川底に残留する農薬等の影響を受けやすいと推定される。

【保全上の留意点】

- 1) 河川の水質汚濁の防止（特に毒性の強い農薬等の流入防止）
- 2) 幼虫の生息域となる砂泥底の確保

【特記事項】

矢作川のダム湖で本種が激減した原因は、農薬等の有毒物質ではないかと推定している。理由は、①本種の好む川底の土質環境は現存する、②見た目では川の水が汚染された様子はない、③メガネサナエと時を同じくして他種の羽化殻や幼虫も激減または絶滅している（特にホンサナエやアオサナエなど春のサナエトンボ類で顕著）、④ダム湖本体とは対照的に、ダム湖に流入する河川では他種のヤゴは以前と同じように確認できる、という4点に因る。

（吉田雅澄）

キトンボ *Sympetrum croceolum croceolum* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は93%、
現存数は2であり、絶滅危惧 I
B 類に相当する。

県内の安定産地はほぼなくな
った。



♂. 豊田市飯野町, 1999年11月6日, 鶴殿清文 撮影

【形態】

翅の前縁と根元から半分程度
が美しい黄褐色となるアカトン
ボであり、和名はその翅の色に
由来する。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～東三河の丘陵地を主たる分布域とし、
27市町村で記録されている。

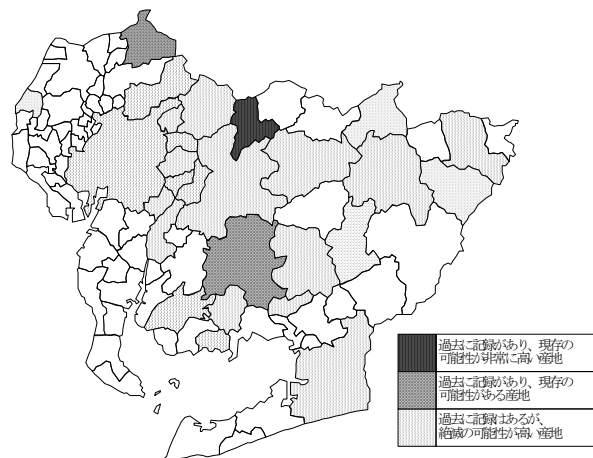
【国内の分布】

北海道から九州南部にかけて記録されてい
る。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、おもに丘陵地から山地にかけ
ての周辺を林に囲まれた池沼で見られる。未
成熟成虫は、周辺の林などへ移動するよう
であり、ほとんど姿を見かけない。幼虫は、水
域の浅い岸辺で得られる。

7月頃から羽化し、10月頃に水域に戻っ
てくる。耐寒性のある種であり、他県では時
に年越しをする例が観察されるほどである。
1年1化である。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては尾張～三河の丘陵地から山間部にかけて、
個体密度は高くないものの点々と分布してい
たが、現在では豊田市（旧藤岡町）などの池で少数
が見られるに過ぎない。また岡崎市のおかざき
自然体験の森で、1シーズンだけ成虫が目撃され
たが、翌年以降は確認できなかった。

生息地である池沼が改修されたり、水質悪化が
進行したり、あるいは肉食の外来魚が放流され
て絶滅した例が多いが、山間部の生息地では一
見環境変化はないように思われても、本種だけ
が姿を消す例も散見される。本種のみ絶滅する
要因はよくわかっていない。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域の水質汚染防止と底質環境の保全
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の林地の確保
- 3) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

隣県でも本県と同様、近年生息地を急激に減ら
しているようである。

(吉田雅澄)

ハマスズ *Dianemobius csikii* (Bolivar)

【選定理由】

本種は、きれいな砂浜と海岸林や砂防林の間の草がまばらに生えるような環境に生息する。県内での分布記録は少ない。近年の観光開発や砂浜の減少で、こうした生息環境は減少しつつあり、本種の存続が懸念される。

【形態】

小型の地表性のコオロギ。体長は♂・♀とも 7~9mm。全体が白褐色で、全身に黒褐色の斑点を散布する。♂・♀とも翅はあるが一般に短翅である。後脚腿節には上面から見ると三つの黒褐色紋が顕著である。生息地の砂浜の砂粒と酷似した体色・模様のため、静止している個体を見つけ出すのはむずかしい。夜間は背の低い草むらで鳴くので見つけやすくなる。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島の伊良湖岬と豊橋市表浜の砂浜から記録されているのみ(石津・荒川, 1953; 長谷川, 1991)。

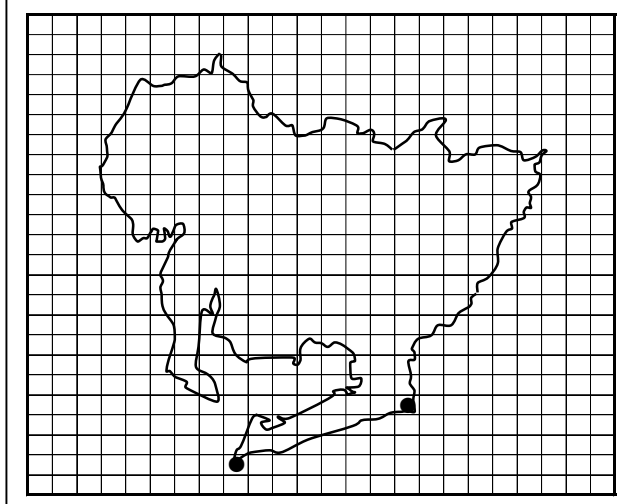
【国内の分布】

本州、四国、九州。南西諸島(徳之島以北)。

【世界の分布】

韓国、中国北部、台湾にも生息するという(市川ほか, 2000)。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

県内での既知の生息地は海岸砂浜のみであるが、他地方では内陸の河原にも生息するという。きれいな砂浜の陸側で、まばらに草の生えているような所を好む。土を被ったり汚染されたりした砂浜には生息しない。

【現在の生息状況／減少の要因】

伊良湖岬では 1952 年に記録されているが、その後の記録はない。同地は観光客が多く、海辺や砂浜への立ち入りが多い。豊橋市表浜では、1990 年当時は本種の個体数はさほど少なくはなかったという(長谷川, 1991)、その後の記録は見られない。2006 年 9 月現在の豊橋市での現地調査でも見出すことはできなかった。ここは、現在ウミガメ保護のため自動車の乗り入れが禁止されており、本種の存続にも好都合となっている。

なお、本種は一般的な鳴く虫飼育の対象とはなっておらず、採集圧による減少はないと思われる。

【保全上の留意点】

草がまばらに生える汚染のない砂浜・砂地を継続して維持すること。生息地への過度の立ち入りによる踏みつけや、自動車やサンドバギーの乗り入れによる環境の大きな攪乱・汚染を防ぐ必要がある。

【引用文献】

- 石津明右・荒川鳳三, 1953. ハマスズ、マツムシモドキ伊良湖岬に産する. 虫譜, 3 (1): 7-8.
市川顕彦・村井貴史・本田恵里, 2000. 総説・日本のコオロギ. ホシザキグリーン財団研究報告, 4: 257-332.
長谷川道明, 1991. 豊橋市表浜におけるヤマトマダラバタとハマスズの採集例. 佳香蝶, 42 (164): 63.

【関連文献】

- 日本直翅類学会編, 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑: 484. 北海道大学出版会, 札幌.
市川顕彦ほか, 2016. バッタ目. 日本直翅類学会(編), 日本産直翅類標準図鑑: 95,267. 学研プラス, 東京.

(水野利彦)

タガメ *Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy)

【選定理由】

かつては県内各地で生息していたが、近年その生息地が激減している。また、水質の悪化やマニアによる乱獲などで個体数が減っている。

【形態】

水生半翅類の中でも最大級で、体長は48～65mm。体色は灰褐色ないし褐色を呈している。前脚は強大な捕獲脚となっており、尾端に伸縮自在の呼吸管がある。口吻は短大で第2節は短い。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊川市、新城市、豊田市、西尾市、瀬戸市、尾張旭市、春日井市、犬山市などで記録されている。

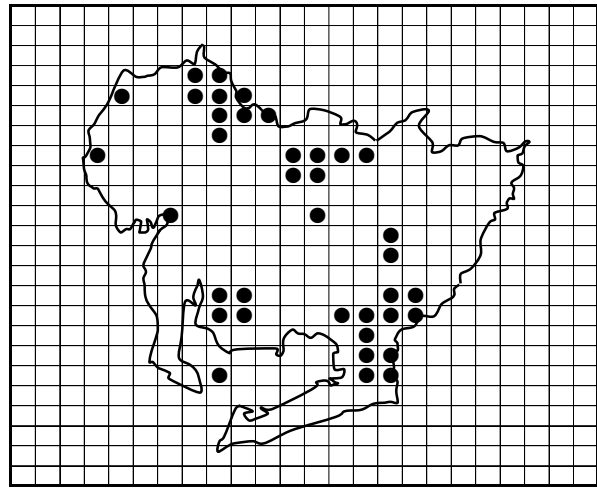
【国内の分布】

北海道、本州、隠岐、四国、九州、対馬、琉球（沖縄島、宮古島、石垣島、西表島、与那国島）。

【世界の分布】

ロシア極東（沿海州、サハリン）、中国、北朝鮮、韓国、台湾。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地から低山地にかけて、抽水植物が繁茂する溜め池などに生息する。また、水田地帯の水路や休耕田の泥深い湿地環境でも確認されている。♀は水面上の植物の茎などに卵塊を産み付け、♂がこれを守る習性が知られている。灯火によく飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

丘陵地から低山地の抽水植物が繁茂する溜め池などに生息するが、西三河地方では休耕田のような泥深い環境にも多数見られる場合がある（大塚, 2008）。

農業使用等による生息地の水質悪化、水田環境の減少や溜め池の消失などが直接的な減少要因としてあげられる。インターネット等で販売されるようになってからは、マニアによる採集圧も無視できない。最近では、カエル類やドジョウといったタガメの餌となる生物の減少の他に、ウシガエルやアメリカザリガニといった外来種の影響による減少も示唆されている（渡部・大庭, 2018）。

【保全上の留意点】

現在の生息地については、大規模な土地の開発を行う際には、十分な配慮が必要である。また、本種はインターネット等で取引されることから、業者による採集圧の影響が心配される。反面、飼育が容易であり、増えすぎた個体の放虫により遺伝子汚染や生息地の攪乱が懸念される。

【特記事項】

本種は、種の保存法で特定第二種国内希少野生動物種に指定されている。

【引用文献】

大塚 篤, 2008. タガメの分布調査と飼育(Ⅱ). 佳香蝶, 60 (234): 127-131.
渡部晃平・大庭伸也, 2018. VI. 絶滅要因と保全事例 1 タガメが減少した要因-なぜ全国的に激減したのか?- . 水生半翅類の生物学: 58-71. 北隆館, 東京.

【関連文献】

浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.
林 正美・宮本正一, 2018. 半翅目 Hemiptera. 日本産水生昆虫 科・属・種への検索 (第二版): 329-427. 東海大学出版会, 神奈川.
大塚 篤, 2003. タガメの分布調査と飼育(Ⅰ). 佳香蝶, 55 (215): 61-64.

(澤田宗一郎)

コミズスマシ *Gyrinus curtus* Motschulsky

【選定理由】

かつては名古屋市を含む県内各地で生息が確認され、県内でも普通に生息する種と考えられていたが、近年の確実な生息情報が得られなかった。県内での詳細な状況は不明だが、全国的な状況から 2000 年代以降に絶滅の危険性が高まったものと推測される。

【形態】

体長 5.5~6.2mm。ミズスマシ、ヒメミズスマシに似るが、体長が 6 mm 以下であること、体長は体幅の 1.8 倍以下であること、腹部 2、3 節の基部は後基節に沿って強くくぼまないことなどにより区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市 (佐藤, 1990)、豊田市、設楽町など。

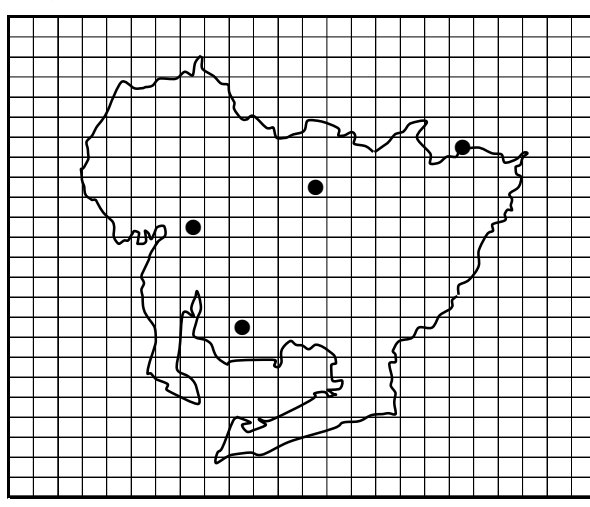
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本、サハリン。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

池、沼、水田などの止水域や流れの緩やかな小川。

【現在の生息状況／減少の要因】

1940 年代には名古屋市にも生息しており、1990 年代に豊田市、設楽町で採集された標本が残されている。過去の十分な生息状況の情報はないが、かつては各地の水田、池、小川などに普通の種 (佐藤, 1977) として認識されており、少なくとも 1990 年代までは県内各地に生息していたと思われるが、2000 年代以降の確実な生息情報がもたらされていない。減少が顕著になったのが 2000 年代以降であることから、減少の要因としてオオクチバス等による外来魚による捕食圧、またはネオニコチノイド系農薬による影響を疑う必要がある。

【保全上の留意点】

現在の生息状況を詳しく調査する必要がある。オオクチバス、ブルーギル、コイなどの外来魚の駆除を積極的に行うとともに、減少の関連が疑われるネオニコチノイド系農薬の影響を調査し、その結果により必要な対処をする必要がある。

【引用文献】

佐藤正孝, 1977. 日本産ミズスマシ科概説. 甲虫ニュース, (37) - (39).
佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫, (上): 204-231. 愛知県.

【関連文献】

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編, 1985. 原色日本甲虫図鑑(II), 514pp. 保育社.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ミズスマシ *Gyrinus japonicus* Sharp

【選定理由】

かつては、県内全体に分布していたと考えられるが、急速に減少し、2000年以降の生息情報が乏しく、大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつあると考えられる。

【形態】

体長 6.0～7.5mm。背面の光沢はやや鈍い。コミズスマシに似るが、大型（体長が 6 mm 以上）であることで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市、豊田市、設楽町、瀬戸市、犬山市（佐藤，1990）など。かつては普通種であったため、詳細な分布調査はされていないが、県内全体に分布していたと考えられる。

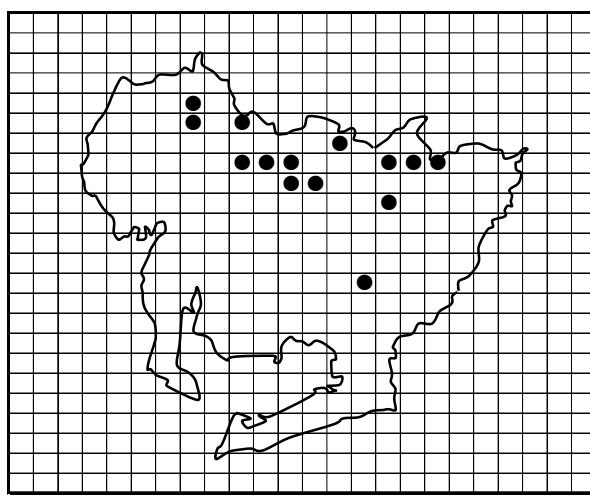
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

池、沼、水田などの止水域や流れの緩やかな小川。

【現在の生息状況／減少の要因】

2000年以降の生息情報は数カ所に限られ、絶滅の危険性はランクより高い可能性がある。減少が顕著になったのが2000年代以降であることから、減少の要因としてオオクチバス等による外来魚による捕食圧、またはネオニコチノイド系農薬による影響を疑う必要がある。

【保全上の留意点】

現在の生息状況を詳しく調査し、現存生息地を保全する必要がある。オオクチバス、ブルーギル、コイなどの外来魚の駆除を積極的に行うとともに、減少の関連が疑われるネオニコチノイド系農薬の影響を調査し、その結果により必要な対処をする必要がある。

【引用文献】

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫, (上): 204-231. 愛知県.

【関連文献】

上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝編, 1985. 原色日本甲虫図鑑(II), 514pp. 保育社.

佐藤正孝, 1977. 日本産ミズスマシ科概説. 甲虫ニュース, (37) - (39).

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

シロヘリハンミョウ *Callytron yuasai yuasai* (Nakane)

【選定理由】

海浜の岩場などに生息するが、カワラハンミョウと同様に生息地は狭められ、県内での生息情報が途絶えている。

【形態】

中型のハンミョウで斑紋は上翅側縁の細い白帯のみ。メスは上翅中央上部に鏡状の光沢のある円紋を持つ。

【分布の概要】

【県内の分布】

田原市(旧渥美町)(神谷, 1956)伊良湖岬(浅岡, 1987)、篠島(神谷, 1956)。いずれも海浜の岩場やその周辺に生息する。

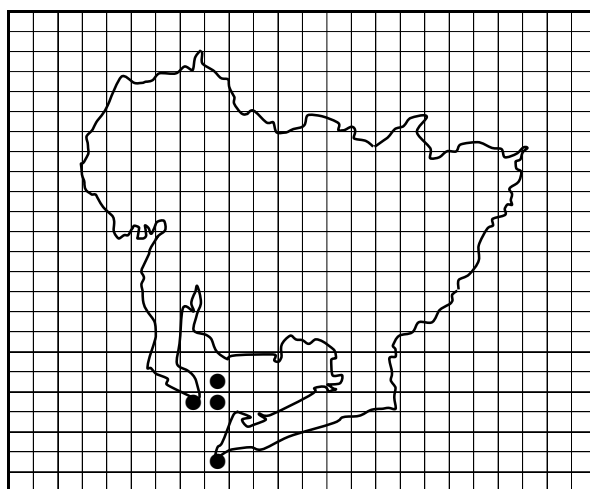
【国内の分布】

本州以南、沖縄までの各地。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾、海南島、ベトナム。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

成虫は海浜の岩場やその周辺に見られる。県内の記録は乏しく生態的な知見は少ない。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつては海岸部や島嶼に広く分布していたものと思われるが、個体数が少なく記録に乏しい。上記 2 地域についてはその後も調査されてはいるが追加の記録はない。伊良湖岬の沖合の神島(三重県)では現在も生息が確認されている(長谷川・桜丘高等学校生物部, 2014)。

【保全上の留意点】

県内の生息状況の詳しい調査が必要である。海浜への車の乗り入れを慎むなど砂浜環境の保全対策が必要である。

【引用文献】

- 浅岡孝知, 1987. シロヘリハンミョウ伊良湖岬に産す. 三河の昆虫, 34: 229.
神谷一男, 1956. 南知多・渥美・蒲郡地方に産する昆虫類. 三河湾自然公園調査報告書: 50-61.
大平仁夫, 1973. 採集されなくなった三河の甲虫 2 種. 三河の昆虫, 4: 15.
長谷川道明・桜丘高等学校生物部, 2014. 神島で確認されたシロヘリハンミョウ. 豊橋市自然史博物館研究報告 (24): 31-32.

【関連文献】

- 岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.
戸田尚希・長谷川道明・蟹江 昇, 2019. 愛知県の甲虫目録 3. 佳香蝶, 71 (277): 1-11.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ホソハンミョウ *Cylindera gracilis* Pallas

【選定理由】

本種のおもな生息地は耕作地や河川敷などであるため人為的な影響を受けやすく、現在の生息地も局地的なものとなり個体数が非常に少なくなっている。

【形態】

体長 10～12mm の小型のハンミョウで、後翅は退化し飛ぶことができない。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市周辺、庄内川河川敷。
桑畑や果樹園など地表部が露出する林床、河川敷の草間や時には畑などの耕作地に見出される。

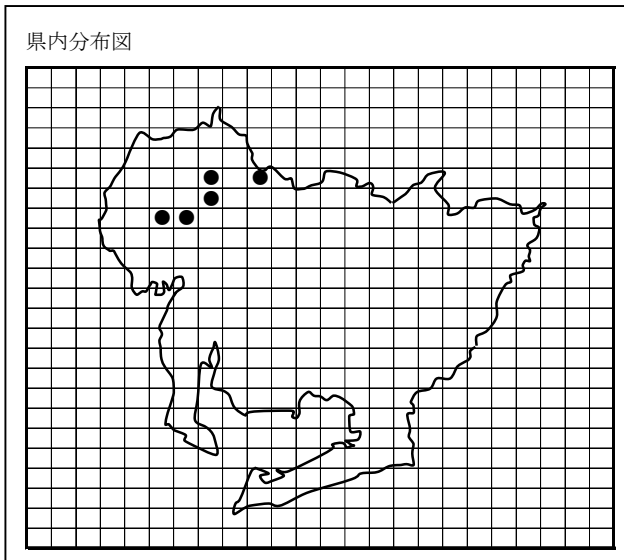
【国内の分布】

本州、四国、九州の主に低地。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国北東部、シベリア。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

本邦産ハンミョウとしては特殊な環境に生息する。多くのハンミョウ類は河川敷や海岸の砂浜、山地の道路上など日当たりの良い乾燥した場所に生息するが、本種は上記のような草地と地表が露出した部分が混在する場所を生息地とし、特に耕作地周辺などを好んで生息地とする。後翅が退化して飛べない代わりに敏速に走り回り、小動物などを捕獲して食べる。

【現在の生息状況／減少の要因】

耕作地では農薬の散布、河川敷では河川改修や公園緑地化により生息地が破壊されている。現在では庄内川の河川敷、特に小規模な耕作地の周辺にわずかながら生息地が残されていたが、2000年の東海豪雨以降の生息情報が得られおらず、実際にはランクより危急な状態にある可能性がある。

【保全上の留意点】

現在の生息地である河川敷をむやみに改変しないこと。特に、芝生を敷き詰めたような単調な公園整備は、河川敷の生態系にとって大きな障害となるため配慮が必要である。また、本種の良好な生息地となっている庄内川河川敷の耕作地における農薬の散布に際しては、十分な配慮が必要である。

【関連文献】

岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.
戸田尚希・長谷川道明・蟹江 昇, 2019. 愛知県の甲虫目録 3. 佳香蝶, 71 (277): 1-11.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

セアカオサムシ *Hemicarabus tuberculatus* (Dejean et Boisduval)

【選定理由】

愛知県からは春日井市の庄内川ただけ所から記録されている。本種は広範な環境に生息するが、山地の自然度の高い地域より河川敷や耕作地など人里の環境に多くの生息地を持っており、人為的影響を受けやすい。

【形態】

体長 16~22mm の小型のオサムシで前胸背板および上翅側縁は銅色の金属色を有する。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県からは春日井市熊野町の庄内川河川敷が唯一の記録地として知られている。

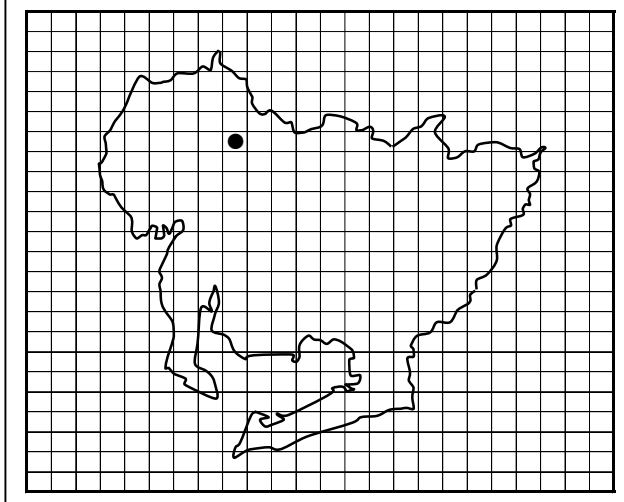
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、シベリア。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

本種は山地から低地まで広い範囲に分布し、河川敷や耕作地周辺、疎林の明るい地表などに生息する。しかし分布は局所的である。

県内唯一の記録地であった庄内川河川敷の生息環境は、砂地近くのススキがまばらに見られる場所で、砂地を生息地とするオサムシモドキと共に得られている。

【現在の生息状況／減少の要因】

記録された 1979 年には個体数は少なくなかったが、直後に生息地はブルドーザーにより整地されてしまいその後の採集例はない。河川敷の護岸整備などにより、本種の主要な生息地であったと考えられる河川敷の環境が失われたことが大きな減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

河川敷の管理、開発には十分な事前調査と生物多様性への配慮が必要。とくに氾濫源などの湿った荒れ地を好む甲虫類は、河川整備に強く影響を受ける。

【関連文献】

河路掛吾, 1979. 庄内川に生息しているセアカオサムシ. 佳香蝶, 31 (119): 46.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

コハンミョウモドキ *Elaphrus punctatus* Motschulsky

【選定理由】

生息地が河川敷や湿地など湿性環境の陸上部分であることから、護岸工事などの影響を受けやすく、従来の生息地もそれによって失われた。

【形態】

体長 6.5mm 内外。体は黒色で弱い銅光沢を帯びる。肢は赤褐色。上翅には 4 点刻列があり、各点刻は眼状紋となりその中心は暗青色を帯びる。眼状紋の間は縦長で滑らかで鐘状となる。胸部下面は粗点刻が密にある。

【分布の概要】

【県内の分布】

小坂井町（佐藤, 1980）、春日井市（佐藤, 1980）の 2 ヶ所の記録があるにすぎない。

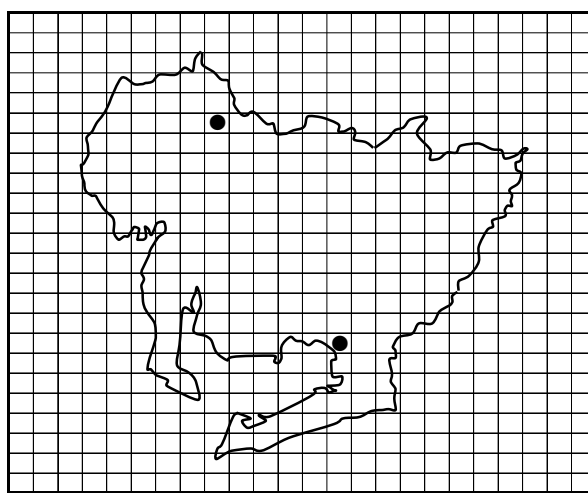
【国内の分布】

北海道、本州（中部以北）。

【世界の分布】

シベリア東部、中国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河川敷や湿地などの湿った環境を好み、草間の地面に見られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

護岸工事などによって既知産地が失われてしまって以降の生息情報はない。

【保全上の留意点】

芦原などの湿性環境の保全が大切である。

【引用文献】

佐藤正孝, 1980. 環境庁編 日本の重要な昆虫類 東海版: 84-92..

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ツツイキバナガミズギワゴミムシ *Bembidion tsutsui* (S.Uéno)

【選定理由】

海浜性の種で、満潮時に海中に埋没する潮間帯を生息地とする。本県の生息地は現在知られる本州唯一の分布地となっているが、生息域は極めて狭く、また不安定であり、絶滅の危険性がきわめて高い。

【形態】

体長 3.5mm 内外。全身黒色でやや赤みを帯びる。頭部は大きく、大顎は発達するが、歯を欠く。前胸背前角はよく突出し、基部は強く収縮する。後翅は退化し、肩部は丸まる。

【分布の概要】

【県内の分布】

知多市新舞子、および豊川河口の 2 カ所のみしか知られていない。

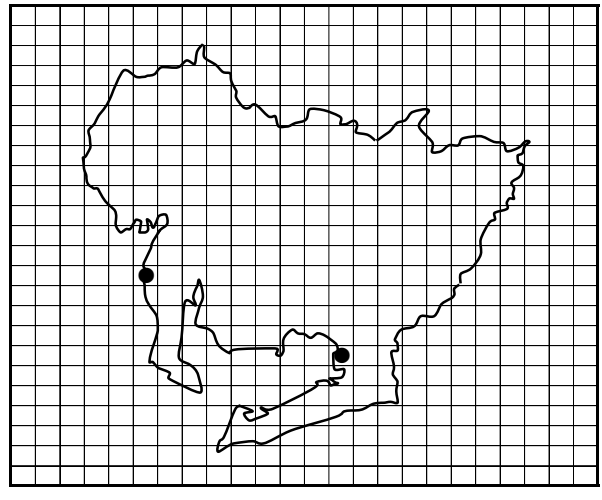
【国内の分布】

愛知県以外では、屋久島から奄美大島にかけて分布する。九州、四国では未発見。2000 年代に入って静岡県内からも発見された。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

豊川河口近くの潮間帯。生息地環境は、護岸工事により敷き詰められた岩の上に花崗岩の主成分である石英、長石、雲母よりなる砂が堆積した場所である。本種は、水没する満潮時には岩の窪みや付着したカキなど貝類の隙間に身を潜め、干潮になり、露出した岩や砂が乾いてくるとその表面を徘徊し、餌をさがす。昼間も活動するが、夜間により活発である。なお、屋久島や奄美大島での生息地は珊瑚礁である。

【現在の生息状況／減少の要因】

新舞子海岸の生息地は 1965 年に発見されたが、その後の護岸工事のため絶滅した。豊川河口の生息地は 1994 年に確認された。生息地は地形的条件から幸運にもヘドロの堆積を免れたごく狭い地域に限られ、非常に危険な状態である。減少の要因としては、潮間帯の汚染と自然海岸の減少をあげることができる。しかしながら、本種の豊川河口の生息地は自然海岸ではなく、伊勢湾台風後に人工的に護岸された地域であることから、ヘドロなどの堆積による潮間帯の汚染による影響がより深刻であると考えられる。

【保全上の留意点】

生息地付近は、常に護岸工事などが頻繁に行われる危険性にさらされている。数年前、生息地の約半分にあたる面積について護岸補強のための大規模な工事が行われたことがあるが、幸いにも工事後生息環境はほぼ元通りに復元され、工事後に本種の生息回復が確認された。このことから、配慮ある施策をとれば本種の生息地保全は可能である。しかしながら、本種の生息地となる河口部の環境維持には、上流部も含めた河川の浄化が必要である。

【特記事項】

現在の県内の生息地は 1 カ所のみ。

【関連文献】

森田誠司・白井勝巳・蟹江 昇・長谷川道明, 1996. 愛知県におけるキバナガミズギワゴミムシ類の採集記録. 豊橋市自然史博研報, (6): 27-30.

佐藤正孝, 1965. 海に住む昆虫. 井波一雄編, 名古屋の自然: 166. 六月社, 大阪.

岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ハバメクラチビゴミムシ *Trechiana habei* (S.Uéno)

【選定理由】

洞窟性の種で、豊橋市東部の蛇穴ならびに新穴および周辺の石灰岩地帯にのみ分布する、著しく分布域が狭い種である。最も主要な生息地である蛇穴では、1980年代までは比較的容易に発見することができたが、1990年代後半からは発見が極めて困難になっており、洞窟内の環境も悪化している。加えてマニアによる過剰採集やトラップの放置なども脅威となっている。

【形態】

体長 4.9~5.5mm。体色はアメ色で艶がある。複眼は退化し、わずかに痕跡が認められるのみ。前胸背は垂心臓形で後角毛がある。上翅は長卵型。*Trechiana* 属の種は互いに非常によく似た種が多く同定にはオス交尾器を精査する必要があるが、本地域に生息するのは本種のみである。

【分布の概要】

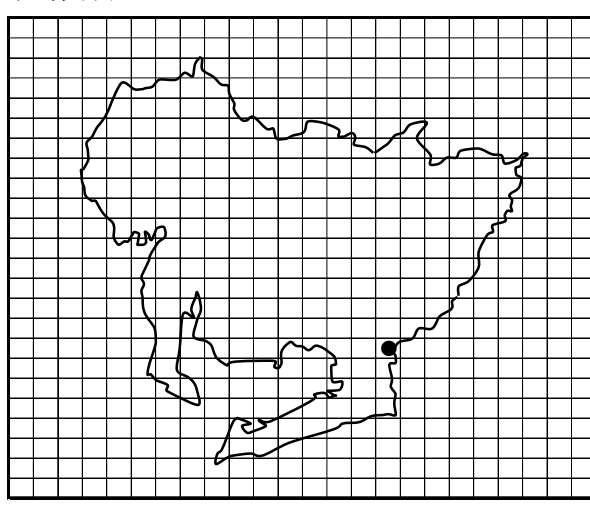
【県内の分布】

豊橋市の蛇穴および新穴の特産種。蛇穴、および新穴洞内以外でも周辺の地下浅層から採集されたという未確認の情報があり、また人が入洞不可能な洞窟深部や小さな洞窟にも生息している可能性があるため、実際には豊橋市東部から県境にかけての石灰岩地帯を分布域としていると思われるが詳細は不明。

【世界および国内の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

洞窟性の種で、洞窟内の地中、石や朽木の下などから発見される。洞窟というきわめて特殊な環境に著しく適応した種である。

【現在の生息状況／減少の要因】

主要な生息地であった蛇穴は、洞内が乾燥化している。さらに入洞者の無知、マナー悪化のため、洞内でたき火、発煙筒などを焚いた形跡がある。また一度に多人数が入洞してのイベントなども行なわれている。こうした行為による直接的な影響かどうかは不明ながら、この数年蛇穴での発見は極めて困難になっている。さらに、近年はマニアによる過剰採集や洞窟性昆虫の採集を目的としたトラップの放置などが脅威となっていると推測される。新穴については現在、入り口が閉鎖されており、また調査には高度なケービング技術を要するため最近の生息状況は未調査である。

【保全上の留意点】

蛇穴の環境をこれ以上悪化させないことが第一である。蛇穴は縄文前期の遺跡があることから国指定の天然記念物に指定されているが、入洞に規制はない。今後各方面の関係者、専門家を交えて、洞窟動物の保全対策について検討する必要がある。

【特記事項】

本県にのみ生息する特産種であり、県内の生息地の消失は、種の絶滅に直結する。

【関連文献】

Uéno, S., 1984. Studies on the Japanese Trechinae (II). Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, (B), 21: 29-37.
岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

キイロコガシラミズムシ *Haliplus eximius* Clark

【選定理由】

県内においては 1960 年には田原市（旧赤羽根町）から記録されており、平野部から丘陵地に生息したと推測されるが、平野部における多様な水域の減少で生活の場を失ったと考えられ、近年の生息情報がない。

【形態】

体長 3.2～3.5mm。体は黄褐色で、上翅に黒紋がないことが特徴である。

【分布の概要】

【県内の分布】

1960 年に田原市（旧赤羽根町）から記録されている外、情報がない。

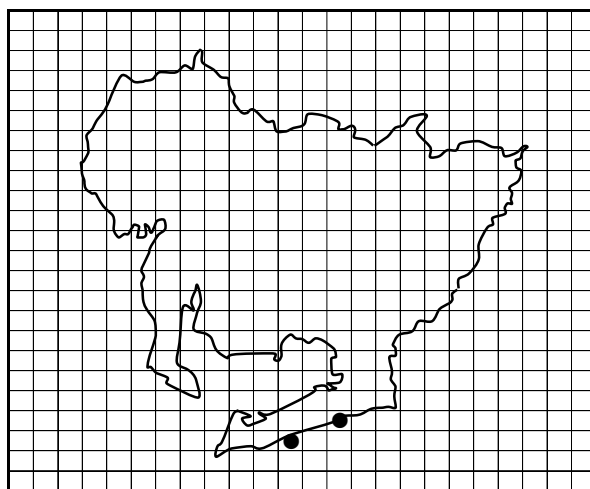
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

水草などの豊富な池沼に生息しているが、生態については何も判っていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地開発、水田の圃場整備等による生息地の消失、改変、農薬散布や生活污水による影響を強く受けたことが考えられる。三重県でも近年の確認例がない。また、水草の豊富な水域に生息する種であることから、アメリカザリガニによる水域環境の悪化も影響があった可能性がある。

【保全上の留意点】

現在ある自然度の高い池をそのまま保全することが、本種の将来的な自然回復の可能性を残すことになるばかりでなく、多くの水生生物にとって最も有効な保全手段である。そのためにも、脅威となる侵略的外来種の根絶が望まれる。

【特記事項】

古い記録は学名が *H. hiogoensis* Kano et Kamiya となっている。

【関連文献】

- 中根猛彦, 1985. 日本産ヒメコガシラミズムシ属の種の再検討. 北九州の昆虫, 32 (2): 61-67.
成瀬善一郎, 1960. 渥美半島赤羽産水棲甲虫. 佳香蝶, 12 (44): 152-153.
佐藤正孝, 1984. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書, I. 甲虫ニュース, (65): 1-4.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ゲンゴロウ *Cybister chinensis* Motschulsky

【選定理由】

生息に必要な池の減少と、汚水や農薬の流入などによる池の環境悪化などが重なり、平野部からほとんど姿を消した。

【形態】

体長 34～42mm。体型は卵形。背面は緑色あるいは褐色を帯びた暗褐色で強い光沢がある。前胸背および上翅の側縁部は黄色。体下面は黄褐色で一部黒色。肢は黄～赤褐色。♀の背面は縮刻を密に装う。

【分布の概要】

【県内の分布】

かつては広く平野部に生息していたが、現在では三河山間部の一部に見られるのみである。

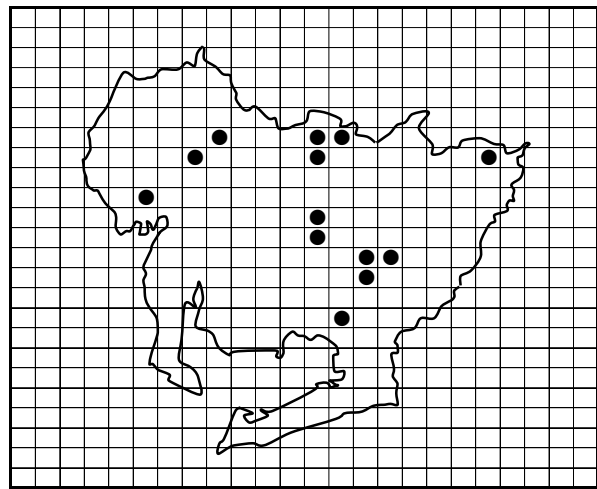
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

台湾、中国、朝鮮半島、シベリア。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ヒルムシロ、オモダカなど水生植物が豊富な池沼に生息している。

【現在の生息状況／減少の要因】

平野部の池沼の多くが埋め立てなどで失われ、生息域が著しく狭められた。現在では山間に残された池に細々と生き延びているに過ぎない。ネオニコチノイド農薬による影響も疑う必要がある。

【保全上の留意点】

止水池の護岸コンクリート化やゴムシート張りが増えてきているが、土のある良好な自然池の復元、棚田上部池の保全および水田の農薬散布に際しては十分な配慮が必要である。また、ペット業者などによる採集は厳に慎むべきである。

【関連文献】

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫, (上): 204-231. 愛知県.
北山 昭ほか, 1993. 日本のゲンゴロウ: 157. 文一総合出版.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ツヤハダクワガタ *Ceruchus lignarius monticola* Nakane

【選定理由】

自然環境の良好な山地に分布する種で、県内からは設楽町および豊田市（旧稲武町）の 2 カ所しか生息地が知られておらず、個体密度が著しく低い。加えて、森林の乾燥化や発生木の減少により、近年では姿を見ることが困難となってきている。

【形態】

体長 11～14mm。黒色で強い光沢がある筒型のクワガタムシ。雄の大顎の形態により 3 亜種に分類されており、県内の個体群は、歯が中央付近から前方に向かって出現し、亜種ミヤマツヤハダクワガタ (subsp. *monticola*) に分類される。

【分布の概要】

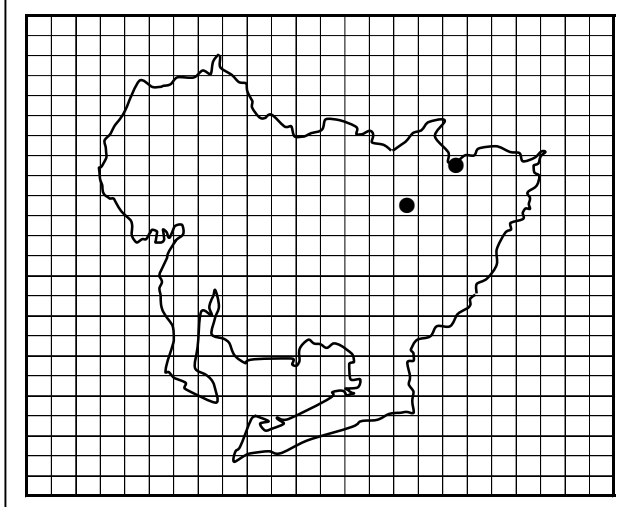
【県内の分布】

奥三河地域に分布。現在知られている生息地は豊田市（旧稲武町）（竹内・松野, 1984）と設楽町（竹内・松野, 1984）の 2 カ所のみ。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ブナ林に主に生息する。幼虫は、ブナ、ミズナラ、モミなどの比較的太い褐色不朽した朽ち木に見られる。秋に新成虫となり、そのまま越冬。6～8 月に野外に出現し、朽ち木上で発見される他、灯火にも飛来するが、成虫活動期の生態については、不明な点が多い。自然豊かな原生林に生息していることから、愛知県での分布は 2 カ所に限定されている。かつては広範に分布していたと思われるが、伐採植林による森林改変によって生息地が分断された。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内での生息密度はかなり低いものと考えられる。幼虫の餌や成虫の重要な生息場所となる赤腐れをおこした朽ち木そのものの数も少ない。減少の要因としては、原生林の伐採に伴う生息環境の縮小が第一に上げられる。残された生息地も乾燥化が進み劣悪化している。また、近年のクワガタムシブームにより心ないマニアによる過度の採集圧、幼虫、成虫の住処となる朽ち木の破壊等も無視できない。豊田市稲武町の生息地では発生木の減少から個体数の減少が著しく、近年ほとんど生息が確認できていない。

【保全上の留意点】

原生林内の乾燥化を防ぐため、林内の歩道整備、林縁部の伐採などは極力慎むべきである。マニアによる過度の採集は厳に慎むべきである。

【引用文献】

竹内克豊・松野更一, 1984. ツヤハダクワガタ愛知県下での記録. 月刊むし, (166): 8.

【関連文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヒメオオクワガタ *Dorcus montivagus montivagus* (Lewis)

【選定理由】

山地（ブナ帯）を中心に生息地する大型のクワガタムシで、近年全国的に個体数の減少が見られる。愛知県内では、非常に個体数が少なく、生息基盤が脆弱であるのに加え、近年のクワガタムシブームによりペット業者やマニアの採集圧にさらされている。

【形態】

体長 26～38mm。大型のオスでは大あごを加えると 50mm を越える個体もある。一見オオクワガタに似るが、脚が長く、前胸背板は前方で強く広がり、側縁は弧状となる。また、メスや小型のオスでも上翅にオオクワガタのような縦条は現れない。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村（旧豊根村）（大平ほか，1980）、設楽町（阿江，1973；山崎，1973）などから記録がある。奥三河地方のおよそ標高 800m 以上の山地に分布する。

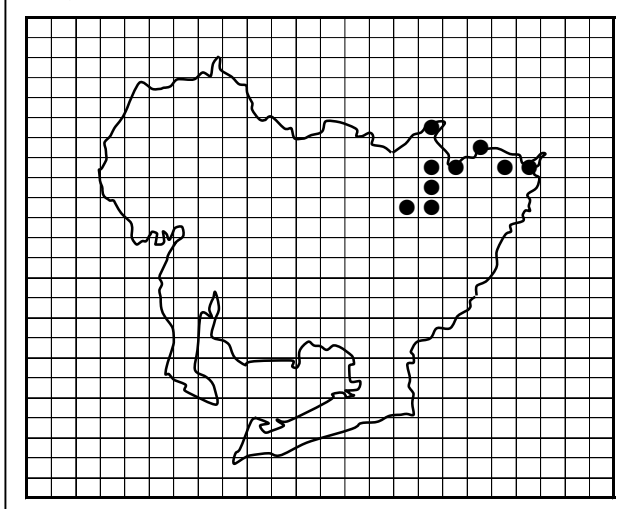
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州に分布。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ブナ帯を主な生息域とする。新成虫は秋に羽化し翌年の初夏に出現し、8月中旬から9月にかけて最も多く見られる。ヤナギ類の枝に集まり、樹液を吸う。幼虫は、ブナなどの大木の朽ち木にみられ、幼虫期間は2年ほど。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息密度は低く、発見は困難。愛知県は、本来本種の生息域であるブナ林の面積が狭く、もともとそれほど生息密度は高くなかったものと思われる。

減少の原因として、植林等による自然林の減少があげられる。また、近年のクワガタムシ人気の加熱による過度の採集圧、特に幼虫の捕獲を目的とした朽ち木の破壊が影響を与えているものと考えられる。

【保全上の留意点】

生息地であるブナ林の面積を減少させないことが必要である。幼虫が生育するブナの朽ち木には他にも多くの昆虫類が依存しているので、単に本種の保護のためだけでなく、ペット業者やマニアによる朽ち木の破壊は自粛すべきである。

【引用文献】

- 阿江 茂，1973. 愛知県北設楽郡設楽町裏谷のヒメオオクワガタ. 佳香蝶, 25 (97): 101.
大平仁夫・松野更一・山崎隆弘，1980. 愛知県豊根村の動物，鞘翅目: 195-220.
山崎隆弘，1973. 三河地方で採集した珍しい甲虫. 三河の昆虫, 3: 9-11.

【関連文献】

- 佐藤正孝ほか，1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

クロモンマグソコガネ *Aphodius variabilis* Waterhouse

【選定理由】

全国的に減少が指摘されている種で、主に平地の牛馬糞や犬糞、人糞に依存している。近年の衛生環境の改善により、平野部の牧場は減り、公園等でも放置された犬糞が減ってきているので、再発見は容易ではないだろう。

【形態】

体長 4.9～7.3mm。上翅に黒紋を持つが斑紋の変異も大きい。背部は扁平。頭部は前縁が裁断状でわずかに湾入し、小点刻を散布する。前胸背板は点刻をやや密に密布する。上翅は外縁部や後方に毛を装い、小点刻を散布する。

【分布の概要】

【県内の分布】

春日井市に古い記録があるが、近年では矢作川河川敷の記録が 1 例あるのみ。

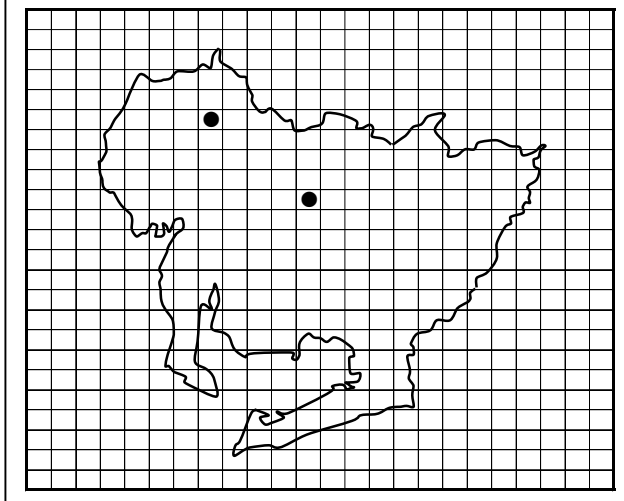
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州、対馬。

【世界の分布】

濟州島、朝鮮半島、中国、中央アジア、シベリア。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

成虫は晩秋から早春にかけて活動する。河川敷や放牧地などの開けた環境に生息し、牛、犬、人の糞などに集まる。放牧地からは減少したが、近年河川敷の犬糞から見つかった。

【現在の生息状況／減少の要因】

矢作川河川敷で採集された個体を最後に見いだされていない。近年の平野部河川敷環境では、犬の飼い主のマナー向上により餌資源だった犬糞が減り、本種の生息基盤は脆弱になっていると思われる。

【保全上の留意点】

近年の衛生環境の改善や、飼い主のマナーの改善が本種の衰退の原因であり、保全は簡単でない。

【関連文献】

- 川井信矢ほか, 2005. 日本産コガネムシ上科図説 第 1 巻 食糞群 1: 114. 昆虫文献六本脚.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 342. 愛知県.
藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 46. コガネムシ研究会.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヒメヨツスジハナカミキリ *Leptura kusamai kusamai* Ohbayashi et Nakane

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では豊田市（旧稲武町）、設楽町および豊根村（旧富山村）の3カ所のみから知られていたが、最近の生息情報がもたらされていない。

【形態】

体長 12~16mm。中型の細長いハナカミキリ。黒色で上翅には4本の黄色の帯がある。よく似た普通種のヨツスジハナカミキリとは、後肢が細長く、後けい節が湾曲しないことから区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧稲武町）（湯沢ほか，1990）、設楽町（竹内ほか，1980）および豊根村（旧富山村）（竹内ほか，1980）の3カ所が知られるにすぎない。

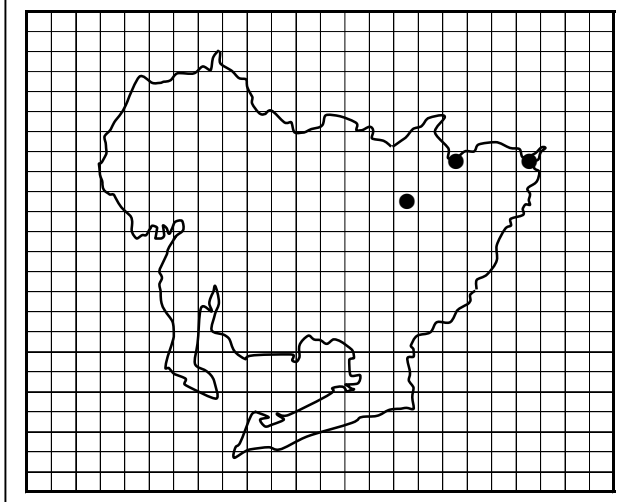
【国内の分布】

関東以西の本州、四国、九州の太平洋側の山地に分布し、四国・九州産は別亜種に分類される。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

自然度の高い森林に生活している。生息地の多くは太平洋型のブナ林である。成虫は7~8月に出現し、ノリウツギやリョウブなどの花に飛来するが、原生林内の日陰の花を好み、林縁部の日向には見られない。

【現在の生息状況／減少の要因】

1990年代以降の生息情報は明らかに減少している。ブナ原生林の減少と林内の乾燥化の影響が考えられる。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、林縁部の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。

【引用文献】

湯沢宣久・蟹江 昇・河路掛吾・竹内克豊，1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 389-433. 愛知県.
竹内克豊・原田猪津夫・松野更一，1980. 愛知県北設楽郡のカミキリムシ. 愛知県豊根村の動物: 231-285.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

イガブチヒゲハナカミキリ *Stictoleptura igai* (Tamanuki)

【選定理由】

自然度の高い森林中に生息するカミキリムシで、県内では設楽町の原生林から知られているだけである。

【形態】

体長 18~25mm のやや大型のハナカミキリ。黒色で、上翅は赤褐色。触角は黒色と白褐色のまだらとなる。近縁のブチヒゲハナカミキリとは、オスでは後けい節が強く湾曲すること、メスでは前胸背が赤くなることで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町（竹内ほか、1980）からのみ知られる。

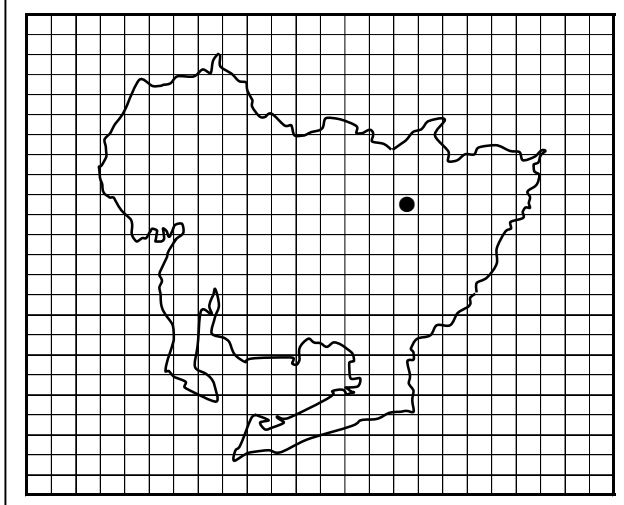
【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ブナ帯からトウヒ帯にかけて生息する。成虫は 7~8 月に出現し、ノリウツギなどの花に集まる。幼虫の寄主植物は、トウヒやサワラなどの針葉樹で、大木の中腐れから幼虫が発見されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

原生林環境の減少により生息地は減少している。近年でも少数ながら採集情報もたらされており、細々ながら生息を続けている。

【保全上の留意点】

生息域であるブナ林の面積をこれ以上減少させないことが必要である。現在の原生林の環境を守るため、特に原生林に接する道路では、林縁部の過度な伐採は、林内への悪影響をもたらす危険性が高く、慎重な配慮が必要である。

【特記事項】

設楽町には本県では珍しいモミ・ツガの群落が知られている。本種はその原生林内でツガを寄主植物として利用していると考えられ、この原生林を代表する昆虫の一つと位置づけられる。

【引用文献】

竹内克豊・原田猪津夫・松野更一、1980. 愛知県北設楽郡のカミキリムシ. 愛知県豊根村の動物: 231-285.

【関連文献】

湯沢宣久・蟹江 昇・河路掛吾・竹内克豊、1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 389-433. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヨツボシカミキリ *Stenygrium quadrinotatum* Bates

【選定理由】

1970年代までは平地から低山地にかけて普通であったが、1980年代になって減少傾向が知られるようになり、現在では発見が極めて困難になっている。

【形態】

体長 8.5~13.5mm。黄褐色~赤褐色のやや細型のカミキリムシで、上翅中央に4つの顕著な明色紋がある。触角はオスでも体長を僅かに越える程度。



豊田市, 1998年, 蟹江昇 採集,
長谷川道明蔵

【分布の概要】

【県内の分布】

ほぼ全県内から記録があるが、1990年以降の記録は豊田市(旧旭町)、名古屋市のみ。

【国内の分布】

沖縄県を除く日本のほぼ全土に分布する。

【世界の分布】

台湾、朝鮮半島からインドシナまで分布する。

【生息地の環境/生態的特性】

平地から低山地に生息する。成虫は6~7月に出現し、クリの花に好んで集まる他、灯火にもよく飛来する。

【現在の生息状況/減少の要因】

1960年代には名古屋市内でも珍しくなかったと言われるが、1990年代以降、生息情報ももたらされているのは、豊田市(旧旭町)で1997年と1998年にそれぞれ1個体、名古屋市守山区で2013年に8個体(河路, 2014)にすぎない。本種の減少の要因としては、薪が燃料として需要がなくなったため、本種の重要な繁殖の場であった薪置き場が無くなったこと、また、それと平行して薪の生産現場であった雑木林の管理放棄による荒廃や宅地造成などによる消失があげられる。なお、本種は古い時代に里山に定着した外来種ではないかとの疑いも持たれている。

【保全上の留意点】

明確な減少の要因が確定できないため、保全上の留意点をあげるのは困難であるが、里山の雑木林の荒廃を防ぐ手だてが必要であろう。現在生息が確認されている豊田市、名古屋市周辺での詳細な実態調査を進める必要がある。

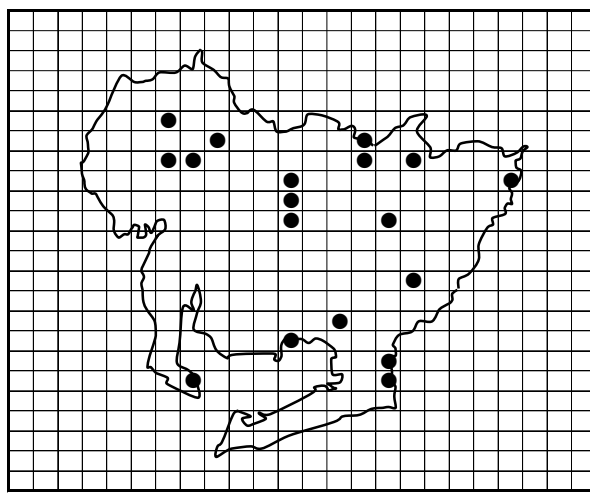
【引用文献】

河路掛吾, 2014. 名古屋市東谷山で採集したカミキリ. 佳香蝶, 66 (258): 45-46.

【関連文献】

蟹江昇ほか, 2001. 旭町の甲虫目. 旭町の昆虫: 89-173. (財)旭高原自然活用村協会.
湯沢宣久・蟹江昇・河路掛吾・竹内克豊, 1990. 愛知県のカミキリムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 389-433. 愛知県,
(長谷川道明・蟹江昇・戸田尚希)

県内分布図



クロツバメシジミ *Tongeia fischeri* (Eversmann)

【選定理由】

本県では、1970年に旧鳳来町河合で初めて発見されている(鈴木, 1973)。食草ツメレンゲ(ベンケソウ科)に依存して発生している本種は、県北東部の新城市(旧鳳来町)大島川上流、豊根村(旧豊根村、旧富山村)などの限られた地域にしか生息していない。その大島川流域のツメレンゲは、ダム工事に伴い大部分が消失した。その際一部が小学校の石垣に移植され、廃校に伴い民家の石垣へ再移植されている。2008年の現地調査の結果、住民の保護のもとに本種は、細々と生息していることが確認された。

【形態】

前翅長 12mm 程度で尾状突起をもつ小型のシジミチョウである。♂♀ともに翅表は黒褐色、翅裏は淡褐色で小黑点がある。♀は、僅かに翅形の丸みが強い。市街地にも普通に産するツバメシジミによく似るが、翅裏がより暗色で、小黑点の数が多く、♂でも翅表が黒褐色であることで容易に区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村(旧豊根村、旧富山村)、東栄町、新城市(旧鳳来町)に記録がある。

【国内の分布】

大きく分けると、関東・中部地方の分布域、近畿地方から山口県の瀬戸内海側と四国・九州内陸部の分布域、対馬を含む九州地方の分布域の3つがある。生息地は西日本に多い。

近県では、静岡県北西部、岐阜県高山市に産地がある。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国東北部、中国、ロシア南部、モンゴルからウラルにかけて分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

本種の幼虫の食草ツメレンゲの生育地は、山間地の岩場、露岩地、がれ場、人工の石垣など限られた特異な場所である。

成虫は、年3回(4月末～5月上旬、8月、9月末～10月上旬)発生している。幼虫は葉肉内に潜入、幼虫で越冬する。成虫は、生息地から遠く移動することは少ない。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内では、大島川流域の岩場から知られていたが、ダム工事に伴い大部分が消失した。地元有志によってツメレンゲごと地元の小学校に移植され、ここで発生を繰り返していたが、この小学校も2002年より廃校となり、民家の石垣へ再移植が試みられ、住民の保護のもとに細々と生息している。

【保全上の留意点】

食草のツメレンゲの自生地の保全が急務である。大島川流域には、生息が可能と思われる環境がまだ残存しており、引き続き詳細な調査が望まれる。本種は、翅裏の色調・斑紋には地域差が知られているため、過度な採集の恐れもある。

【特記事項】、個体数

1999年に旧鳳来町は、食草を移植した小学校の石垣周辺を「七郷一色のクロツバメシジミ生息地」として天然記念物に指定している(横山, 2000)。食草のツメレンゲ自体も本県の準絶滅危惧種にランクされている。

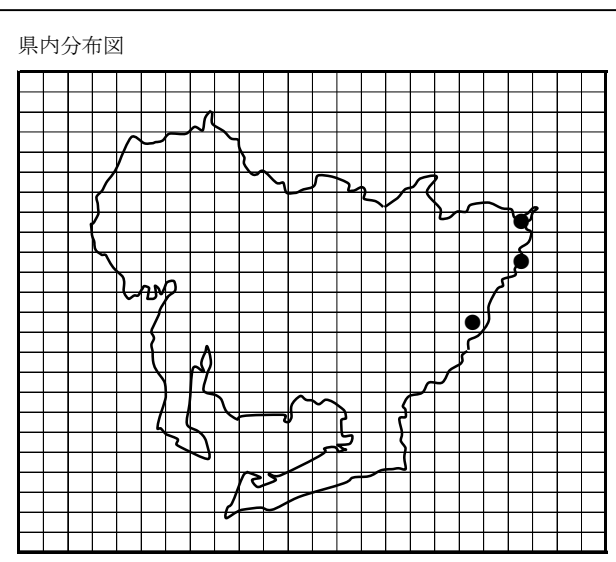
【引用文献】

- 鈴木友之, 1973. 愛知県で発見されたクロツバメシジミ. 三河の昆虫, (1): 2.
横山良哲, 2000. 鳳来町七郷一色のクロツバメシジミ生息地・町文化財(天然記念物)に指定. 鳳来寺山自然科学博物館報 29号: 35-36. 鳳来寺山自然科学博物館, 鳳来町.

【関連文献】

- 白水 隆, 2006. クロツバメシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 146-147. 学習研究社, 東京.
巢瀬 司ほか, 2003. 22. 愛知県. 日本産蝶類の衰亡と保護第5集. 日本産蝶類異別レッドデータ・リスト(2002年): 82-87. 日本鱗翅学会, 東京.
横山良哲, 2008. ほのか、ふるさとの心を結ぶ小さな蝶々. 広報しんしろ: 35. 新城市.

(2009年版を一部修正)



ヒメヒカゲ *Coenonympha oedippus* ssp.

【選定理由】

愛知県から岐阜県東濃地方、一部静岡県浜松市周辺の丘陵には、シデコブシ、シラタマホシクサなどこの地方に特有の東海丘陵要素植物が自生する湿地・湿原があり（愛知県環境部自然環境課，2007）、その環境に発生するヒメヒカゲ、ヒメシジミが生息していた。このような発生地となる湿地・湿原はかつて名古屋市内の東山から八事など東部地区などから豊田市、岡崎市、豊橋市などに点在し、本種が多産したが、近年、これらの発生地のほとんどが都市化などにより消滅し、岡崎市、豊橋市、新城市の発生地を除いて絶滅した。2018年の調査では豊田市旧藤岡町を除く地域では発生を確認している。

【形態】

前翅長 1.5～2.0cm、本州産ジャノメチョウ科の中ではヒメウラナミジャノメなどとともに小型。翅表には斑紋がなく、全体的に♀は暗褐色、♂は黒褐色に近い。裏面は橙褐色で、眼状紋が外縁に並び、♀では数が多く、大きい。♂の前翅裏面では、眼状紋はないか、1～2個で、小さく、外縁近くの銀色条を欠く。これらの点から、♀との区別が容易である。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張地方（春日井市、名古屋市東北部、長久手市、日進市、瀬戸市）から西三河（豊田市、みよし市、知立市北部）にかけて、岡崎市の一部、東三河（豊橋市、新城市）のほぼ3地区から記録がある。いずれも丘陵の窪地や山裾の明るい湿原である。尾張地方の産地は岐阜県東濃地方の産地とも連なる。近隣の長野県木曾地方には確実な産地がなく、塩尻や松本地方との間に分布空白地帯がある。東三河南東部の産地は、西遠地方（湖西市、浜松市、袋井市）などにも及ぶ。

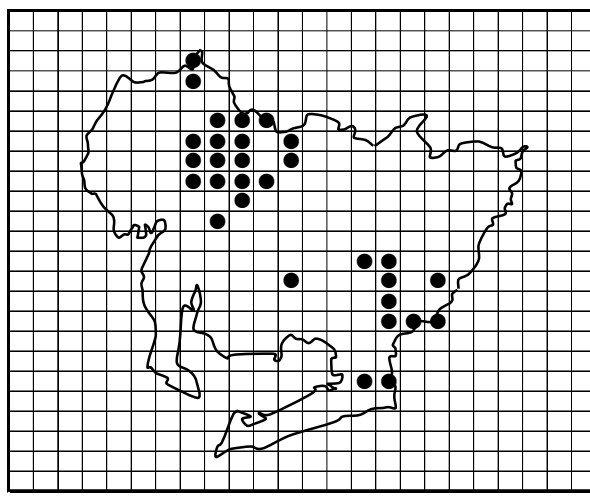
【国内の分布】

本州特産。本州では、東北地方には分布しない。長野県から群馬県にかけての生息圏があり、この地域では乾燥した草原が主な発生地となり、東海地方の産地とは異なる。兵庫県から山口県にわたる近畿中国にも生息圏があり、東海地方と同じく湿地との結びつきが強い。三重県、京都府、大阪府からも古い採集記録があった。

【世界の分布】

朝鮮半島からユーラシア大陸に広く分布し、ヨーロッパに及ぶ。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

東海地方の産地はすべて、サギソウ、モウセンゴケや小型のスゲ科、イネ科の植物が生える明るい湿原である。旧作手村など一部の産地ではヒメシジミと混生している。また、産地にはウラナミジャノメが見られることが多い。年1回、5月下旬から発生し始め、ほぼ1か月間見られる。成虫は産地を離れることがなく、湿地を緩やかに飛び、低木や食草に止まることが多い。花や地表にとまる習性は乏しい。卵は食草自身に産附され、7月に孵化、幼虫は小型で柔らかいイネ科やカヤツリグサ科の葉を食べ、成長は緩徐、中齢幼虫で越冬し、翌年5月頃食草に垂下して蛹となる（葛谷・高橋，1952）。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市、瀬戸市など尾張地方、西三河地方からの減少が著しく、2000年に入ってから報告がほとんどない。岡崎市、新城市旧作手村などでは限られた湿地に保護されて生息している。2007年の新城市旧作手村の調査では2箇所のみ生息が確認された。近隣の瑞浪市や中津川市など東濃地方、長野県下伊那郡の産地はすべて湿原であったため、埋め立てなどにより産地そのものが変貌し、本種も消滅した。

絶滅のもっとも大きな要因は発生地である湿原の消滅である。名古屋市などでは住宅、学校、工場、ごみ処理場などに、瀬戸市などはゴルフ場になったところが多く、これに干拓が拍車を掛けた。風水害で湿地が泥土で埋まった産地もある。

【保全上の留意点】

本種の生態的特徴からみて、生息地の復元の可能性はほとんどない。現在の生息地の保全に最大の努力を払わなければならない。発生地周辺での農業散布に際しては、十分な配慮が必要である。

【特記事項】

愛知・岐阜東濃・西遠地域のヒメヒカゲは、他産地のものと隔絶されており、斑紋や色彩に差があり、これらの集団は分類学的にも貴重である。東海地方産は、長野県などと同様本州中部亜種 *annulifer* が使用されたり、本州西部亜種 *arothius* として扱われたりする。ここでは、亜種名を未決定とした。県条例に基づく指定希少野生動植物種。

【引用文献】

葛谷 健・高橋 昭，1952. ヒメヒカゲの生活史. *New Entomologist* 2 (3/4): 43-50, pl.1-2.

愛知県環境部自然環境課，2007. 保全の考え方—適切な保全活動の推進を目指して—: 1-50.

【関連文献】

福田晴夫・浜 栄一・葛谷 健ほか，1984. 原色日本蝶類生態図鑑，(IV): 157-160. 保育社，大阪.

(2009年版を一部修正)

ウラジャノメ *Lopinga achine achinoides* (Butler)

【選定理由】

本種は愛知県では1998年6月6日に北設楽郡旧富山村（現豊根村富山）の漆島川の道路脇の崖から4♂が初めて採集された（白井, 1998）唯一の記録であった。2016年からの宮本らの調査により北設楽郡設楽町岩古谷山で新たに本種が確認された（宮本, 2017）。近隣の静岡県佐久間町から記録されており、本州中部の産地での最南端の貴重な記録である。

【形態】

前翅長26mm程度。翅表はくすんだ灰褐色、外縁近くによく目立つ眼状紋がある。裏面は淡い灰褐色で翅表と同様の眼状紋があるほか、その紋列の内側に白い線がある。このような斑紋の特徴は近似種にはないことから同定は容易である。♀は♂よりもやや大きく、全体に色彩が淡く、眼状紋が大型となる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊根村富山（旧富山村）、設楽町から記録がある。近隣の岐阜県東濃地方からは未知。長野県木曾郡では大桑村野尻が最南端の記録である。開田村（現木曾町）では比較的採集例が多い。

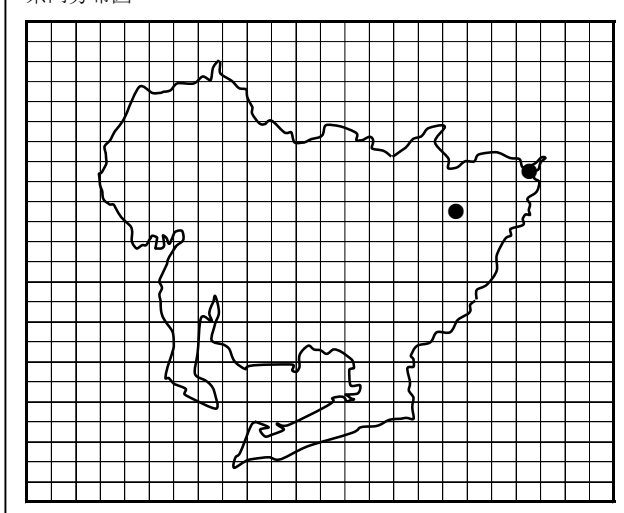
【国内の分布】

北海道（利尻島と道央～道東）と本州に分布、長野県を中心とした分布圏では産地が比較的普遍的で、個体数も多いが、それ以外では局地的。西日本では島根県と山口県の県境の恐羅漢山付近にみに生息する。このような特異な分布をしており、愛知県の記録は重要である。

【世界の分布】

国外では朝鮮半島からユーラシア大陸の北部に広く分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

本種は、中部地方では、落葉広葉樹林帯の上部の比較的明るい針葉樹林や広葉樹林の林床に生息し、低山には生息しない。旧富山村の産地は標高約500mの渓谷で針葉樹林帯の中を林道が貫いており、路傍の崖地から採集された。中部地方の最南、かつ最低標高の記録である。

年1回の発生。中部地方では6月中旬から見られる。この点からも愛知県産はやや早い時期の採集例であり注目される。草地を低くゆるやかに飛び、下草の葉表によく止まる。花を訪れる習性は乏しい。長野県での観察によれば、産卵は7月、地上に放卵する習性がある。卵は10日ほどで孵化し、年内に3～4齢まで成長して越冬する。翌春冬眠から覚め摂食を開始し、老熟すると食草を離れ、蛹となる。愛知県では、幼生期の観察例はない。

【現在の生息状況／減少の要因】

2017年に記録が発表されて以来、多くの採集者が訪れるようになっており、保護の必要性がある。

【保全上の留意点】

崖地の表面をコンクリートなどで覆うなどのことを控えることが望ましい。また樹林が切り開かれて明るくなりすぎても、繁茂して暗くなり過ぎても生息できなくなるので注意が必要である。

【特記事項】

東北地方では宮城県と山形県の県境付近に生息するほかごく少数の産地しか報告がない。中国地方唯一の産地である恐羅漢山では標高1,346mの山頂付近にのみ生息する。ここは林床の草が乏しく、成虫は樹林の上を飛ぶ習性がある。

【引用文献】

- 白井和伸, 1998. 愛知県富山村でウラジャノメを採集. 虫譜, 37 (1): 15.
宮本昌幸, 2017. 愛知県のウラジャノメの新産地について. 月刊むし, 559: 27-29.

(2009年版を一部修正)

クロヒカゲモドキ *Lethe marginalis* Motschulsky

【選定理由】

愛知県の本種は、1937年8月7日に鳳来寺山から初めて採集され、1938年に報告された。1951年には旧額田郡宮崎村(現岡崎市)と北設楽郡設楽町から記録され、以後三河山地から点々と成虫や幼虫が発見された。近隣の岐阜県東濃地方や長野県木曾地方からも、最近の観察例が激減している。これは全国的な現象と考えられる。

【形態】

前翅長、♂31、♀34mmのジャノメチョウ科。翅表は濃褐色、前翅の外半はやや淡色、後翅の外縁に沿って眼状紋が並ぶ。裏面は淡褐色で、前翅、後翅ともに外縁に眼状紋がある。近似種のクロヒカゲやヒカゲチョウに一見似るが、翅形が丸く、眼状紋が大きく目立つ。前翅の裏面の眼状紋は3個あり、このうち最も下の紋が最大であることから、クロヒカゲ、ヒカゲチョウと区別する。♂は♀に比し小型。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県からの記録はすべて三河からで、尾張からの記録がない。既知産地は、岡崎市、豊田市、北設楽郡(東栄町、設楽町)、新城市など、比較的産地の報告は多い。岡崎市では分布も広く、得られた個体数も少なくない(高橋ほか, 1991)。近隣の岐阜県東濃地方では、産地の報告例が少なく、中津川市など東北部から記録されている。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布するが、東北地方からは最近の記録がない。いずれの産地でも局所的。

【世界の分布】

朝鮮半島から中国に産する。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県では、山間の集落周辺の林縁や、谷筋の林道に沿った明るい疎林の周辺などに生息する。クロヒカゲが多産する暗い樹林内は好まない。飛び方はクロヒカゲよりも緩徐で、樹液、落花、獣糞、湿地に飛来する。花で吸蜜することはない。♂は夕方になると枝の先端に止まり、占有行動をとる。

年1回の発生、6月下旬から発生し、9月まで見られる。愛知県では7~8月の記録が多い。チヂミザサ、ススキほか多くのイネ科に産卵、幼虫はこれらの葉を食べる。4~5齢幼虫で越冬し、翌春6~7齢に達し、蛹化、羽化する。

【現在の生息状況／減少の要因】

1990年代に入り、野外で本種の成虫や幼虫をみかけることが激減した。年により発生の変動もあるらしい。里山の放置は本種の減少に拍車を掛けたものと思われる。減少の要因は愛知県のみならず、他府県でも明らかでない。

【保全上の留意点】

減少の要因が不明であり、根本的な対策を講じたい。林縁や林床にススキなどの自生する環境は保全する必要がある。路傍の草刈、農薬の散布も注意を払うべきである。

【特記事項】

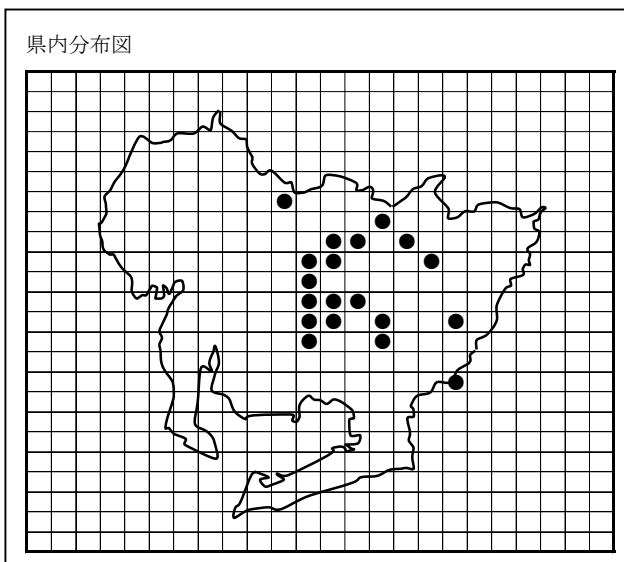
本種は長野県や山梨県では、キマダラモドキと混生しているところが多い。愛知県ではキマダラモドキは1970年東加茂郡旭町(現豊田市)で記録されている。

【引用文献】

高橋 昭ほか, 1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下): 21-95. 愛知県.

【関連文献】

渡辺一雄, 1938. 鳳来寺山の八月の蝶. Zephyrus, 7 (4): 284.



(2009年版を一部修正)

スジグロチャバネセセリ *Thymelicus leoninus* (Butler)

【選定理由】

愛知県では、1951年に北設楽郡豊根村茶臼山で初めて記録された。その後、三河山間部から若干の報告があったが、公式な記録が途絶えていた。近年になり豊根村茶臼山付近にも生息していることが確認された。環境悪化に伴い近年は急速に個体数を減じている。近隣の岐阜県においても、近年急速に個体数が減少しており、この傾向は全国的である。2018年以降継続調査を行っているにも関わらず確認されていない。

【形態】

前翅長 12mm 前後。翅の表は黒褐色に橙色の斑紋が広がる。裏は一様に黄橙色で、翅脈上に黒条が目立つ。♀は前翅の基部と中室外方に暗褐色紋をもち♂との区別は容易であるが、近似種ヘリグロチャバネセセリの♂♀に類似する。また、ヒメキマダラセセリと誤認されることも少なくない。これらの3種は、翅の裏面が一様に橙色で、翅脈が細い黒線となる共通点があるので区別には注意する。

【分布の概要】

【県内の分布】

北設楽郡豊根村、設楽町、旧稲武町黒田貯水池(現豊田市小田木町)、旧足助町大多賀(現豊田市大多賀町)から記録されている。

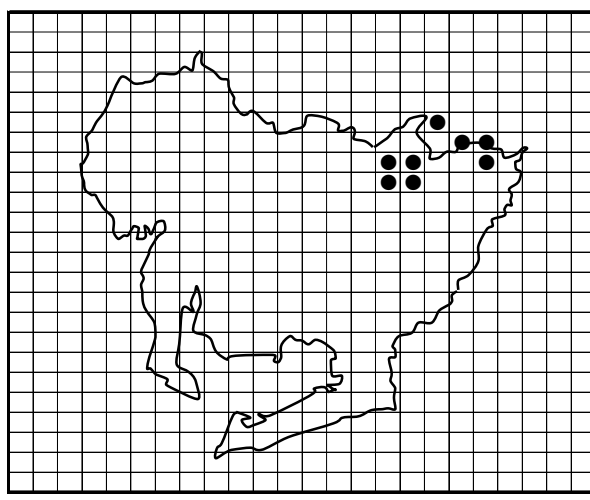
【国内の分布】

北海道南部、本州、四国西部、九州に分布し、産地は局所的。関東以西では山地に草原に限って発生する。近畿地方には大きな分布空白地がある。四国の産地は海岸に近く、例外的である。

【世界の分布】

朝鮮半島から中国にかけて分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

関東や中部地方、九州などでは、明るい山地草原に多く見られる。木曾、東濃、愛知県などでは、山間の明るい草地、林道脇にも発生するが、局所性が強い。敏捷に飛び、飛行中は見失いやすいが、ヒメジョオンやアザミ類など各種の草本の花を訪れ吸蜜するので、このときは目に付きやすい。年1回の発生。2004年～2014年、11年間における豊根村茶臼山付近での観察では、7月下旬から発生し8月中旬には姿を消す。ヘリグロチャバネセセリとの混生地では、本種は1週間ほど発生が遅い。枯れたヤマカモジグサ、ヒメノガリヤスなどのイネ科食草物に産卵し、孵化した幼虫はそのまま越冬、翌春から摂食し始め、初夏に蛹となる。愛知県では、卵や幼虫は発見されたことがない。

【現在の生息状況／減少の要因】

草地の管理放棄による植物遷移や過度な草刈りにより激減している。長野県でも、ホシチャバネセセリ、チャマダラセセリとともにもっとも減少が著しいセセリチョウである。草原が森林化した生息地では原因が明らかであるが、生息地の景観に大きな変化がみられなくても激減している。ヘリグロチャバネセセリとの混生地では、本種の減少が著しい。

【保全上の留意点】

原因が不明であり、保全の対策が立てがたい。草地の適切な保全、森林化の防止とともに、耕作地に近い産地では殺虫剤の散布に注意が必要である。

【特記事項】

近似種のヘリグロチャバネセセリの愛知県での採集記録は、1963年8月16日に旧稲武町下黒田と黒田ダムとの間という記録、および旧東加茂郡旭村(現豊田市)で1967年6月21日1♂採集、多数目撃という記録がある。ともに標本が現存せず、種々の観点から同定に疑義が残る。その後の調査でもヘリグロチャバネセセリは確認できないため、今回ヘリグロチャバネセセリは愛知県からの正確な記録がない種として扱った。

【参考文献】

- 高橋 昭, 1974. スジグロチャバネセセリとヘリグロチャバネセセリ. 一名古屋地方の分布とスジグロチャバネセセリの産卵と越冬態の観察. 佳香蝶, 26 (100): 69-72.
吉田正樹, 1986. 黒田貯水池付近におけるセセリチョウ科6種の発生と訪花植物について. 佳香蝶, 38 (147): 41-46.

(2009年版を一部修正)

ミヤマチャバネセセリ *Pelopidas jansonis* (Butler)

【選定理由】

尾張地方から三河地方に広く生息していたが、最近の記録を調べると、著しく減少しており、いずれの地域でも個体数は少ない。

【形態】

もっとも普遍的にみられるイチモンジセセリに一見類似する暗褐色のセセリチョウ。イチモンジセセリとは属も異なる。近縁種のチャバネセセリによく似ているが、後翅裏面中央の中室部に明瞭な銀白紋をもつことから容易に本種と同定できる。前翅にある♂の性標はチャバネセセリほど明瞭ではない。♀がやや大型、腹部が太いことを参考にして♂♀を区別する。春型は夏型に比しやや小さい。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市内（守山区、千種区、天白区、名東区）、犬山市、瀬戸市、春日井市、豊田市、新城市、北設楽郡（東栄町、豊根村）、豊橋市などから採集記録がある。名古屋市内でも同時に数頭が採集されるなど、かつては分布も広く、個体数も決して少なくないものと思われていた。近隣の岐阜県でも大垣市の標高 10m から、飛騨市（旧大野郡清見村）の標高 900m まで知られる。

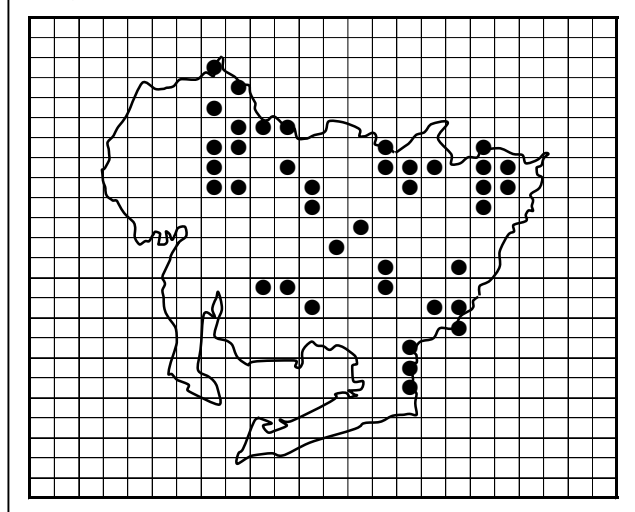
【国内の分布】

本州、四国、九州、に広く生息地が知られ、佐渡島、隠岐島、淡路島などの島嶼からも記録があるが、常に見られるといった生息地を聞かない。北限は青森県の竜飛岬、南限は鹿児島県佐多町と指宿市。海岸でも記録がある。垂直分布は 2,000m にも及ぶとされる。地理的分布は普遍的であるが、近年激減し、まれな種類となったと考えられる。

【世界の分布】

朝鮮半島から中国東北部にかけて生息する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

本州中部の主な生息地は、標高 300~800m 付近の明るい草地である。広い草原には少なく、適度の起伏、水系、疎林、林道などが混在する草地を好む傾向が見られる。市街地の住宅の庭で発見されることもあり、コキマダラセセリのような草原性セセリチョウとは生息環境が異なる。

4~6 月と 7~8 月の年 2 回発生する。本種の幼虫の主な食草はススキやチガヤなどであり、これらも分布が広い。従って、本種の生息地の特性を明示することが難しい。成虫は多くの草花を訪れたり、地上で吸水したりする。飛び方はチャバネセセリやイチモンジセセリなどに比べ敏捷でない。

幼虫は食草の葉を筒状にした巣を造り、その中に潜んでいる。蛹化前に巣を離れ、食草の葉に窪みを作り、そこで蛹化するため、半裸の状態で見つかる。多くのセセリチョウが幼虫越冬であるのに対し、本種は蛹で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では近年の観察例が激減した。これは日本全国に共通する現象と思われるが、詳細については報告がない。生息地や食草は特定された条件が見出されず、減少の要因は気候の変化、酸性雨や農薬などの化学的要因などが示唆されるが、目下のところ不明としか言えない。

【保全上の留意点】

全国的に本種の生息状況を詳しく調べ、減少の要因を明らかにすることが根本的な保全に繋がるものと考えられる。農薬の散布に際しては、十分な配慮が必要である。

【関連文献】

高橋 昭・葛谷 健. 1956, 中部東海地方産蝶類目録第 3 報. 佳香蝶, 8 (29/30): 1-123.
福田晴夫・浜 栄一・葛谷 健ほか, 1984. 原色日本蝶類生態図鑑, (IV): 269-274. 保育社, 大阪.

(2009 年版を一部修正)

ベニイトトンボ *Ceriagrion nipponicum* Asahina

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は66%、
現存数は9.5であり、絶滅危惧
Ⅱ類に相当する。

【形態】

本州原産のイトトンボでは唯
一、♂の全身が朱赤色となる種
であり、和名もそれに由来する。



♂. 長久手町三ヶ峯, 1992年6月20日, 高崎保郎 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河にかけての平野部を中心とした
28市町村(旧市町村単位)で記録されている。

【国内の分布】

本州東北部から九州南部にかけて記録され
ている。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、平地から丘陵地にかけての大
規模な改修が行われていない抽水・浮葉植物
の豊富な古い溜池で見られることが多い。未
成熟成虫は、付近の草むらで見られることが多
いが、相当の分散力を示す例もあると推測さ
れる。幼虫は、水生植物につかまっている。
基本的に1年1化と思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

尾張から西三河では、2000年頃は日進市
などわずかな産地しかなかったが、2000年代後半に名古屋市や一宮市(旧尾西市)、稲沢市、瀬戸
市等で新産地が発見された。2010年代になってからも名古屋市、豊田市、豊明市等で新産地が発見
され、その中には以前は生息していなかった池に近年侵入したと考えられる例もある。東三河では
静岡県に近い豊橋市に現存する。

本種は水域の汚染や植生の消失などの環境変化に弱い種と思われていたが、意外に図太く、新産
地へ分散する能力を有していることが明らかになってきた。

【保全上の留意点】

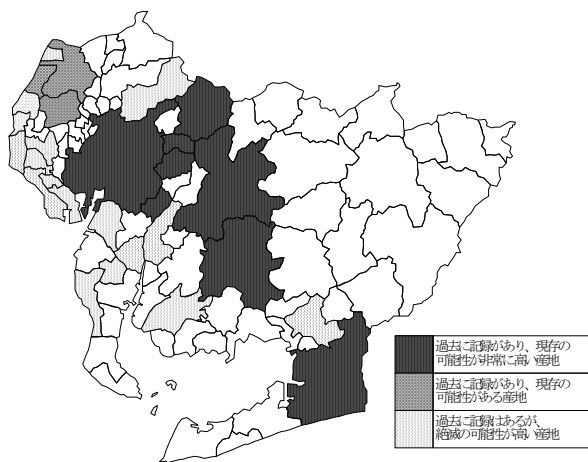
- 1) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止
- 2) 幼虫の生息域となる岸辺の浮葉・抽水植物の確保
- 3) 成虫の休息域となる水域周辺の草地の確保

【特記事項】

今後も新産地が見つかる可能性が高い。とは言え、生息条件である植生があること、本種を捕食
する外来生物がない、または少ないこと、そして近くに本種が生息していること等の条件が揃わ
ないと新産地拡大にはつながりにくい。

(吉田雅澄)

県内分布図



オグマサナエ *Trigomphus ogumai* (Asahina)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は63%、
現存数は7.5であり、絶滅危惧
Ⅱ類に相当する。



♂. 長久手町岩作, 2001年5月11日, 安藤 尚 撮影

【形態】

邦産コサナエ属の最大種である。
同属他種とは、翅胸前面に
太いL字形斑のほか、その外側
に細い前肩条と小さい黄色点が
あり、♂では尾部付属器の背面
に突起があることで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平野部とその周辺域の20市
町村で記録されている。

【国内の分布】

本州中部から九州南部にかけて記録されて
いる。

【世界の分布】

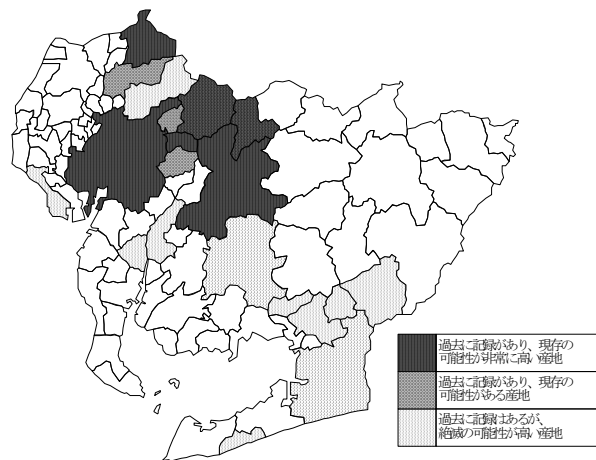
日本特産種である。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、おもに平地から丘陵地にか
けての泥底のある古い溜池や、それにつな
がる緩流などに見られる。未熟成虫は、生
息地を遠く離れることはないようで、発
生地周辺で見られることが多い。幼虫は、
泥底に浅く潜っている。

本種は4月上・中旬から羽化し、5月を
中心に成熟成虫が見られる。幼虫は野
外での観察や飼育結果から、成虫になる
までに通常2年を要する。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

尾張東部から西三河の丘陵地に現存する。東三河の産地では記録が途絶えている。現存産地はフタスジサナエと似た分布を示す。かつては本種とフタスジサナエが共存する池沼があちこちに存在したが、現在では五指にも満たない。

フタスジサナエと同様、本種幼虫は水質汚濁や改修による底質環境の改変に非常に弱く、さらにオオクチバス（ブラックバス）やブルーギルによる食害の影響も無視できない。本種やフタスジサナエなど平地から丘陵地に生息する止水性のトンボの壊滅は、人間による自然破壊を如実に物語っている。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域の水質汚染防止と底質環境の保全
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の草地・林地の確保
- 3) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

本種は西日本を主たる分布域とし、愛知県は分布のほぼ東限にあたる。
和名はトンボ分類学の先駆者である小熊桿博士に因む。

(吉田雅澄)

フタスジサナエ *Trigomphus interruptus* (Selys)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は60%、
現存数は8であり、絶滅危惧Ⅱ
類に相当する。

【形態】

体色は黒地に黄色の条斑を持
つ小型のサナエトンボである。
胸側の第1側縫線の黒色条が完
全に上縁に達することで、同属
他種と区別できる。

和名は胸の第1・第2側縫線
を2本のスジと見立てたことに
由来する。



♂. 豊田市八草町, 2007年5月11日, 安藤 尚 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の平地から丘陵地にかけての
20市町村で記録されている。

【国内の分布】

本州中部から九州南部にかけて分布し、老
岐等の離島でも記録されている。

【世界の分布】

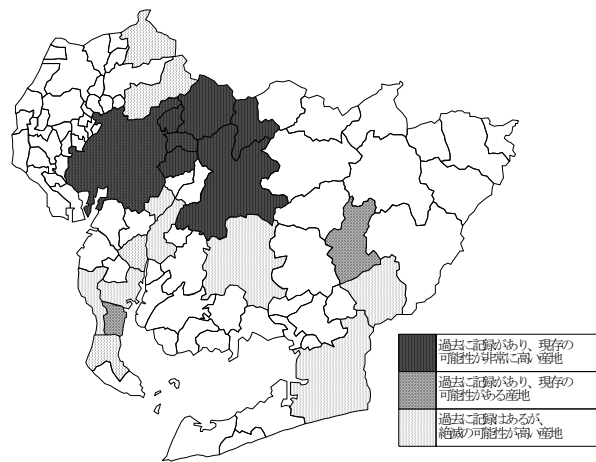
日本特産種である。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、おもに平地から丘陵地にかけ
ての古い溜池で見られる。未熟成虫は、生息
地を遠く離れることはないようで、発生地周
辺で観察される。幼虫は、浅く泥に潜って生
活している。泥との結び付きが強いようで、
一見同じような池でも、泥が堆積していない
と発見できない。

4月中旬頃から羽化が始まり、成熟成虫は5
月を中心に見られるが、一産地でのピークは
短い。幼虫は野外での観察や飼育結果から、
成虫になるまでに通常2年かかる。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

尾張東部から西三河にかけての丘陵地に現存する。知多半島や東三河にも生息していたが、近年
記録が途絶えている。

幼虫は水質汚濁に非常に弱い上、改修による底質環境の改変も絶滅の引き金となる。さらに近年
は、オオクチバス（ブラックバス）やブルーギルによる食害の影響も否定できない。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域の水質汚染防止と底質環境の保全
- 2) 成虫の休息域となる水域周辺の草地・林地の確保
- 3) 幼虫／成虫を捕食する可能性のある外来魚の移入禁止

【特記事項】

本種は西日本を主たる分布域とし、愛知県は分布のほぼ東限にあたる。

(吉田雅澄)

エゾトンボ *Somatochlora viridiaenea* (Uhler)

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は58%、
現存数は5.5であり、絶滅危惧
Ⅱ類に相当する。



♂. 豊田市深見町, 1999年11月6日, 鶴殿清文 撮影

【形態】

全身に鈍い金属光沢のある暗
緑色の中型のトンボである。同
属のハネビロエゾトンボとは腹
部第4節以降に黄色斑があるこ
とで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の丘陵地から山地にかけての
13市町村で記録されている。

【国内の分布】

北海道から九州北部にかけて分布し、隠岐
等の離島でも記録されている。

【世界の分布】

ロシアに分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、おもに丘陵地から山地にかけ
ての湿地で見られる。未熟成虫は、発生地か
らかなり離れるようで、林道や空き地、谷筋
の開けた空間等で摂食飛翔するのが見られる。
幼虫は、水中の植物等につかまっているか、
浅く泥の中に潜り込んでいる。典型的な向陽
湿地の住人である。

6月後半頃から羽化し、成熟成虫は8月を
中心に見られる。成虫になるまでに2年程度
を要すると思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

尾張の東部丘陵地から西三河にかけて現存している。西三河では岡崎市の湿地で新たに確認されたが、いずれの産地も個体数は少ない。東三河では1950年代に豊橋市等で記録されているが、その後の追認記録はない。

本種が生息する湿地は、特に山間部では埋め立てられることは少ないが、実際には三河山間部では絶滅状態になってしまった。その要因としては、二次林の減少／消失による湿地の水位低下や、砂防ダムの改修等による水位上昇で上流部の湿地が消失、といったことが推測される。また三河だけに限ったことではないが、1994年の渇水による湿地の干上がりは、多くの産地で幼虫の乾燥死、成虫の産卵場所の消失等を引き起こしたと思われ、湿地という微妙な環境に生息する種の存続の難しさを物語っている。

【保全上の留意点】

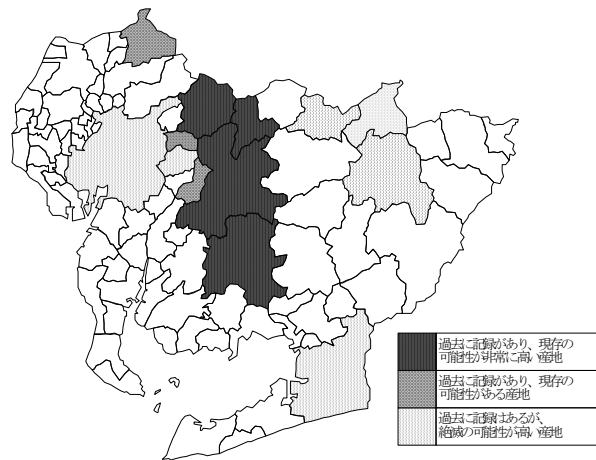
- 1) 幼虫の生息域である湿地及びその集水域を涵養する二次林の保全
- 2) 成虫の休息域である水域周辺の林地の確保

【特記事項】

全国的に見れば、特に東日本には広く分布し、西日本でも山地では比較的多く見られる場所もあるが、愛知県では非常に分布の限られる種である。和名は主たる生息地である北海道に由来する。

(吉田雅澄)

県内分布図



ハネビロエゾトンボ *Somatochlora clavata* Oguma

【選定理由】

旧市町村単位の絶滅率は50%、
現存数は6であり、絶滅危惧Ⅱ
類に相当する。

【形態】

全身が鈍い金属光沢のある暗
緑色で、邦産のエゾトンボ属中
最大種である。エゾトンボとは
腹部第4節以降に黄色斑がない
ことで区別できる。

和名は後翅の広いエゾトンボ
の一種という意味である。



♂. 長久手町一ノ井, 1991年9月23日, 高崎保郎 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張～三河の主に丘陵地に分布する。また、
渥美半島の一部にも飛び離れて分布し、これ
までに12市町村で記録されている。

【国内の分布】

北海道中部から九州南部にかけて分布し、
佐渡島、対馬等の離島でも記録されている。

【世界の分布】

韓国に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

成熟成虫は、おもに丘陵地の細流を伴う湿
地や、落ち葉等が堆積した水流の緩い小河川
等に見られ、林内の細流上で縄張り飛行する
ことが多い。未熟成虫は、発生地付近の開け
た空間や路上をゆっくりと飛行する。幼虫は、
落ち葉や石などのすき間に潜り込んでいる
ことが多いが、流れの速い部位や深過ぎる部位
では見られない。

成虫は6～7月頃に羽化し、成熟成虫は8～9月を中心に見られる。成虫になるまでに2年程度かかると思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

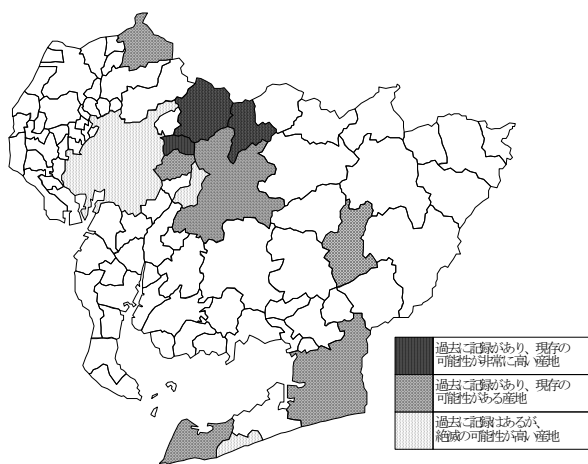
尾張から西三河にかけての東部丘陵には点々と現存する。東三河では近年調査されておらず、生息状況はわからない。いずれの産地も個体密度は非常に低く、先行きが懸念される。長久手市前熊一ノ井周辺は、愛知県最大の産地であったが、この数年の宅地開発などにより消失した。

本種は二次林を流れる小川に生息する例が多く、その水位低下や干上がりは、本種の生存に大きなダメージを与える。すなわち健全な二次林があってこそ、本種は生育できるのである。本種の減少は、二次林の荒廃を現していると推測される。

【保全上の留意点】

- 1) 幼虫の生息域である小川及びその集水域を涵養する二次林の保全
- 2) 成虫の休息域である水域周辺の林地の確保

県内分布図



(吉田雅澄)

イトアメンボ *Hydrometra albolineata* (Scott)

【選定理由】

かつては溜め池や河川に普通に見られたとされるが、1960年代以降急激に激減し、現在では全国的にも極めて稀な種となってしまった。人里近くに生息するため、人間活動の影響を受けやすい。

【形態】

イトアメンボ科の中では大型種で、体長は11～14mm。一般に♀の方が♂よりも大型である。体色は黒褐色で、♂の腹部第7節腹面には長毛を密生する。ヒメイトアメンボ *H. procera* Horváth やオキナワイトアメンボ *H. okinawana* Drake に一見似るが、明らかに大型で、触角第2節と第4節はほぼ等長である。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市、名古屋市、犬山市などの記録があるが、多くは誤同定の可能性が高い。

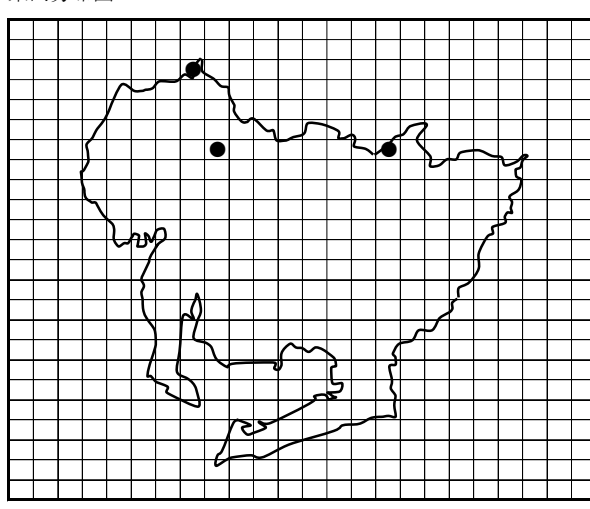
【国内の分布】

本州、隠岐、四国、九州、対馬、トカラ列島（中之島、宝島）、奄美大島。

【世界の分布】

中国、韓国、台湾。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

他県の生息地における観察からは、まばらに草の生える休耕田で、開放的な水面環境を好むようである。溜め池にも生息するが、古くから環境があまり変化せず、良好な水環境が維持されている場所に限られる（林, 2001）。灯火に飛来することがある。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在知られる確実な産地は見いだしていない。農薬による水質悪化や水田、溜め池の埋め立てなどが減少の原因と考えられる。

【保全上の留意点】

休耕田や低湿地の保全であるが、宅地造成や乾田化のため難しい面がある。県内の分布状況もさらに詳しく調べる必要がある。

【特記事項】

ヒメイトアメンボのやや大型の♀個体を本種と誤認している場合が極めて多く、過去の記録に関しては標本の再確認が必要である（矢崎・石田, 2008）。

【引用文献】

- 林 正美, 2001. 最近のイトアメンボ採集記録. *Rostria*, (50): 51-53.
矢崎充彦・石田和男, 2008. 東海地方の水生半翅類. *佳香蝶*, 60 (234): 165-200.

【関連文献】

- 浅岡孝知, 1996. カメムシ目. 稲武町史—自然—資料編: 162-179. 稲武町.
浅岡孝知・家城 司, 1990. 愛知県の異翅目. 愛知県の昆虫, (上): 123-162. 愛知県.
宮本正一, 1960. イトアメンボは普通種でなくなっている. *Pulex*, (25): 99.

(2009年版を一部修正)

ババアメンボ *Gerris babai* Miyamoto

【選定理由】

全国的に産地は少なく、本県では数ヶ所から確認されているにすぎず、生息基盤が脆弱である。抽水植物が繁茂する水質良好な平野部の止水環境に生息するが、そのような環境が激減している。

【形態】

小型のアメンボで、体長は 6～9mm。体色は黒色で、胸部側縁の青みが強く、前脚腿節は大部分黒色を呈する。♂の第 7 節腹面の後縁中央部は台形状に湾入する。通常は長翅型が多いが、短翅型や微翅型も出現する。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市、田原市、東浦町から記録されている。

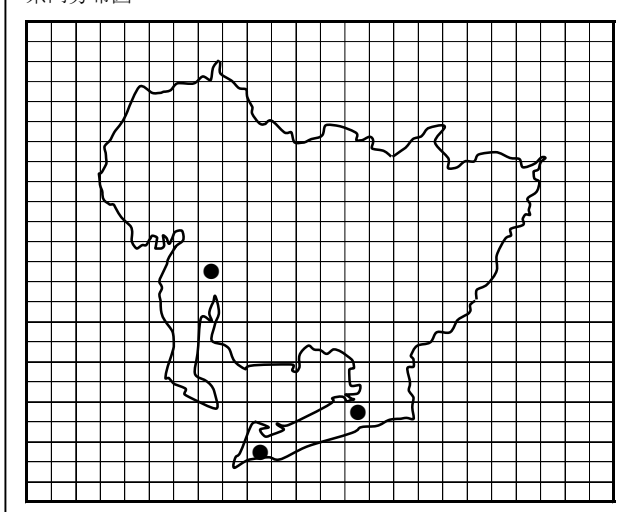
【国内の分布】

北海道、本州、九州。

【世界の分布】

ロシア（極東、東シベリア）、中国、韓国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

生活排水の流入がない水質良好な低地の溜め池で、ガマやヨシなど抽水植物が繁茂する環境に生息する。生息地では開放水面と抽水植物帯の境界付近で確認されることが多い。しばしばエサキアメンボと共に見いだされる。

【現在の生息状況／減少の要因】

渥美半島や知多半島の沿岸部で、ガマなど抽水植物が繁茂する溜め池に生息している（矢崎・石田、2008）。農業による水質悪化や溜め池の埋め立てなどが減少の原因と考えられる。

【保全上の留意点】

農業や生活排水が流入しないよう水質を維持管理し、抽水植物帯の保護に努める必要がある。観賞用にホテイアオイなどの水草を持ち込む場合があるが、繁殖力が強く水面を覆い尽くしてしまい、本種の活動域を消失させることになるため、外来水草の侵入も防ぐ必要がある。

【引用文献】

矢崎充彦・石田和男、2008. 東海地方の水生半翅類. 佳香蝶, 60 (234): 165-200.

【関連文献】

林 正美・宮本正一、2018. 半翅目 Hemiptera. 日本産水生昆虫 科・属・種への検索（第二版）：329-427. 東海大学出版会、神奈川.

（2009年版を一部修正）

オオヒョウタンゴミムシ *Scarites sulcatus sulcatus* Olivier

【選定理由】

海岸や河川の下流域の砂浜を代表する大型の甲虫。分布は局地的で護岸工事や河川改修などの人為的影響を受けやすく、近年では各生息地でも個体数の減少や生息地の消失が懸念されている。

【形態】

体長 28～38mm 以上と大型のゴミムシ。全身黒色で大顎は発達する。

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島、三河湾、知多半島の各地の海岸、河川では矢作川や木曾川の下流域の河川敷、また津島市内の木曾川旧河道にあたる地域で記録がある。

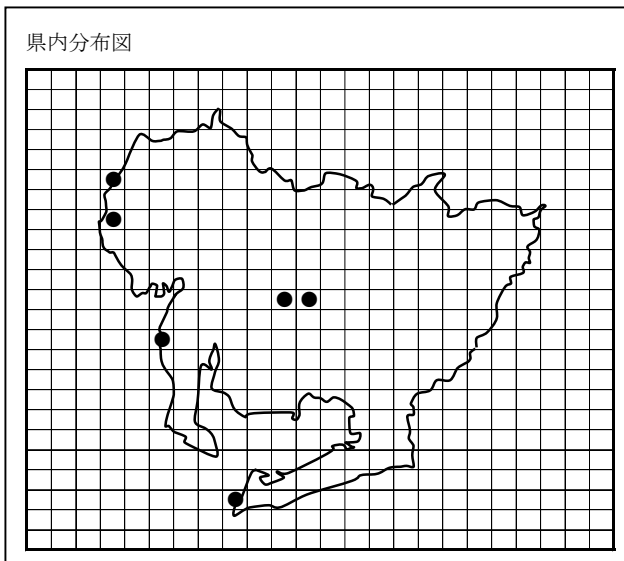
【国内の分布】

本州、九州、四国。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾、東南アジア、インド。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河川や海岸の砂地および周辺の草地に生息する。成虫は砂地に深い坑道を掘り、主に夜間に活動する。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在、本種の生息できる砂浜や河川敷は徐々に狭められてきており、個体数も減少している。現在最も個体数の多い地域は稲沢市（旧祖父江町）の木曾川河川敷、常滑市の海岸の2箇所であるが、前者は公園整備とともに生息地が駐車場や公園施設の拡大によって狭められ、後者は空港の開港や海岸の公園化に伴い、海岸の整備が進み良好な砂地が減少し、生息地が消失の危機にある。

【保全上の留意点】

海浜や河川敷に生息するオサムシ科の甲虫はじめ多くの種は、一部の種を除き環境の悪化に敏感に反応し急速に絶滅する傾向が認められる。これは山地の森林に生息する種が連続する広範な生息地を背景に持っているのに対し、河川や海浜の生息地が線状であり簡単に孤立する危険性を持つことに一因があると思われる。これらの種や生態系の保全には、単にその地域のみを保全すれば良いというものではなく、前述の事柄を十分に理解しそれぞれの生息地を孤立させないような対策を行わなければならない。

【関連文献】

- 大平仁夫, 1975. オオヒョウタンゴミムシ岡崎市に分布する. 三河の昆虫, 10: 39.
大平仁夫, 1985. 岡崎市の甲虫類. 岡崎市史 自然: 1024-1096.
岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ハマベゴミムシ *Pogonus japonicus* Putzeys

【選定理由】

潮間帯に生息する珍しいゴミムシ。県内で生息が確認されたのはごく最近であり、減少傾向などは不明であるが、自然海岸の減少と海水の汚れから生息基盤が脅かされており、絶滅の危険が増大していると考えられる。

【形態】

体長 6.5mm 内外。艶のある黒色で、上翅は赤褐色を帯びる。脚は褐色。頭部、胸部は大きく、複眼の内側には明らかな縦隆があり、前頭溝は平行する。前胸の基縁は前縁より幅広。上翅は両側がほぼ平行で、基縁は縁どられ、条線は明らか。

【分布の概要】

【県内の分布】

弥富市鍋田干拓地、西尾市（戸田,2019）、豊橋市の河口や海岸で確認されている。

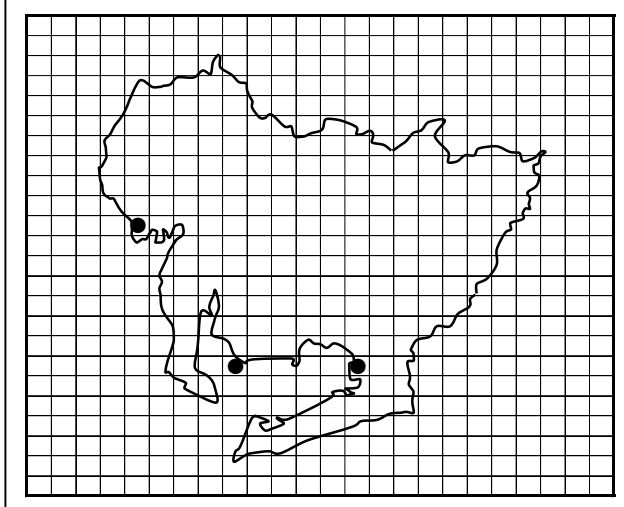
【国内の分布】

本州、四国。

【世界の分布】

日本の特産種。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

県内での生息地は、いずれも砂浜を伴う潮間帯。初夏に潮間帯に打ち上げられた藻類の下などで発見される他、灯火に飛来する。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内での生息が確認されて以降記録はないが、当時から生息環境に大きな変化はない。潮間帯の芦原に生息する種なので、自然海岸の減少ならびに潮間帯の汚染によって簡単に生息環境が損なわれる危険性が高い。

【保全上の留意点】

現在残る自然海岸、ないしは自然環境が良好な海岸、潮間帯の保全が最低限必要であるが、本種の生息地となる河口部の環境維持には、上流部も含めた河川の浄化が必要であり、保全には困難を伴う。

【関連文献】

- 穂積俊文, 1997. 愛知県未記録甲虫数種. 佳香蝶, 49 (192): 71.
岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.
戸田尚希, 2019. 愛知県のハマベゴミムシ. 佳香蝶, 71 (277): 23.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヒトツメアオゴミムシ *Callistoides deliciolus* (Bates)

【選定理由】

全国的にも個体数の少ない種であり、1970年代までは尾張地方の丘陵地で採集されていたが、1980年代に入ってからほとんど見られなくなった。

【形態】

体長10～12mmの中型のゴミムシ。頭部は黒色で緑色の金属光沢を帯び、前胸は橙黄色、上翅周縁部は橙黄色に縁取られ、会合部後半に同色の斑紋を持つ美しいゴミムシである。

【分布の概要】

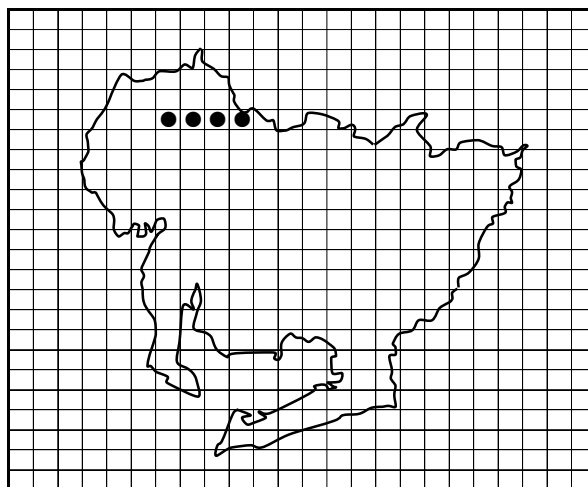
【県内の分布】

瀬戸市定光寺(岩崎・蟹江, 1990)、春日井市各地(岩崎・蟹江, 1990)、小牧市小牧山(岩崎・蟹江, 1990)などに記録があり、尾張丘陵地帯には局地的ながらも広く分布していたものと思われる。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

本種は丘陵地～低山帯の森林内の開けた林床、裸地に生息する。夜間活発に活動し、小動物などを捕食する。生息地は水辺から離れた林床であるが、十分な湿度を保っている環境を好む。

【現在の生息状況／減少の要因】

定光寺以外の記録はいずれも1950年代以前のもので個体数も多くはない。定光寺の生息地も1970年代後半に周囲の森林が伐採され、生息地の乾燥化にともない姿を消し、1980年代以降の記録はない。

【保全上の留意点】

本種だけでなく地表性のゴミムシ類の減少は近年著しく、生息地の破壊のみならず、餌となる微小動物などを含む生息地全体の生態系の保全に留意が必要と思われる。

【引用文献】

佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.
岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

クビナガキベリアオゴミムシ *Chlaenius prostenus* Bates

【選定理由】

低地の湿地に生息する全国的にも稀少なゴミムシである。本種は特に溜池などの止水環境に限定して分布する傾向が強い。近年では溜池をはじめ低地の止水環境は悪化の一途をたどっており、本種の生息状況は年々危機を増している。

【形態】

中型のゴミムシで一見同じような環境に生息するヒメキベリアオゴミムシに似るが、本種は前胸の中が広く腹板が褐色であることなどから区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張旭市の2箇所の溜池(岩崎・蟹江, 1990)から記録されている。

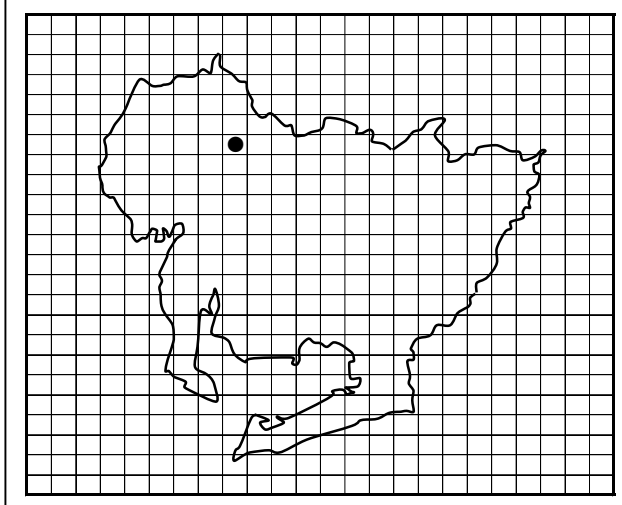
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

低地の湿地、特にため池等の水辺および周辺の湿潤な草むらに生息する。近縁のヒメキベリアオゴミムシが水辺一般の広範な環境に生息しているのに対し、本種は止水域の周辺に限られる。

【現在の生息状況／減少の要因】

灌漑用の水路の発達とともに溜池の利用価値が低下し、埋め立てによる生息地の消滅や雑排水の流入による水質の悪化、また公園化による水辺環境の人工的な改変など生息環境は悪化している。本種は尾張旭市内の濁池、大道平池の2箇所から記録されているが、いずれの地でも近年の調査では生息が確認できていない。

【保全上の留意点】

自然度の高い溜池の保全が急務。雑排水の流入をできる限り制限し、あわせて周辺の草地や樹林の保全が必要である。

【引用文献】

岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ジャアナヒラタゴミムシ *Jujiroa ana* (S.Uéno)

【選定理由】

豊橋市の蛇穴を基準産地として記載された種で、東海地方の固有種であるが、近年生息の確認例が減少していることからランクを引き上げた。

【形態】

体長 12.5mm 内外。体色はアメ色で、複眼は退化傾向にあり、小さい。体型はやや細型で両側はほぼ平行。各脚はやや短くがっしりしている。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市（蛇穴）。

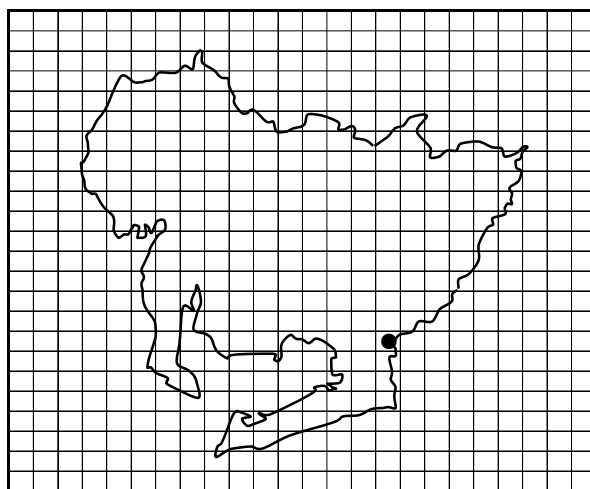
【国内の分布】

東三河ならびに静岡県西部。

【世界の分布】

日本の特産種である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

洞窟あるいは、地中性。洞窟内部の石下などから発見される他、洞窟周辺の林床に設置されたベイトトラップで採集される。主要な生息地は地下浅層であると推定される。

【現在の生息状況／減少の要因】

基準産地の蛇穴ではこの 10 年ほど生息確認が途絶えている。隣接する新穴にも生息していると思われるが、現在入り口が閉鎖されており、また調査には高度なケービング技術を要するため最近の生息状況は未調査である。減少の要因としては、洞窟内部および周辺の森林の乾燥化による影響が考えられる他、マニアによる過剰採集やトラップの放置なども脅威となっている。

【保全上の留意点】

蛇穴の環境をこれ以上悪化させないこと、周辺の森林の乾燥化を防ぐことが必要である。蛇穴は縄文前期の遺跡があることから国指定の天然記念物に指定されているが、入洞に規制はない。今後各方面の関係者、専門家を交えて、洞窟動物の保全対策について検討する必要がある。

【特記事項】

東海地方の特産種であり、県内の絶滅は種の絶滅に直結する。東三河ならびに静岡県西部にかけて近縁の別種が記載されているが、本種と詳細な関連について十分な研究がされていない。

【関連文献】

S. Uéno, 1955. New cave-dwelling Anchomenids of Japan. Opusc. Ent., 20: 56-64., pl.1.
岩崎 博・蟹江 昇, 1990. 愛知県のオサムシ類. 愛知県の昆虫, (上): 309-338. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

クロゲンゴロウ *Cybister brevis* Aubé

【選定理由】

かつて平野部から山地にかけて普通に見られた種であるが、生息地となる各種水域が開発等によって急速に失われ、県内ではごく限られた地域に残存しているに過ぎない。

【形態】

体長 20～25mm。体は卵形。背面は緑色あるいは褐色を帯びた黒色で光沢がある。体下面は暗赤褐色で、腹部第 3～4 節の両端に黄褐小紋を具える。上翅には 3 点刻列があり、翅端近くに小さな黄褐紋がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

かつては平野部の水域に多く見られたが、現在では丘陵に残された僅かな池にのみ生息。

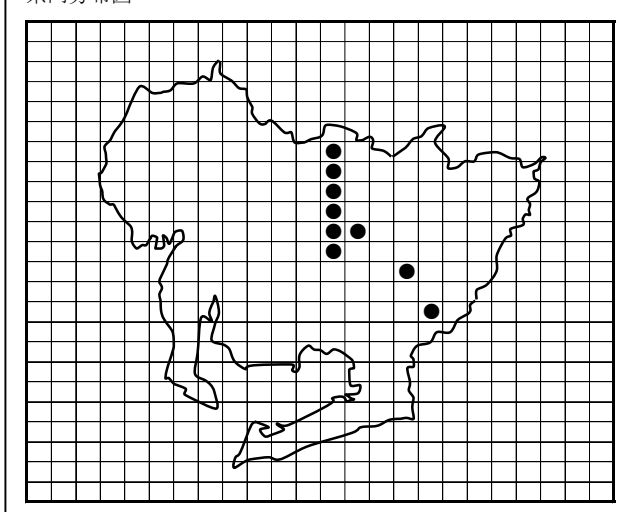
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

中国、朝鮮半島。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

水生植物の生えた池沼、水田などかなり広い水域に適応している。幼虫は 5～8 月に見られ、成虫は 8～9 月に出現し、成虫で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

平野部での自然池の亡失、圃場整備など水田の構造変化によって非常に少なくなった。

【保全上の留意点】

残っている自然池の保全や河川敷内の遊水池の設置など、多様性に富んだ止水環境を作ることが望まれる。また、オオクチバスなど侵略的外来種は本種など止水性の昆虫類にとって大きな脅威となるので、駆除を急ぐ必要がある。また、ネオニコチノイド系農薬の影響について調査する必要がある。

【関連文献】

北山 昭ほか, 1993. 日本のゲンゴロウ: 153. 文一総合出版.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ガムシ (オオガムシ) *Hydrophilus acuminatus* Motschulsky

【選定理由】

かつて平野部から山地にかけて普通に見られた種で、ゲンゴロウ等他の大型の水生昆虫がみられなくなった 1980 年代以降も比較的生息が確認できた種であったが、近年姿を確認するのが難しくなっており、生息数が減少している可能性が高い。

【形態】

体長 33~40mm。日本に産する本科の中では最大の種。光沢を帯びた黒色で、上翅にはやや不規則な点刻列がある。後胸突起は腹部第 2 節に達し、腹部は無毛。

【分布の概要】

【県内の分布】

設楽町、豊根村、新城市、岡崎市、安城市、犬山市、春日井市、尾張旭市、弥富市 (旧弥富町) (佐藤, 1990) 県内各地から記録があり、おそらく全県的に分布していたと推測される。

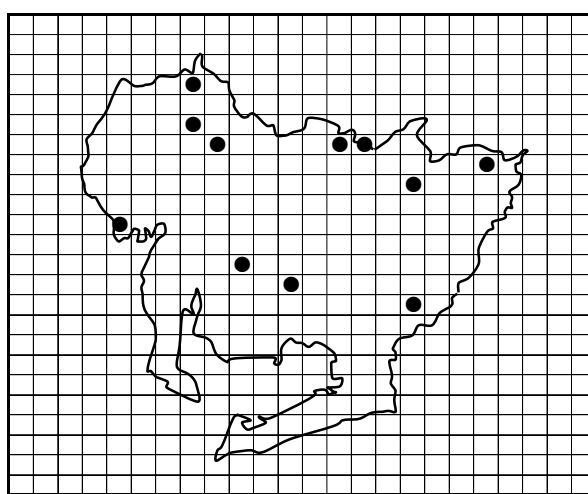
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

平野部から山地の水田、湿地、池・沼などの止水域。水深が浅く水草に覆われた場所を好む。

【現在の生息状況／減少の要因】

豊田市山間部からは比較的近年の生息情報があるが、詳細については詳しく調査する必要がある。圃場整備や水質の悪化等の影響により他の水生昆虫同様に以前より減少はしていたが、発見が困難になったのが 1990 年あるいは 2000 年代以降であることから、オオクチバス等の外来魚やネオニコチノイド系農薬の影響が疑われる。

【保全上の留意点】

現在の生息状況を詳しく調査し、現存生息地を保全する必要がある。オオクチバス、ブルーギル、コイなどの外来魚の駆除を積極的に行うとともに、減少の関連が疑われるネオニコチノイド系農薬の影響を調査し、その結果により必要な対処をする必要がある。

【引用文献】

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫, (上): 204-231. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

ヤマトモンシデムシ *Nicrophorus japonicus* Harold

【選定理由】

平野部に生息する代表的な大型シデムシとして知られていた種であるが、近年生息に関する情報が著しく減少している。

【形態】

体長 14～20mm。黒色で、各上翅に 2 本の鮮やかな赤色の帯状紋がある。帯状紋は会合腺に達することはなく、中に黒点を含まない。後脛節は強く湾曲する。

【分布の概要】

【県内の分布】

安城市、西尾市、名古屋市、小牧市、春日井市、犬山市、津島市、愛西市、あま市などの平野部から記録されている。

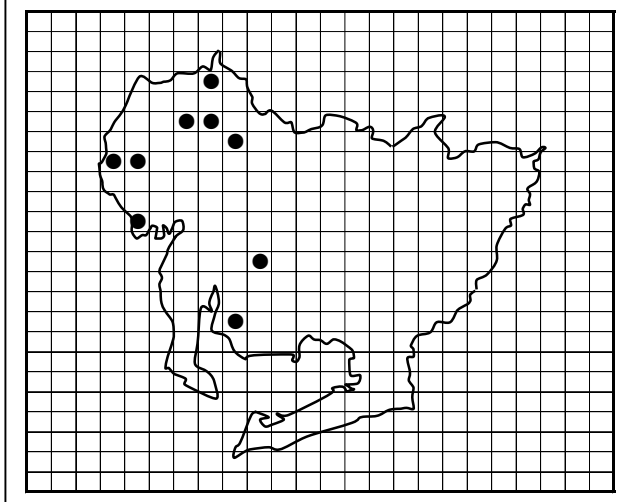
【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、モンゴル、台湾。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

主に平野部を中心に分布し、小動物の死体に集まる。親虫は幼虫の生育が完了するまで付き添い保育を行うなど、高度な亜社会性生活を営む。河川敷など、動物の死体が流れ着きやすいところに生息しているものと考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

あま市（旧美和町）、鍋田干拓地では 1990 年以降の生息確認があるが、その後の記録がないため現在の生息状況は不明である。かつての採集記録がある名古屋市、小牧市など尾張地方都市部でも近年の記録報告は聞かない。

減少の要因としては、都市化の進行とともに平野部に本種の生息に適した環境が減少したこと、ならびに餌となる小動物が減少したことがあげられる。また、衛生環境が整い、小動物の死体等が放置されなくなったことも要因となっているかもしれない。

【保全上の留意点】

減少の背景には、野生小動物の減少や衛生環境の改善による影響が少なからずあるため、本種の保全は単純ではない。県内での詳細な分布状況と生息環境の把握を行う必要がある。鍋田干拓周辺など、現在残されている生息地周辺では、生息環境の維持、保全が必要であると思われる。

【関連文献】

佐藤正孝, 1990. 愛知県の甲虫類 (I). 愛知県の昆虫, (上): 204-231. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

オオツノハネカクシ *Bledius salsus* Miyatake

【選定理由】

かつては塩田にみられた種であったが、近年の製塩法の変化に伴う塩田の減少により、本種の生息環境も減少した。

【形態】

体長 6～7mm。体は黒褐色で、前胸背、上翅側端部、尾端節、肢は褐色。♂の前頭部に 1 対、前胸背板の前縁中央に 1 本の角を具え、♀は頭部前方に 1 対の突起を具える。

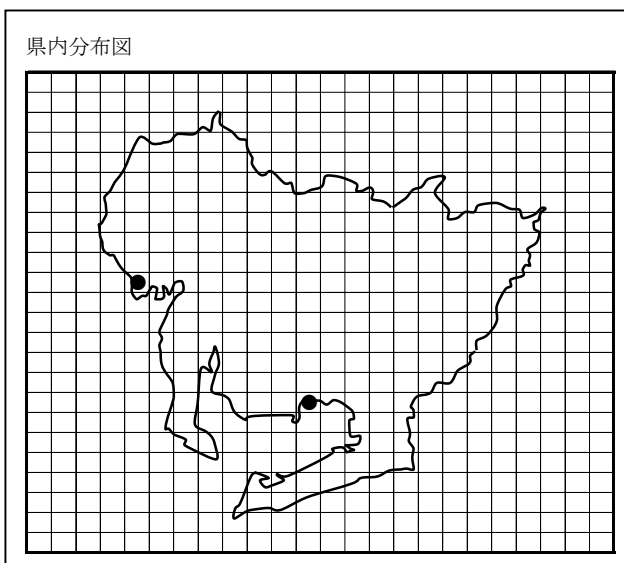
【分布の概要】

【県内の分布】

弥富市（旧弥富町）鍋田（穂積, 1990）、蒲郡市塩津。

【国内の分布】

瀬戸内海沿岸地帯、東京都多摩丘陵、東京都大田区。



【生息地の環境／生態的特性】

昭和 35 年頃から、瀬戸内の流下式塩田では、流下盤として使われた海底の粘土に孔をあけ破壊してしまう昆虫が現れた。研究の後、新種として 1963 年に宮武が上記種に命名記載をし、その後生態と防御が研究された。食性については粘土、珪藻と 2 説がある。

【現在の生息状況／減少の要因】

製塩法も画期的に変わり塩田も見られなくなった。現在では干拓事業の行われている地区にわずかに生息しているに過ぎない。

【保全上の留意点】

鍋田干拓周辺など、現在残されている生息地周辺では、生息環境の維持、保全が必要であると思われる。

【引用文献】

穂積俊文, 1990. オオツノハネカクシの新産地. 月刊むし, (235). 28.

【関連文献】

渡辺泰明, 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ), 514pp. 保育社. 大阪.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

オオチャイロハナムグリ *Osmoderma opicum* Lewis

【選定理由】

全国的にも個体数の少ない大型のコガネムシで、生息には、内部にウロをもつミズナラなどの大木が存在する自然度の高い森林が欠かせない。県内では、そのような自然林は限られてきており、さらにその環境の悪化による個体数の減少が懸念されている。

【形態】

体長 26.3～36.1mm。にぶい光沢のある黒褐色で、青銅ないし紫銅色の光沢を帯びることもある。前胸背には中央に一对の縦隆条があり、オスでは明瞭に発達する。上翅背面は平坦。独特の強いジャコウ臭がある。

【分布の概要】

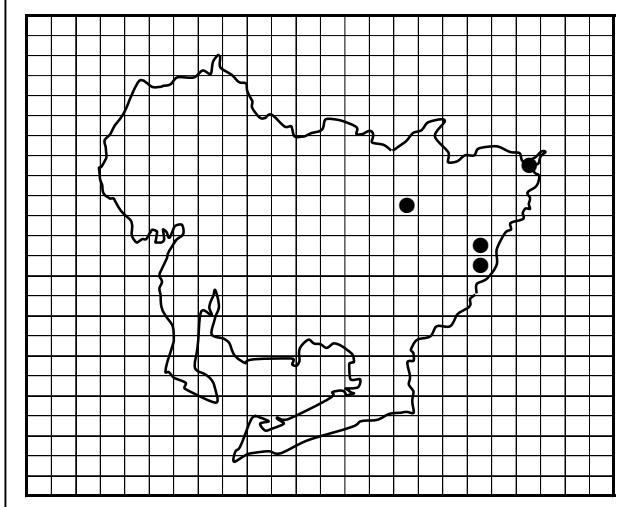
【県内の分布】

豊根村、設楽町、新城市から記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州、屋久島。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

ブナ林を中心とした自然度の高い森林に生息する。幼虫は、ミズナラ、カエデ類、スギ等の大木にできた樹洞内に貯まったフレーク状の腐植土中に生息する。成虫は7月～8月に出現する。日中樹冠部を飛ぶが、樹洞内に潜んでいることの方が多い。また、樹洞入り口で放屁姿勢をとっている行動が観察される。恐らく独特のジャコウ臭を放っているものと思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内でこれまでに確認された個体はのべ10個体にも満たず、個体密度はかなり低いものと推測される。本種の発生木となる必要条件を満たす樹木は、森林中に数が限られており、また更新には長い年月が必要となると考えられる。さらにそのような発生木となる条件が揃う確立も低いものと考えられる。そのため本種は、同一の発生木を長い年月にわたって利用することが考えられ、一本の発生木の消失は、本種の生息に大きなダメージを与える可能性がある。

【保全上の留意点】

現在の生息地である森林の保全、並びに発生木となる可能性のある大径木の保護が望まれる。

【関連文献】

- 松野更一・伴憲隆・穂積敏文, 1990. 愛知県のコガネムシ科. 愛知県の昆虫, (上): 339-361. 愛知県.
酒井 香・藤岡昌介, 2007. 日本産コガネムシ上科図説 第2巻 食葉群 1: 145. 昆虫文献六本脚.
藤岡昌介, 2001. 日本産コガネムシ上科総目録: 126. コガネムシ研究会.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

クロマダラタマムシ *Nipponobuprestis querceti* (Saunders)

【選定理由】

エノキなどの大木に見られるが、個体数が少ない。生息地は平野部に偏る傾向があるが、平野部に残存するこれらの大木はもともと少なく、かつ都市化による乾燥化などにより生息環境があきらかに悪化、縮小してきている。

【形態】

体長 17~28mm。黒色で、赤銅あるいは青緑色の金属色を帯び、上翅には多数の黄白色の小円紋がある。近似種にアオマダラタマムシがあるが、この種とは、体色の他、上翅の縦隆脈が太く弱いこと、上翅に各 2 個の円形の陥凹紋を欠くことなどで区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

平野部を中心に分布し、稲沢市（穂積、1965）、名古屋市（長谷川、2002・2017）、岡崎市（大平、1985）、豊橋市（佐藤ほか、1990）などから記録がある。

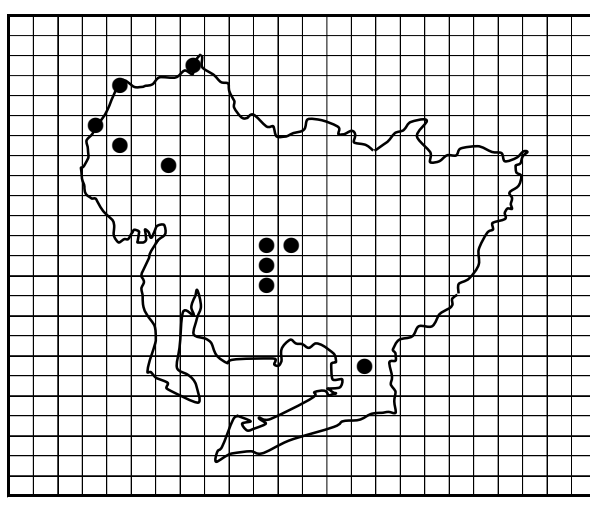
【国内の分布】

本州（関東以西）、四国、九州。

【世界の分布】

中国中部。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

県内では平野部および丘陵地で、寄主植物となるエノキ等の大木が存在する林に生息する。成虫は、5~7月 月に出現し大木の枯死部や樹冠部に見られ、幼虫は県内の観察例ではウロを伴う大木の枯死部に見つかる例が多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋城産の古い標本が残されていることから、かつては、名古屋市内にも生息していた。三河地方では大木を伴う寺社、公園等の緑地に生息地が残されている。もともと個体数の多い種ではない。減少の原因としては、発生木となるエノキ大木の減少が挙げられる。分布の中心が平野部であるため、都市化の影響を強く受けたものと推測される。

【保全上の留意点】

生息地での発生木ならびに周辺環境の保全。特に本種の生息地となっている公園などでは、整備や管理事業が本種の生息環境の悪化に繋がらないよう十分考慮すべきである。

【引用文献】

- 穂積俊文, 1965. 船越俊平氏の標本箱より. ナビニュース, 55: 530.
大平仁夫, 1985. 岡崎市の昆虫類. 岡崎市史, 自然: 1024-1096.
佐藤正孝ほか, 1990. 愛知県の甲虫. 愛知県の昆虫, (上): 200-477. 愛知県.
長谷川道明, 2002. 豊橋市自然史博物館所蔵森部一雄コレクションに含まれる重要な愛知県産甲虫類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (12): 49-53.
長谷川道明, 2017. 豊橋市自然史博物館に新たに収集された東海地方産絶滅危惧甲虫の標本について. 豊橋市自然史博物館研究報告, (27): 31-35.

【関連文献】

- 蟹江 昇・戸田尚希, 2008. 愛知県のタマムシ. 佳香蝶, 60 (234): 207-230.
河路掛吾, 2011. 愛知県におけるクロマダラタマムシの記録. 佳香蝶, 63 (246): 40.
穂積敏文, 1990. 愛知県の甲虫 (Ⅱ). 愛知県の昆虫, (上): 232-308. 愛知県.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

クロサワドロムシ *Neorihelmis kurosawai* Nomura

【選定理由】

河川の中流、上流域に生息する種であるが、県内ではもともと生息地が少なかった上、小河川の水質汚濁が進んだことによって、非常に個体数が少なくなってしまったものと推測される。

【形態】

体長 3.8～4.1mm。体は長卵形で黒褐色。前胸背板はよく膨隆するが、凹みを欠く。上翅には 10 点刻条があり、間室は平たい。前胸腹板の隆条は前縁に達する。

【分布の概要】

【県内の分布】

矢作川水系の上流域、瀬戸市赤津川で確認されている。

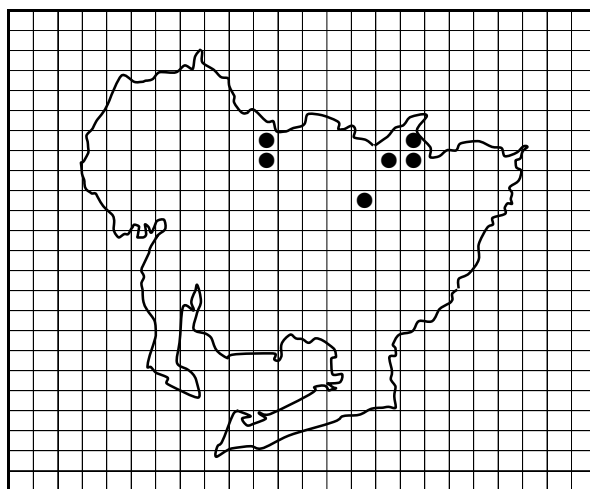
【国内の分布】

本州、九州。

【世界の分布】

日本の特産種。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河川上流域の浅瀬または植物がからまった岸辺の水中に生息しているが、生態については何も判っていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内には、本種の生息に適した環境が限られている。減少の要因としては、ダムや砂防堤の設置による生息環境の消失、周辺地域、支流からの汚水流入などが推測される。

【保全上の留意点】

河川の浄化と周辺地域からの土砂の流入防止が必要である。

【関連文献】

- 佐藤正孝・成瀬義一郎, 1963. 矢作川流域の水生甲虫類. 矢作川の自然: 163-172. 名古屋女子大学.
吉良博之ほか, 1999. 矢作川水系のヒメドロムシ. 矢作川研究, (3): 95-116.
市川靖浩, 2012. 矢作川水系におけるクロサワドロムシの記録. 三河の昆虫, 59: 768.

(長谷川道明・蟹江 昇・戸田尚希)

シタラミヤマヒサゴメツキ *Homotechnes motsulskyi suzukii* Ôhira

【選定理由】

本州と四国の高山帯に分布し、後翅が短小化して飛翔ができないため、産地ごとに生殖隔離で生じたと思われる固有の形態上の変異が見られ、現在 50 余の亜種に分類されている。高山帯が存在しない愛知県内からは未知であったが、2005 年 6 月に設楽町岩小谷山（標高 799m）の谷で見出された雌個体に基づいて、上記の亜種名を付して新亜種として記載された（Ôhira, 2006）。愛知県固有の亜種である。



♀
設楽町岩小谷山, 2005 年 6 月 4 日, 鈴木栄二 採集

【形態】

体長は 9~10mm 内外。体は黒色~黒褐色で光沢を有し、上翅の側縁部と体下面などは暗褐色、触角は暗褐色（基部 3 節は黄褐色）で肢は黄褐色である。原記載は雌個体でなされたが、その後雄個体も見出された（大平・鈴木, 2007）。図は体長 9mm の雌個体。

【分布の概要】

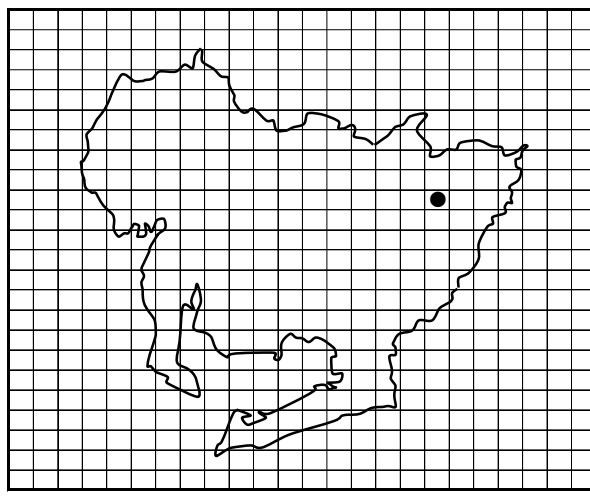
【県内の分布】

現在は岩小谷山が唯一の産地である。周辺には類似した山が存在しているため、今後はその周辺の分布の可能性についても調査することが必要である。

【国内の分布】

本州と四国の高山帯に分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

成虫も幼虫も谷沿いの岩石の隙間や堆積物の下側などに生息しており、幼虫は活発に活動して捕食性を有する。

【現在の生息状況／減少の要因】

本亜種がこの山に隔離されて分布するに至った経緯は、過去のこの地域の地質地形の変異の歴史にあると思われるので、その解明が必要である。

【保全上の留意点】

本種はこの山に隔離されて分布しており、個体数や生息範囲も限定されているので、現在の生息環境を保全し、採集圧なども加えないことが必要である。

【引用文献】

Ôhira, H., 2006. New or Little-known Elateridae (Coleoptera) from Japan, XLVIII. Elytra, Tokyo, 34 (1): 153-155.
大平仁夫・鈴木栄二, 2007. 愛知県岩小谷山産のシタラミヤマヒサゴメツキについて. 鳳来寺山自然科学博物館館報, (36): 1-4.

(2009 年版を一部修正)

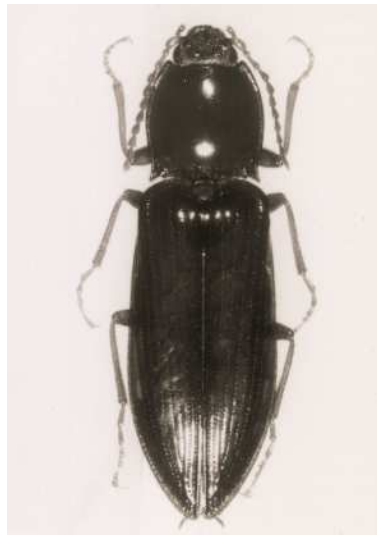
ツヤヒラタコメツキ *Aganohypoganus mirabilis* (Miwa)

【選定理由】

本種の基準産地は岐阜県（岐阜市金華山）である。その後、愛知県から和歌山県に至る雑木林帯に点々と記録されてきたが、どこも偶然に見出されていてまれである。また、本種は日本固有種で1属1種からなっており、学術的にもきわめて重要な存在である。

【形態】

雄の体長は11～13mm内外で、雌は一般に大形で体長16mmに達するのがいる。体は黒色（まれに暗褐色）、表面は無毛状で光沢を有し、頭部と小盾板には灰黄色毛を生じる。触角は短く、前胸背板の側縁は明瞭な縁取りを有し、上翅の側縁は偏平状に外方に進展する。



♂
瀬戸市定光寺, 1984年5月10日, 蟹江 昇 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県内では岡崎市、豊田市、豊明市、瀬戸市から記録があるのみで、いずれも個体数が少なく、現在では生息地が土地整備などで失われているところもある。

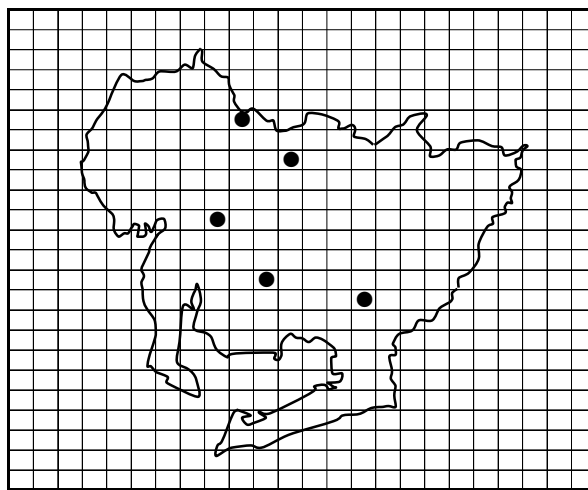
【国内の分布】

原記載以降に、静岡県、愛知県、岐阜県、三重県、和歌山県から記録されている

【生息地の環境／生態的特性】

成虫は3月下旬から5月上旬に見出されている。発生地は山林から都市周辺の雑木林まで一定していないが、岡崎市では市街地近くの雑木林で発生していた。

県内分布図



【現在の生息状況／減少の要因】

本種は主として人里の周辺の雑木林で見出されているが、そこは土地整備などの影響を受け易く、絶滅の危険が大きい。

【保全上の留意点】

本種は雑木林性の種のようなものであるが、個体数が少なく、幼虫の生息場所など生態も不明なため、真の生息環境の把握ができていない。現在ではギフチョウが発生するような里山の雑木林をできるだけ広く保全していくことが必要と思われる。

【引用文献】

大平仁夫・平松広吉, 1998. 和歌山県産コメツキムシ類の記録(8). 南紀生物, 40 (2): 162-164.
大平仁夫, 1995. 三河地方から採集されるコメツキムシについて(13). 佳香蝶, 47 (184): 57-59.

(2009年版を一部修正)

カツラネクイハムシ *Donacia katsurai* Kimoto

【選定理由】

本県が分布の東限となっており、学術的にも重要な種である。本種は、都市化による環境悪化が著しい丘陵地の湿地・湿原を生息場所とし、現在確認されているのは3ヶ所しかない。

【形態】

体長 5～8mm。通常金銅色であるが希に青色、赤色のものが出現する。各脚は短く、体形はやや筒状。腹部第一節は、以降の節の和より長い。前胸背はほとんど皺がなく、粗い点刻におおわれる。ツヤネクイハムシに似るが、本種は肢全体が金属色をしており判別できる。

【分布の概要】

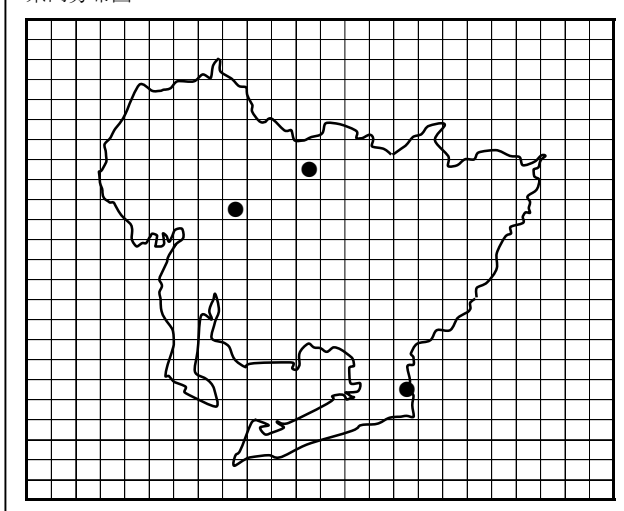
【県内の分布】

豊橋市葦毛湿原（野尻湖昆虫グループ、1985）、豊田市昭和の森（長谷川・吉富、1998）、名古屋市天白区平針（長谷川・吉富、1998）。

【国内の分布】

本州。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

丘陵地～山地の明るい湿原に生息する。成虫は5～6月に出現し、ヤチカワズスゲ、タチスゲやキヌガサスゲなどの葉、あるいは花を食べる。幼虫は土中でこれらのスゲ類の根を食べることが知られているが、詳しいことは分かっていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地のうち、豊橋市葦毛湿原、豊田市昭和の森は、湿原全体の保護施策がとられているが、ここ数年葦毛湿原では未確認である。本種は丘陵地の明るい湿地に生息するが、限られた場所で僅かに残存しているにすぎない。生息場所の湿原・湿地の乾燥化による面積の減少や環境の悪化は、生存を脅かす恐れがある。

【保全上の留意点】

本種が生息する湿地・湿原は、ヒメタイコウチ、ヒメヒカゲ、ニホンアカジマウンカ、ハッチョウトンボなど、当地方を代表する希少昆虫を伴うことが多い特殊な環境である。周辺部を含めた現状の環境保全に留意すべきである。

【特記事項】

豊橋市は現在知られる本種の東限産地である。

【引用文献】

長谷川道明・吉富博之、1998. 愛知県のネクイハムシ類. 豊橋市自然史博物館研究報告, (8): 41-48.
野尻湖昆虫グループ、1985. 日本のネクイハムシ. 野尻湖昆虫グループ.

【関連文献】

林 成多、2004. 総説・日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, (7): 29-126.

(2009年版を一部修正)

コブニンギョウトビケラ *Larcasia akagiae* Nishimoto et Tanida

【選定理由】

全国的に採集例が少ない。愛知県内では豊川水系上流の寒狭川およびその支流にしか生息せず、希少であると考えられる。

【形態】

雄成虫の前翅長は 5.8～26.2mm、雌は 6.5～6.9mm。前翅は淡黒色で斑紋はない。終齢幼虫の体長は 6.2～6.9mm、頭部の大部分は濃茶色、頭頂前部は陥没し、中央部には短毛に覆われた一対の瘤状隆起がある。前胸の前縁部は黄色で、前縁近くに濃茶色の横側帯を持つ。中胸は二対のキチン板からなる。腹部 3～7 節の背面と復面に単一気管鰓を持つ。巢の長さは 7.6～8.2mm で、やや粗雑な石粒からなる。末端復面に一片のやや大きい石粒を付ける。



新城市寒狭川, 2000年3月, 西本浩之 採集

【分布の概要】

【県内の分布】

新城市（旧鳳来町）の寒狭川およびその支流でしか確認されていない。

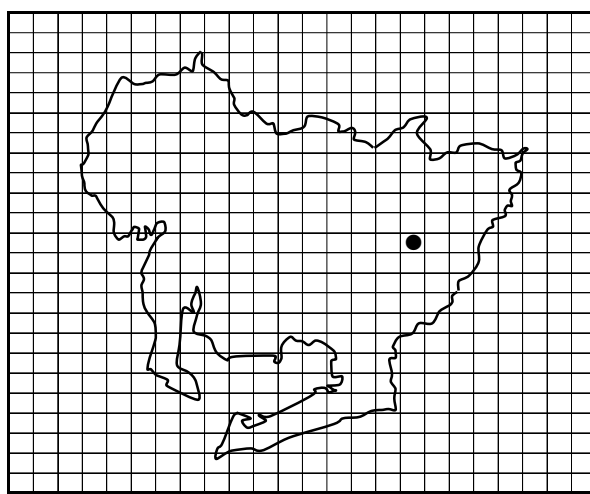
【国内の分布】

愛知、奈良、愛媛の各県で生息が確認されている。

【世界の分布】

日本にのみ分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

山地の溪流や川幅 20～30m の河川にも生息する。年 1 化で成虫は早春（3 月～4 月上旬）の短期間に出現する。成虫は飛翔することが苦手で、代わりに翅をばたつかせて水面をスケートするように移動する。若齢幼虫は安定した大岩の底面の窪みに見られることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

豪雨による増水の影響などで 2000 年以降、個体数は減少している。成虫が飛翔できず、今以上の生息地の拡大は見込めないため、現在の生息環境を保全することが重要である。

【保全上の留意点】

若齢幼虫の生活場所から判断して、シルトや細土の流入は本種の生息に大きなダメージを与えると考えられる。上流で大規模な工事が行われる場合は、十分な配慮が必要である。

【特記事項】

Larcasia コブニンギョウトビケラ属はスペイン、カシミール、インド（アッサム）、タイにそれぞれ 1 種ずつ、日本にコブニンギョウトビケラと栃木県日光に生息するコガタコブニンギョウトビケラの計 6 種しか知られておらず、非常に小さな属である。

【関連文献】

Nishimoto H., Tanida K., Gall W. K., Minakami N. T., 2003. Discovery of the genus *Larcasia* (Trichoptera, Goeridae) in Japan, with the descriptions of two new species. *Entomological Science* 2 (3): 425-438.

(西本浩之)

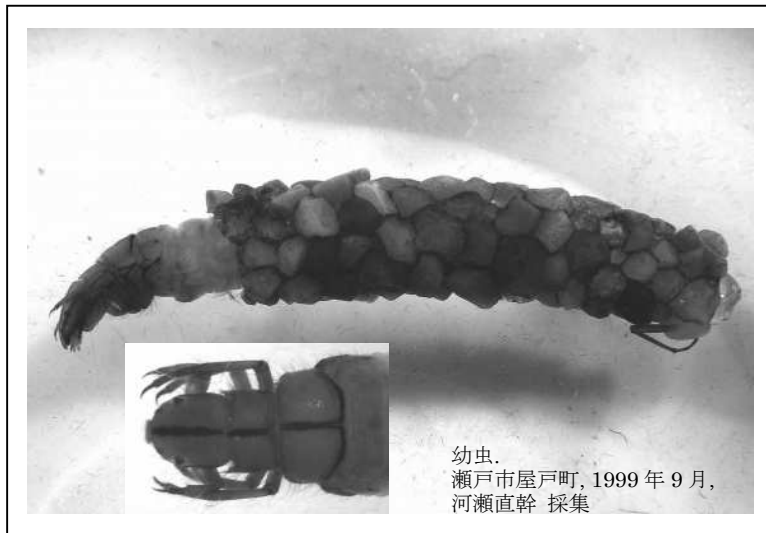
ヒトスジキソトビケラ *Psilotreta japonica* Banks

【選定理由】

生息地として平地～低山地の清冽な細流を好むため、人為的な影響を受けやすい。近年の記録は少なく、希少な種である。

【形態】

成虫の前翅長は 10～11mm。
前翅はやや茶色を帯びた黒色。
終齢幼虫の体長は約 14mm、頭部および前・中胸の地色は黄色で、正中線に入る 1 本の縦條紋が特徴的である。幼虫の巢は荒い砂粒からなり、円筒形で側面から見ると緩やかにカーブする。



【分布の概要】

【県内の分布】

瀬戸市屋戸町、長久手市香流川、豊田市八草町で確認されている。

【国内の分布】

本州中部（愛知、岐阜、三重）および近畿・中国地方（滋賀、京都、奈良、兵庫、島根）で確認されている。

【世界の分布】

日本にのみ分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

湧水が流入し、水温や水位が安定した山裾や扇状地の細流に生息する。同属で普通種のアサギキソトビケラ (*P. kisoensis*) が山地溪流に生息するのに対して、ヒトスジキソトビケラは低地に見られる。生態的知見は乏しいが、成虫は 5～6 月に羽化し、年 1 化あるいは 2 年以上必要と推定されている。

【現在の生息状況／減少の要因】

長久手市香流川は環境の悪化から生息は困難になっていると思われる。低地の河川は開発や護岸の整備などで環境が改変されやすく、生息環境が脅かされている。

【保全上の留意点】

低地～平地の河川は水質汚濁や環境改変を受けやすく、低・平地河川を好む生物は特にその生息が危惧される。本種は湧水が流入する夏でも高水温にならない清冽な細流を好むので、周辺環境を含めた保全が必要である。

【特記事項】

1906 年に岐阜県から記載された種である。京都府の RDB において絶滅危惧種に、滋賀県の RDB において絶滅危機増大種に指定されている。

【関連文献】

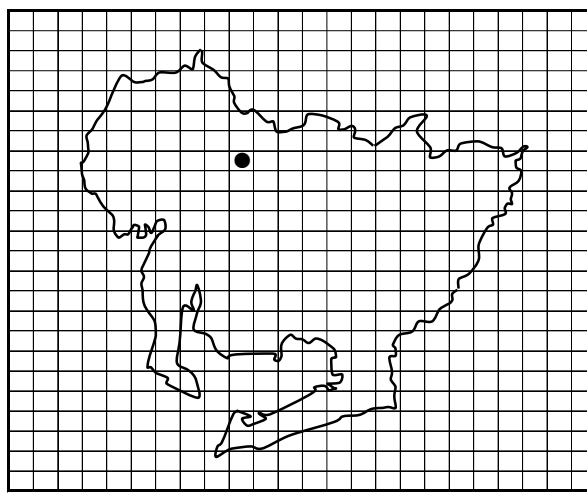
河瀬直幹, 2012. 絶滅が危惧されるヒトスジキソトビケラ *Psilotreta japonica* (Banks) 絶滅に関する形態的・生態的知見. 陸水生物学報, 27: 29-39.

Parker C. R., Wiggins G. B., 1987. Revision of the caddisfly genus *Psilotreta* (Trichoptera: Odontoceridae). Royal Ontario Museum Life Sciences Contributions 144, pp.55.

高崎保郎, 2002. 香流川(愛知県長久手町)の底生昆虫 1979～2001. 佳香蝶, 54 (210): 21-28.

(西本浩之)

県内分布図



ギフチョウ *Luehdorfia japonica* Leech

【選定理由】

本種は適当に人手が加わった里山の環境を生息地としている。すなわち、春には林床に光が差し、夏には日陰を作るような落葉樹が生え、落葉樹林の林縁近くに幼虫の食草が自生し、成虫の吸蜜植物が多いような環境である。これらの自然は近年消滅し、本種も多くの産地を失った。本種は尾張地区からは生息が確認されているが、名古屋市からは1980年頃から記録がない。新城市などの東三河では近年記録がない。また、岡崎市では一部の地域で保全されている。

【形態】

前翅長約32~34mmの小型のアゲハチョウ。細長い尾状突起をもつ。翅表は黒と淡黄色の縞模様。後翅外縁に橙色紋、その内側の黒帯の中に藍色の小斑点、肛角に赤色の斑紋をもつ。♀はやや大型、翅形が丸く、前胸背に褐色の毛をもつことから区別できる。

近似種のヒメギフチョウ(愛知県には産しない)はやや小型、前翅の最外縁の黄色の線の最上端が内側にずれ非連続となる。また、後翅の外縁に沿う橙色紋が地色と同じ淡黄色である。

産地により微妙な翅形、大きさ、斑紋、尾状突起の長さなどに差がみられる。西部愛知県産は、岐阜県美濃地方産と同様やや小型で、黒帯の幅が広く、一見黒っぽい。愛知県東部産は、やや大型で黒帯が細く、明るい。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、小牧市、春日井市、日進市、瀬戸市、長久手市など尾張東部丘陵から、豊田市にかけて産地が比較的多い。この群の東限は豊田市足助付近、南限は同市古瀬間町となる。一方、東部群は岡崎市から蒲郡市、豊橋市、新城市にかけてやや局地的に産する。旧北設楽郡には設楽町(田内、清崎)、東栄町(本郷、奈根)にごく少数の採集記録がある。旧津具村と旧設楽町境の碁盤石山で2♂の採集記録があり、例外的な産地かと思われる。両群の間には矢作川が流れており、分布空白地帯となる(高橋, 1995)。

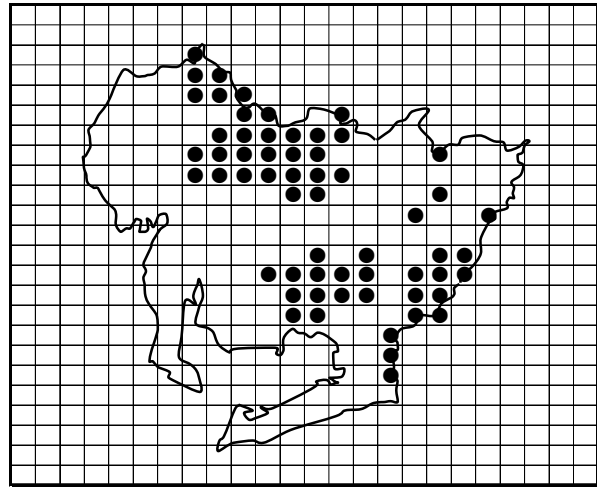
【国内の分布】

本州の特産種で、丘陵地帯から低山にかけて産地が多く、飛騨では山間の湿原が生息地となることもある。北限は秋田県の鳥海山麓、西限は山口県。日本海側では、ほぼ連続して分布し、個体数も少なくない。太平洋側では、東京都を東限とし、神奈川、静岡を経て愛知と分布するが、いくつかの産地群に分断されており、連続して産せず、また近年激減~消滅した産地が多い。

【世界の分布】

日本固有種。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

主な生息地は、丘陵から低山にかけての人里で、春には林床に光が差し、幼虫の食草のカンアオイ類(愛知県ではヒメカンアオイが優位、愛知県西部では一部スズカカンアオイ)や成虫の吸蜜植物であるカタクリやスマレが咲く明るい林の周辺である。針葉樹の植林でも、まだ背丈の伸びず林床が明るい時には、幼虫の食草がよく生育し、ギフチョウの発生地となることがあるが、針葉樹が育ち、林床が暗くなったり、下草の背丈が伸びたり、ササやシダ類が繁茂するとカンアオイは消滅し、ギフチョウも産しなくなる。このように生息地の変化がギフチョウの発生に大きく作用するため、産地の変遷が激しい。

成虫は年1回、多くの産地ではソメイヨシノの開花と一致して羽化し、スマレ、カタクリ、サクラなどを訪花する習性が強い。カンアオイ類も丁度その頃新芽を出し、この葉裏に産卵する。幼虫はその葉が硬くならないうちに食べ、ほぼ1か月で蛹化、そのまま冬を越す。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内からはほぼ絶滅した(高橋, 1975)。豊橋市東部、蒲郡市北部からも絶滅した可能性が高い。一般に都市部周辺では多くの産地が消滅した。上記したように生息環境の変化を大きく受け、ギフチョウの発生量の多寡が左右され、ときに多くの個体を見る年があったり、急に減少したり、年による発生量の変化も小さくない。産地の消滅は、整地、ゴルフ場、工場、住宅地の造成によることが多い。また、人工の手が加わらず、放置された林も産地を消滅させた。

【保全上の留意点】

幼虫の食草、成虫の訪花植物、活動空間など、生息環境を保つことが最も大切である。人の手が入り過ぎることも、自然を放置することも、本種の生存には適さない。

【特記事項】

本種を放蝶して増やそうとする試みがある。これには、その固有遺伝子を攪乱したり、飼育による摂食能力の劣る個体を自然界に帰したりして、本来の自然をむしろ損なうことにもなりかねない。綿密な計画を立て、慎重に行う必要がある。

【引用文献】

- 高橋 昭, 1975. 名古屋市のギフチョウは絶滅してしまったか?. 昆虫と自然, 10 (4): 29-31.
- 高橋 昭, 1995. 愛知県のギフチョウ. -90年間の記録から-. 昆虫と自然, 30 (4): 4-6.

(2009年版を一部修正)

ムモンアカシジミ *Shirozua jonasi* (Janson)

【選定理由】

愛知県では、1998年に東加茂郡旭町（現豊田市）で初めて記録された。その後確認の報告はなかったが、2006年7月に北岡明彦氏により再確認された。発生地が局所的で、個体数は他県に比べ僅少である。また、限定されたアリとの共生やコナラなどの新芽とアブラムシ類やカイガラムシ類を食べて成長するなど、特異な生活史を有しているため環境変化の影響を受けやすい。他県から隔離された発生地であることもあり、2018年以降急速に個体数が減少している。

【形態】

豊田市産は、前翅長22mm前後で他産地よりも平均的にやや大きい。翅表は橙色、裏面は黄橙色で中室端と中央部に淡褐色条がある。♂の前翅頂表に目立つ斑紋はないが、♀には通常外縁に沿って黒斑があり、時に不明瞭となる。当該産地の個体は不明瞭なものが多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧旭町）、豊根村（旧豊根村）での生息を確認した。各産地とも個体数は少ない。

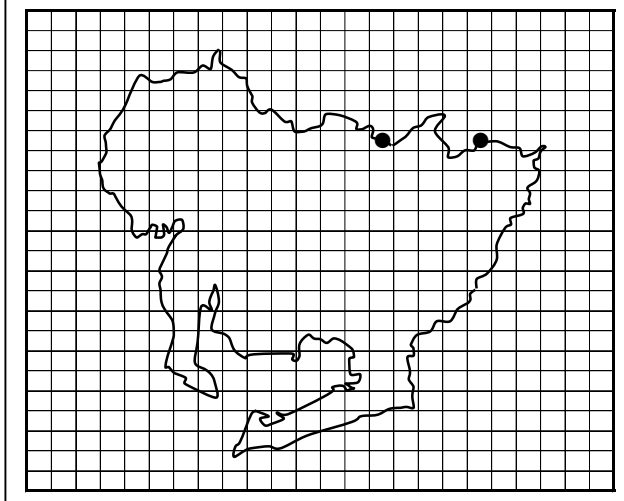
【国内の分布】

北海道、本州に分布する。四国、九州には分布しない。関東北部から中部地方の山地帯にかけて産地が多いが、その発生地はきわめて局地的である。

【世界の分布】

朝鮮半島、ロシア南東部、中国東北部に分布する。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

北海道では平地～山地、本州では低山地～産地の落葉広葉樹林に生息する。愛知県での生息地は中～高標高地の落葉広葉樹林である。本種は共生関係にあるアリ（クサアリ亜属）の営巣が発生の必須条件。その上、コナラなどの植物に寄生するアブラムシ類の発生などにも左右される。また、蛹とアリは乾燥の影響を受け、発生樹周辺が草刈りなどにより露出・乾燥すると生き残るのが厳しくなる。卵で越冬するが、樹幹の亀裂部や褶曲部に1個ずつ産み付けられるため、野外における卵の発見は容易ではない。年1回の発生で、ミドリシジミ類としては遅く7月中旬から8月に出現する。本種と共生するアリ（クサアリモドキ・クロクサアリ・フジボソクサアリなどが知られている）との関係、産卵植物（コナラ・アベマキ・クリあるいはブナ科以外の植物）の究明が待たれる。

【現在の生息状況／減少の要因】

豊田市の生息地は、牧草地に続く落葉樹の二次林である。同地はキャンプ場の敷地整備の一環として定期的な草刈りや樹木の伐採・剪定がなされる。そうした僅かな変化にも敏感に反応し、発生樹を替えたりしている。この変化は同時にアリの営巣があるところに限られ、また継続的に発生できるコナラなどの好条件の樹は限られ、成虫の行き着く先もおおのずから限定的で生息環境は厳しい状態で推移している。生息地域が局所的で分断されていることに加え、数本の食樹に依存し細々と発生を繰り返す場合が多く、発生木の伐採、剪定などが個体群の減少をまねくことがある。

【保全上の留意点】

発生樹周辺での過度な草刈りをしない。最小限の樹木の剪定、伐採に留意するとともに、アリの発生環境にも配慮するなど諸条件の同時並行的保全が求められる。

【関連文献】

陸 雄一ほか, 2000. 愛知県でムモンアカシジミを採集. 佳香蝶, 47 (201): 24.

(2009年版を一部修正)

ウラクロシジミ *Iratsume orsedice* (Butler)

【選定理由】

かつては定光寺から設楽郡まで広く分布しており、マンサクの枝に多数の卵を確認することができ、豊田市内でも生息していた。近年産地や個体数が急激に減少している。愛知県のみドリシジミ類は鈴木・中野（1988）に良くまとめられている。その後のマンサクの減少で各地において減少している。

【形態】

開張 30mm 前後。裏面の色彩斑紋は雌雄で差がない。表面は♂は銀白色、♀は外縁部が広く黒色。色彩斑紋は近似の種はまったくなく、同定は容易である。

【分布の概要】

【県内の分布】

尾張から東三河に広く分布。豊田市（旧稲武町、藤岡町など）、設楽町、瀬戸市（定光寺）、春日井市などに広く分布する。

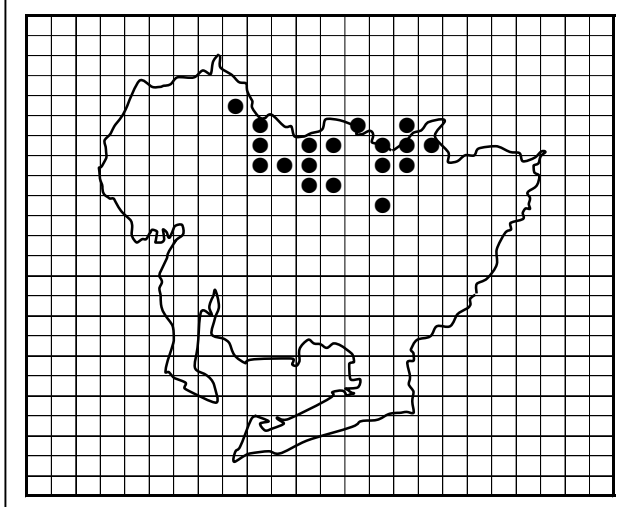
【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州。分布は局所的。

【世界の分布】

日本、台湾、中国西部。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

分布は食草のマンサクの分布とほぼ一致する。愛知県では山地の溪谷に沿った落葉広葉樹林から丘陵地の低山地まで生息している。本種は年 1 回の発生。定光寺などの丘陵では 5 月下旬から発生し、山間部では 7 月中旬に発生する。越冬態は卵。

【現在の生息状況／減少の要因】

日本のほかの産地では局所的であるが、本県では県内に広く分布していてみドリシジミ類の中では普通に見られた。春日井市の築水の森では、越冬卵や成虫が確認できたが、2017 年以降確認できなかった。豊田市旭町一色地区は樹木の繁茂のため昨今、環境の悪化、特に食草のマンサクの減少により、個体数が極端に減少している（高橋・内海，未発表）。

【保全上の留意点】

本種はマンサクに依存しているので、県下のマンサクの保全が不可欠である。

【引用文献】

鈴木哲彦・中野善敏, 1988. ウラクロシジミ. 愛知県のみドリシジミ類. 佳香蝶, 40(150): 5.

【関連文献】

高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 225-226, 251. (財)旭高原自然活用村協会.
白水 隆, 2006. ウラクロシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 106. 学習研究社, 東京.
日本チョウ類保全協会(編), 2019. 日本のチョウ: 131. 誠文堂新光社, 東京.

(2015 年リスト付属資料を一部修正)

フジミドリシジミ *Shibatanoiozephyrus fujiisanus* (Matsumura)

【選定理由】

愛知県では、1971年に豊田市（旧稲武町）で初めて記録された。本種は、ブナ・イヌブナ林に依存して生息する。本県の場合、食樹のブナ・イヌブナが生育しているのは長野県境に接する豊根村（旧豊根村・旧富山村）・設楽町（旧設楽町・旧津具村）・豊田市（旧稲武町）の一部に限られるため、本種の生息地も限られ、その個体数も決して多くはない。かつて多数飛翔していた面ノ木峠や段戸裏谷周辺でもブナの減少、特に産卵に適した低木やひこばえの減少などのため、産卵数や成虫の発生数が顕著に減少している。

【形態】

前翅長は18mm程度。裏面の斑紋は♂♀の大差はない。♂の表翅は金属光沢のある青色、♀は一般的な暗褐色で斑紋がない。裏面の斑紋が特異であることにより容易に近似種とは区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧稲武町、旧足助町）、設楽町（旧設楽町、旧津具村）、豊根村（旧豊根村、旧富山村）などのブナ・イヌブナ林に生息する（高橋昭ほか、1991；大曾根、2005；故田中蕃、私信）。本県では、ブナ・イヌブナ林が少ないため本種の分布も極めて限られている。なお、豊田市（旧旭町）牛地の駒山のブナ生育地を1999年に調査しているが本種を確認できなかった。

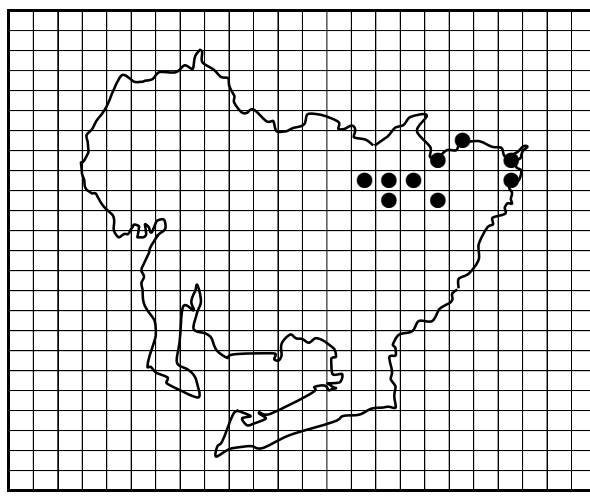
【国内の分布】

北海道（渡島半島や奥尻島など）、本州、四国、九州に分布する。山地に産するが、個体数は少ない。九州では、ブナ・イヌブナの生育する山地帯に産地がある。

【世界の分布】

日本固有種である。なお、台湾北部と中国（陝西省・四川省・貴州省）には、本種の代替関係にあるとされている種が発見されている（小岩屋、2007）。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

年1回、6～7月に発生する。本県では、高標高地のブナ・イヌブナ林で6月中旬頃に発生盛期が認められる。生き残りの♀は8月下旬まで観察される。

♂は午後になると樹上で占有行動をとる。また、早朝にブナ林をうねるように飛翔する♂も見られる。卵で越冬する。成虫の大きさに比べて卵は大きく白いのでよく目立つ。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつて食樹が多数生育していた面ノ木峠・天狗棚・段戸裏谷周辺は遊歩道の整備により、また、旧富山村などは伐採や植樹により本種の生息環境が変化し、産卵数や個体数が減少している（大曾根、2005）。その他の地区でも混交林の繁茂が進み個体数が減少している。

県外近隣の産地として、三重県鈴鹿山脈の御在所岳以北、岐阜県では、旧上石津町・揖斐郡北部・恵那山麓、清内路峠などで記録がある。

【保全上の留意点】

生息地の混交林を含めた定期的な間伐などが必要である。本種に代表されるブナ林の生態系は本県では限られた地域にしか残存していないので、可能な限り生態系をより広く維持・管理することが望まれる。

【特記事項】

早朝や強風のあと、多数の個体が下草に止まっていることがある。

【引用文献】

- 高橋 昭ほか、1991. 愛知県のチョウ類. 愛知県の昆虫, (下): 21-95. 愛知県.
小岩屋 敏, 2007. 182. フジミドリシジミ. 世界のゼフィルス大図鑑解説編: 283-284. むし社, 東京.
大曾根 剛, 2005. 愛知県のフジミドリシジミの分布資料. 佳香蝶, 57 (223): 41-43.

【関連文献】

- 白水 隆, 2006. フジミドリシジミ. 日本産蝶類標準図鑑: 107. 学習研究社, 東京.
佐藤純彦, 1972. 愛知県北設楽郡でフジミドリシジミを採集. 佳香蝶, 24 (90): 4.

(2009年版を一部修正)

エゾミドリシジミ *Favonius jezoensis* (Matsumura)

【選定理由】

愛知県では、1955年に豊田市（旧稲武町黒田ダム）で初めて記録された。その後、豊田市東部や北設楽郡各所での散発的な採集記録がある。1回で採集される越冬卵、成虫ともいずれの場所においても少ない。

【形態】

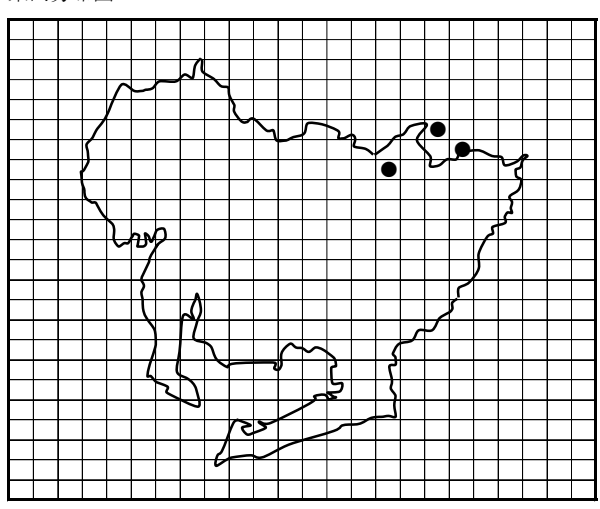
前翅長 21mm 前後。♂は表面の大部分が金緑色であり後翅表外縁の黒帯は幅広く一定の太さを有する。尾状突起は、近似種の中では太く短い。♀は表面に全く金緑色鱗はない。近似種のヒロオビミドリシジミ、ジョウザンミドリシジミ（共に愛知県未記録）ならびにハヤシミドリシジミ、オオミドリシジミによく似ており識別は難しい。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊田市（旧稲武町、1955年成虫採集）と豊根村（旧豊根村、1988年、1995年越冬卵採集）の3例のみの記録がある。それ以降しばらく公式記録はなかったが、2018年に記録されるとともに、少ないながら継続して生息が確認されている。

県内分布図



【国内の分布】

国後島、北海道、本州、四国、九州に分布する。北海道および本州北・中部の山地にはやや広く分布するが、本州西南部の暖地では山地のみに発見される。

【世界の分布】

サハリンにも分布する。日本列島ならびにサハリン、国後島を含めた地域の特産種である（小岩屋, 2007）。

【生息地の環境／生態的特性】

主にミズナラやコナラの生える山地の落葉広葉樹林に生息し、北海道では平地にも生息する。本州北・中部の産地にはやや広く分布するが、本州西南部や四国、九州では山地性の傾向が強まる。♂の活動時間帯は主に午後で、12時を過ぎると活動を開始し、15～17時にピークを迎え夕暮れまで活動は続く（江田, 未発表）。溪流や林道に面した枝先で占有行動をとり、他の♂を追尾した後はもとの位置に戻る。卍巴飛翔の頻度は近似種に比べ高い。クリの花などで吸蜜し、♂は吸水もする。卵で越冬する。卵はミズナラやコナラなどの樹幹・太枝上の亀裂部や褶曲部・枝の分岐部などに産卵されるので見つけるのはかなり困難である。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県での公式記録は極めて少ないが、豊田市東部、豊根村などに記録があるほか、未発表の記録を含めると豊田市、北設楽郡（豊根村、設楽町、旧津具村）一帯で少ないながら継続的に採集されていることなどから、少ないながらも安定した状況で棲息していると考えられる。年1回の発生。6月末～7月に出現し、ミズナラを主とした落葉広葉樹林に生息する。生息環境で競合する近縁種ジョウザンミドリシジミの生息しない産地では、越冬芽に産卵されることが知られている。

【保全上の留意点】

現段階では、環境の大きな変化は見られない。

【引用文献】

小岩屋 敏, 2007. エゾミドリシジミ. 世界のゼフィルス大図鑑解説編: 274-275. むし社, 東京.

【関連文献】

大曾根 剛, 2005. 岐阜県恵那山系のエゾミドリシジミの記録. 佳香蝶, 57 (223): 54.
鈴木哲彦ほか, 1988. 愛知県のミドリシジミ類一分布と生息環境一. 佳香蝶, 40 (153): 5-14.
松原 旭, 2018. 愛知県のエゾミドリシジミについて. 月刊むし, 570: 29-30.

(2009年版を一部修正)

ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice japonica* (Ménétrières)

【選定理由】

本種は、草原性のチョウで、かつては名古屋市などの低地も含め全県にわたり比較的多く観察されていた。近年はこのような低地のみならず、山地の草原でも個体数はかなり減っている。全国的にも減少しているという。

【形態】

前翅長 29mm 程度、ヒョウモンチョウ類の中ではやや小型である。♀は大型、翅形は丸みを帯び前翅表面の先端に白点がある。後翅裏面の外半分が褐色をしている。この特徴はオオウラギンスジヒョウモン、メスグロヒョウモンのみに共通するが、前翅の翅端・外縁のくびれ度合い・後翅の点状の黒紋の有無などから容易に区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

名古屋市などの低地から、県内各地の丘陵地・山地まで広範囲にわたり分布する。

【国内の分布】

北海道、本州、四国、九州南部まで分布する。種子島・屋久島およびそれ以南の南西諸島からは知られていない。

【世界の分布】

サハリン、朝鮮半島、中国東北部、ユーラシア大陸の北部まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

本種がもっとも多く見られるのは、標高 500~1,000m くらいの疎林の周辺の草原で、開けた草原よりも低木を交えた草原や疎林を好む習性がある。愛知県や岐阜県の低地では、ヒメヒカゲの生息する湿原に、ヒメヒカゲとほぼ同じ時期に湿原の上を飛翔している本種がよく見られた。

低地の産地では、年 1 回 6 月を中心として現れ、盛夏には姿を消し、秋に再び活動を開始し、アザミ類、ヒヨドリバナ、ソバの花などで吸蜜する。卵ないしは孵化したままの 1 齢幼虫で越冬する。飼育下では、各種のスミレ類を食し羽化する(高橋, 1984; 田中, 2004)。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年、名古屋市内、豊橋市内や濃尾平野、知多半島などでの記録は著しく減少している。以前比較的多く産した尾張や三河の低山から奥三河の山地でも個体数の減少が著しく、まれにしか確認できない。減少の理由は明らかでない。かつて多産した時代にあっても、本種の幼虫を野外で発見する機会は著しく少なく、したがってその生態や食草との関係はほとんどわかっていない。

【保全上の留意点】

本種の減少が単にスミレ類全体の減少によるとは考えられない。現時点で本種の生態に不明な点が多く、具体的な保全対策の提案が困難である。しかし、本種を含め草原性のチョウが全般に減少している現実から、草原の保全は最低限の条件であろう。

【引用文献】

高橋 昭, 1984. チョウ類. 愛知の動物: 133. 愛知県郷土資料刊行会.
田中 蕃, 2004. レッドデータブックなごや 2004 動物編: 164. 名古屋市環境影響評価室, 名古屋.

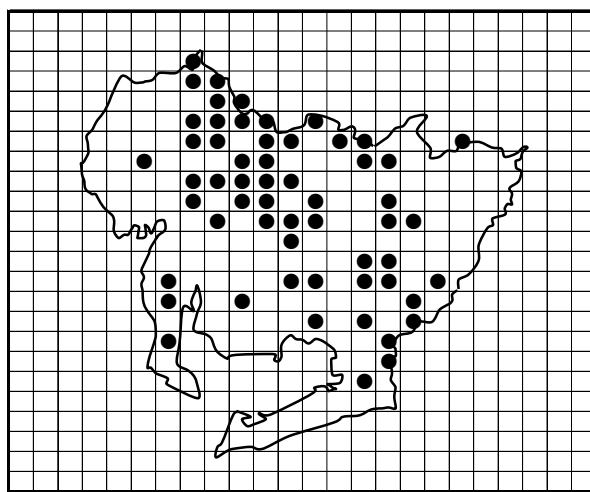
【関連文献】

白水 隆, 2006. ウラギンスジヒョウモン. 日本産蝶類標準図鑑: 213-214. 学習研究社, 東京.
高橋匡司ほか, 2001. 旭町のチョウ類. 旭町の昆虫: 253. (財)旭高原自然活用村協会.



豊田市(旧旭町), 1999年6月20日, 高橋匡司 採集

県内分布図



(2009年版を一部修正)

ウラナミジャノメ *Ypthima multistriata* Butler

【選定理由】

愛知県の本種は、鳳来寺山から 1937 年に初めて報告されたが、しばらくの間採集例がなかった。戦後になってから、名古屋市や犬山市などから産地が見つかり(高橋, 1959)、局地的に多産する産地もいくつか知られた。これらの産地には、路傍の草地など平凡な自然環境のところもあるが、本種は県下ではヒメヒカゲやハッチョウトンボを産する湿原との結びつきが強く、新城市などに広く分布している。この傾向は岐阜県東濃地方や静岡県などとも共通する。最近では湿地が消滅するとともに本種も激減し、名古屋市内およびその周辺などではまったく見られなくなった。

【形態】

前翅長は、春型で約 20mm、夏型で約 18mm の小型のジャノメチョウ科。近似種のヒメウラナミジャノメに類似する。翅表は暗褐色で、前翅に 1 個、後翅に 1 個の眼状紋をもつ。

裏面は本属特有のさざなみ様の縞模様で、眼状紋が前翅に 1 個、後翅に 2 個ある。眼状紋の数は個体変異がある。ヒメウラナミジャノメが後翅裏面に通常 5 個あるのに対し、本種では、ほとんどの個体で 3 個、また一番上のものが最大であることから区別は容易である。♀は♂に比し、やや大きく、翅表の色彩が淡く、翅表の眼状紋の周囲の黄色の輪が広く明瞭である。春型に比して、夏型はやや小型となり、ヒメウラナミジャノメとほぼ同大となる。

【分布の概要】

【県内の分布】

犬山市、名古屋市、春日井市、瀬戸市、日進市、長久手市、知多郡武豊町、豊田市、岡崎市、新城市などから知られる。西部の水田地帯や木曾川の堤防、北設楽郡などの山地からは報告がない。尾張や豊田市の産地は岐阜県東濃地方の産地と連なる。近隣の長野県木曾郡南部にも採集記録がある。

【国内の分布】

本州、四国、九州に分布する。一般にその産地は局地的。東限は神奈川県小田原市、北限は福井県南部青葉山付近。

【世界の分布】

朝鮮半島、中国、台湾に産する。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県や岐阜県東濃地方では、湿地、またはその周辺を生息地とするところが多く、これらの産地ではヒメヒカゲとほぼ同時に発生する。しかし、ごく平凡な路傍から得られることもある。静岡県西部では天竜川の堤防に多産する。このような堤防上の産地は愛知県では知られていない。ヒメウラナミジャノメよりは明るい環境を好む。

西南日本では通常年 2 回発生する。愛知県では第 2 化(夏型)は、東加茂郡旭町笹戸(現豊田市笹戸町、藤岡町)、旧南設楽郡海老町(現新城市海老)、旧守山区志段味町(現名古屋市守山区)、岡崎市などで 8 月下旬から 9 月中旬にわたる記録がある(高橋, 1961)。飼育では第 2 化は 8 月中旬から 9 月中旬にかけて羽化期の幅が大きい。成虫は草地を低く飛び、すぐ下草の葉上にとまる。訪花や、地面に止まる習性は乏しい。幼虫は各種のイネ科やカヤツリグサ科植物の葉を食べるが、野外での確認された食草は少ない。中齢幼虫で越冬する。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市周辺からはほとんど見られなくなった。尾張地方全体でも激減している。東三河では、最近の観察例も少なくない。この現象はヒメヒカゲによく似ており、減少の要因は発生地である湿地の減少と思われる。路傍の草地から幼虫を採集したことがあり、舗装などによる草地の減少が原因の可能性が大きい。

【保全上の留意点】

ヒメヒカゲと同様に発生地の保全が第一である。舗装や農薬散布なども最低に留めることが望まれる。

【特記事項】

本種の年 1 化か年 2 化かは、環境によるものか遺伝的なものかが、なお明らかでない。

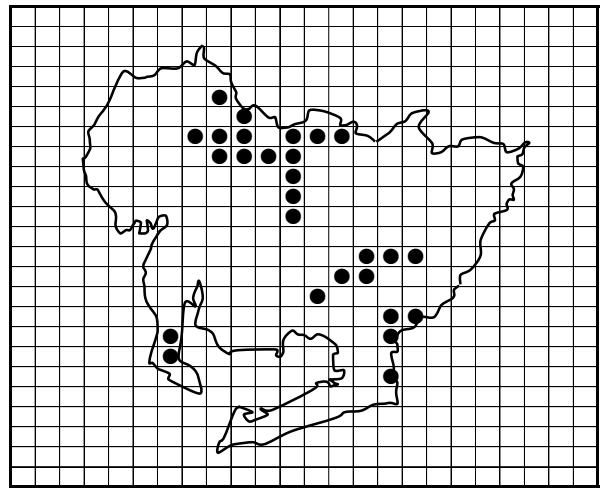
【引用文献】

高橋 昭, 1959. 守山市龍泉寺附近のウラナミジャノメ. 佳香蝶, 11 (40): 93.

高橋 昭, 1961. 愛知県東加茂郡旭村におけるウラナミジャノメ第 2 化の採集報告. 佳香蝶, 13 (48): 199-200.

(2009 年版を一部修正)

県内分布図



コキマダラセセリ *Ochlodes venatus* (Bremer et Grey)

【選定理由】

愛知県では1951年に北設楽郡豊根村茶臼山で初めて記録されて以来、旧稲武町(現豊田市)など僅かな記録しかなかったが、2000年代に入り北設楽郡豊根村、豊田市大野瀬町で継続的発生が確認された。しかし、近接する岐阜県東濃地方などでは、近年激減が報告されており、同じ生息圏内の減少と考えられる。

【形態】

前翅長16~18mm前後。♂の前翅地色は橙色で、中室下縁に黒い性標が目立つ。前翅の外縁、後翅の周辺は黒褐色の縁取りが強いものから弱いものまで変異が大きい。♀の表面は全体に暗褐色、亜外縁の橙黄色の斑紋が弧状に並ぶ。同属のヒメキマダラセセリに似るが、本種の方が大きく、裏面の翅脈が細く不明瞭であることから区別は容易である。また、別属のアカセセリ(愛知県からは未記録、コキマダラセセリに比し、発生期がやや遅い)に類似するので注意が必要である。アカセセリは、♂の性標の中心に銀白色の鱗粉があり、♀では前翅表面第2室の基部に斑紋がない。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県での確実な報告は、北設楽郡豊根村(茶臼山、坂宇場)、旧稲武町(現豊田市大野瀬町三国山池ヶ平牧場付近)のみであった。このほか、豊田市滝脇町からトラップにかかったという個体が報告されているが、同定者が不明、標本も現存せず、保留としたい(高橋・村瀬, 2007)。近隣の岐阜県東濃地方の低山地からはいくつかの報告があり、丘陵地の湿地やその周辺の草地から記録されているが、隣接する愛知県の丘陵地や旧作手村などの三河高原からはこれまで報告がない。

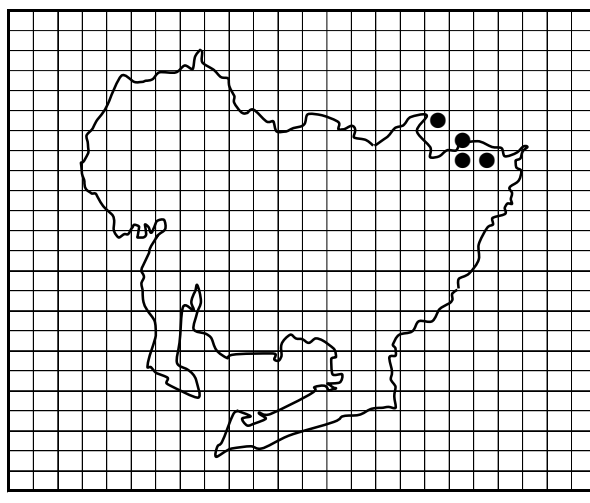
【国内の分布】

北海道、本州に分布する。北海道では平野部に普通に見られ、本州では東北地方から山口県まで山地に分布するが、近畿地方には広い分布空白地がある。東濃地方の低標高の産地は例外的である。

【世界の分布】

国外ではヨーロッパから日本までユーラシア大陸に分布する。しかし、すべて同一種かについては今後の検討が必要である。

県内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

一般に明るく広いススキが多い草原を好む。北海道では路傍などの草地にも生息する。岐阜県東濃地方では湿地との結びつきが強く、同様な傾向は中国山地にも見られる。これらの産地ではヒメヒカゲやゴマシジミを産するところが多い。年1回の発生。湿地性の三国山では6月下旬~7月上旬。草原性の茶臼山では、8月上旬前後に最盛期を迎え、発生時期には1ヵ月近い差がある。♀はやや遅れて羽化する。天気の良い時に、明るい草原上を敏捷に飛び、各種の草花を訪れる。各種のイネ科植物に産卵し、中齢幼虫で越冬する。越冬後の老熟幼虫はススキから見出されることが多い。草刈りなどによって維持されている場所では比較的個体数が多いものの、草地の管理放棄などによる環境の悪化によって生息地は限定される。

【現在の生息状況／減少の要因】

豊田市大野瀬町三国山池ヶ平では、湿性草原およびその周辺草地から見いだされ、東濃地方と同様湿原との結びつきが強い。一方、北設楽郡豊根村坂宇場(茶臼山、萩太郎山など)では、長野県で多く見られる明るく広いススキが混在した草原に依存している。茶臼山では、牧場の一部が利用されなくなり、クマザサなどの繁茂から草地が狭くなり個体数を減じている。また、萩太郎山では、スキー場等観光目的に利用されているため草刈りが行われ草地が維持されているが、経年の草刈りによりアザミ、マツムシソウなどの吸蜜植物が激減し個体数を減じている。1951年に茶臼山で初めて記録されて以来、1957~1970年に北設楽郡豊根村の一部の地で少数の記録があるに過ぎなかったが、1993年7月に北設楽郡稲武町(現豊田市大野瀬町)池ヶ平牧場跡地で新たに生息が報告され、2006年7月4日に数頭を採集確認した(高橋昭・田中蕃, 未発表)。2019年7月8日現地、チョウ類調査を実施し、1個体を確認した。

【保全上の留意点】

湿地の保全、草地の適度の草刈りなど生息地の保全が最も重要である。

【特記事項】

自然状態での産卵植物、幼虫、蛹の観察例は日本全体でもごく少ない。

【引用文献】

高橋 昭・村瀬卓平, 2007. 愛知・長野県境茶臼山のコキマダラセセリ. 蝶研フィールド, 22 (4): 16-17.

(2009年版を一部修正)